

岩手県文化財調査報告書第117集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

— 第56次発掘調査概報 —



平成15年3月

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第117集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

—— 第56次発掘調査概報 ——

平成15年3月

岩手県教育委員会



カラー写真1 56次調査区全景



中国産陶磁器



折敷（表）



折敷（裏）

序 言

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、12世紀北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏の残した遺跡であり、古から先人先学がこの地を訪れて往時の栄華に思いをはせた地でもあります。

本遺跡は、一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道4号改修平泉バイパス建設事業に伴い、昭和63年から(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会により事業予定地内の緊急発掘調査が実施されました。調査の進行にともない、大規模な掘立柱建物跡・圍池跡・井戸跡・塀跡が発見され、また、おびただしい量のかわけ・墨画資料・各種木製品など、質・量ともに内容豊かな遺物が出土しました。これらの遺構・遺物は、12世紀後半、特に奥州藤原氏三代秀衡との関連が強く、本遺跡が『吾妻鏡』にみられる「平泉館」であるとの考えが多くの歴史家から指摘されているところでもあります。

このような経過のなかで、遺跡に対する建設省(現国土交通省)のひとかたならぬ御理解により、平成5年には遺跡の永久保存が決定し、平成9年3月には「柳之御所遺跡」として国の史跡に指定されました。

県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、この遺跡を後世に伝えるとともに広く活用されることを願い、将来的には史跡公園として整備し、平泉文化を全国に発信して参りたいと考え、平成10年度から本格的な発掘調査を実施しております。本年度は第2次三カ年計画の2年次となります。

本年度は、遺跡中樞部を囲む2条の堀跡の追跡調査を実施しました。調査の結果、30数基のトイレ状遺構が集中して見つかり、当時の生活の様子を具体的に分析できる資料が発掘されました。また、平泉では初めてとなる中国南部の吉州窯製の陶器片も出土し、奥州藤原氏の経済基盤の豊かさの一端を知る手がかりも発見されています。

この報告書は、平成14年度第56次調査発掘成果をまとめたものですが、文化財保護と平泉文化研究発展の一助になれば幸いと存じます。

調査の実施と報告書作成に当たり、御指導御援助賜りました、柳之御所遺跡調査整備指導委員会の先生方をはじめ、文化庁記念物課、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所等の関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

平成15年3月

岩手県教育委員会

教育長

五十嵐 正

例 言

1. 本書は、岩手県教育委員会が平成14年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る、史跡柳之御所遺跡の発掘調査の概要報告である。調査期間は平成14年5月13日から11月29日までである。
2. 本事業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が主体となり、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

〈岩手県教育委員会事務局〉

生涯学習文化課長 吉川 健二
文化財保護監 小田野哲憲
文化財保護監補佐 伊藤 吉郎
主任埋蔵文化財主査 中村 英俊
柳之御所調査主査 齋藤 邦雄 (担当)
文化財専門員 佐々木 務 (担当)
文化財調査員 戸根 貴之 (担当)

〈(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター〉

所 長 木村 昇
調査第一課長 佐々木 勝
文化財調査員 杉沢昭太郎 (担当)

3. 遺構の呼称は、昭和63年度に(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用した。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。
SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物 SC：道路状遺構 SD：溝・塚 SE：井戸・井戸状遺構
SG：圃池 SK：土坑・柱穴の一部 SX：その他 SI：堅穴住居 P：柱穴
例：56SB1 第56次調査の第1号掘立柱建物跡
4. 図版、写真図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については一部を除いて1/3を基本にしており、スケールを図中に表示した。遺構遺物写真については縮尺不定である。
5. 調査成果の一部については、柳之御所遺跡調査整備指導委員会等で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。
6. 遺構の埋土観察、遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』を参考にした。
7. 柳之御所遺跡調査整備指導委員会の委員の先生方をはじめとして、下記の方々・機関の御協力を得た。
(順不同：敬称略)
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 岩手県立博物館 平泉町教育委員会 平泉町文化財センター 柳之御所資料館
8. 本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は、岩手県教育委員会が保管している。

目次

表紙写真

56SD39堀跡断面

巻頭カラー

56次調査区(北が上)

出土遺物

序言

例言

本文目次

第I章 はじめに	1	3 中国産陶磁器	31
第II章 検出遺構	5	4 瓦	32
1 掘立柱建物跡	5	5 木製品	33
2 井戸状遺構	6	6 その他の遺物	33
3 土坑	6	第IV章 まとめ	80
4 溝・堀跡	9	第V章 付属	84
5 その他の遺構	11	1. 柳之御所から出土した木製品の樹種	91
第III章 出土遺物	31	2. 柳之御所遺跡のテフラ	109
1 かわらけ	31	3. 柳之御所遺跡における花粉分析	112
2 国産陶器	31	4. 柳之御所遺跡におけるトイレ遺構分析	117

表目次

柱穴計測表	63	瓦観察表	73
かわらけ観察表	67	木製品観察表	73
国産陶器観察表	69	出土遺物計測値	78
中国産陶磁器観察表	72		

図版目次

第1図 56SB1・56SB7	14	第13図 溝・堀断面⑤	26
第2図 56SB2・56SB5	15	第14図 溝・堀断面⑥	27・28
第3図 56SB3・56SB8	16	第15図 その他の遺構(SX)	29
第4図 56SB4・56SB6	17	第16図 整地層断面	30
第5図 56SE1・56SE3・56SK25	18	第17図 かわらけ(1)	34
第6図 56SK26~56SK31	19	第18図 かわらけ(2)	35
第7図 56SK32~56SK34・56SK43・56SK67	20	第19図 かわらけ(3)	36
第8図 56SK53・56SK80・56SK99・焼土	21	第20図 かわらけ(4)	37
第9図 溝・堀断面①	22	第21図 常滑産陶器(1)	38
第10図 溝・堀断面②	23	第22図 常滑産陶器(2)	39
第11図 溝・堀断面③	24	第23図 常滑産陶器(3)	40
第12図 溝・堀断面④	25	第24図 常滑産陶器(4)・瀬美産陶器(1)	41

第25回	渥美産陶器 (2)	42
第26回	渥美産陶器 (3)	43
第27回	渥美産陶器 (4)・須恵器系陶器 (1)	44
第28回	須恵器系陶器 (2)	45
第29回	須恵器系陶器 (3)・その他の遺物	46
第30回	中国産陶磁器 (1)	47
第31回	中国産陶磁器 (2)	48
第32回	中国産陶磁器 (3)ほか	49
第33回	瓦 (1)	50
第34回	瓦 (2)	51

第35回	木製品 (1)	52
第36回	木製品 (2)	53
第37回	木製品 (3)	54
第38回	木製品 (4)	55
第39回	木製品 (5)	56
第40回	木製品 (6)	57
第41回	木製品 (7)	58
第42回	木製品 (8)	59
第43回	木製品 (9)	60
第44回	柳之御所遺跡遺構配置図	61-62

写真図版目次

写真図版1	第56次調査区航空写真	135
写真図版2	56S B 1・56S B 2	136
写真図版3	56SE1・56SE3・56SK6・56SK16・ 56SK44	137
写真図版4	56SK19・56SK23・56SK25~56SK27	138
写真図版5	56S K28~56S K31	139
写真図版6	56S K32~56S K36	140
写真図版7	56S K37~56S K43	141
写真図版8	56S K51~56S K53	142
写真図版9	56SK54~56SK60・56SK62~56SK64	143
写真図版10	56SK65~56SK70・56SK72・56SK73	144
写真図版11	56SK77・56SK80・56SK84・56SK85・ 56SK87・56SK89	145
写真図版12	56SK15・56SK90・56SK93~56SK96・ 56SK99	146
写真図版13	56SD19・56SD20・56SD38・56SD40・ 56SX3	147
写真図版14	56S D20・56S D38	148
写真図版15	56S D38・56S D39埋跡	149
写真図版16	56S D39 (T2)	150
写真図版17	56S D39 (T2)・熊間が淵 (T2)	151
写真図版18	遺物出土状況 (1)	152
写真図版19	遺物出土状況 (2) ほか	153
写真図版20	56SD20・56SD40	154
写真図版21	56SX16土橋・56SD40	155
写真図版22	整地層	156
写真図版23	その他の遺構	157
写真図版24	作業風景ほか	158
写真図版25	かわらけ (1)	159
写真図版26	かわらけ (2)	160
写真図版27	かわらけ (3)	161
写真図版28	かわらけ (4)	162
写真図版29	かわらけ (5)・国産陶器 (1)	163
写真図版30	国産陶器 (2)	164
写真図版31	国産陶器 (3)	165

写真図版32	国産陶器 (4)	166
写真図版33	国産陶器 (5)	167
写真図版34	国産陶器 (6)	168
写真図版35	国産陶器 (7)	169
写真図版36	国産陶器 (8)	170
写真図版37	国産陶器 (9)	171
写真図版38	国産陶器 (10)	172
写真図版39	国産陶器 (11)	173
写真図版40	国産陶器 (12)	174
写真図版41	中国産陶磁器 (1)	175
写真図版42	中国産陶磁器 (2)	176
写真図版43	中国産陶磁器 (3)	177
写真図版44	中国産陶磁器 (4)	178
写真図版45	中国産陶磁器 (5)	179
写真図版46	瓦	180
写真図版47	木製品 (1)	181
写真図版48	木製品 (2)	182
写真図版49	木製品 (3)	183
写真図版50	木製品 (4)	184
写真図版51	木製品 (5)	185
写真図版52	木製品 (6)	186
写真図版53	木製品 (7)	187
写真図版54	木製品 (8)	188
写真図版55	木製品 (9)	189
写真図版56	木製品 (10)	190
写真図版57	木製品 (11)	191
写真図版58	木製品 (12)	192
写真図版59	木製品 (13)	193
写真図版60	木製品 (14)	194
写真図版61	木製品 (15)	195
写真図版62	木製品 (16)	196
写真図版63	木製品 (17)	197
写真図版64	その他の遺物 (1)	198
写真図版65	その他の遺物 (2)	199

第I章 はじめに

1 調査経過

当教育委員会では、柳之御所遺跡が平成9年に国の史跡に指定されたことから、当遺跡を史跡公園として整備し保存活用を図るため、文化庁・柳之御所遺跡調査研究指導委員会の指導助言を得て、平成10年度から主に未調査区域を対象として内容確認の発掘調査を計画的・継続的に実施している。三ヶ年を1サイクルとし、第I期整備対象区域である堀内部地区を中心として調査を実施している。

平成11年度実施した第50次調査では、既往の調査で確認された菴池や大型の建物など、環で囲まれた中核域の周辺地域での12世紀代の遺構の広がりや密度を確認することを主要な目的として、遺跡の東側にあたる北上川右岸縁に調査区を設定し発掘調査を行った。その結果、12世紀代の遺構が現況の河岸縁まで分布し柳之御所遺跡の一部が北上川の侵食で失われていることが確認された。12世紀代の遺構についても、櫓や井戸状遺構の検出、複雑に重複する掘立柱建物などが多数検出され、複数時期にわたって遺跡が営まれたことが明らかにされた。また、「誓前村印」と刻印された銅印と器表面全体を漆の沁み込んだ麻布で被覆されたほぼ完全な形に近い白磁四耳壺が同一の井戸状遺構から出土した。地名を刻印したと推定される銅印の発見は、奥州藤原氏の統治システムを考察する上で貴重な資料となるばかりでなく、本邦の印章史の空白期を埋める資料として注目された。

平成12年度の第52次調査では、従来から指摘されていた菴池の周辺域の中心建物群とは異なるエリアから、建物の軸線の異なる大型の建物が検出された。これは、時期を異にして大型の建物で構成される複数の地域が存在したことであり、柳之御所遺跡の遺構の変遷を考えるうえで重要な課題を提示した。両者とも時期的には12世紀後半代、三代秀衡の時代に比定される遺構群であるが、中心域に移動があったことが想定されるものであり、この背景には平泉あるいは奥州藤原氏内部での何らかの重要な転換期を反映している可能性が考えられる。また、柳之御所遺跡は従来まで遺跡のピークが三代秀衡の治世12世紀第3四半期にあることが指摘されてきたが、今回の調査で新たに12世紀初頭あるいは前葉に位置づけられる一群の土器群が発見され、当遺跡が12世紀前半代初代清衡の時期まで遡ることが明らかになった。これは、政庁「平泉館」の性格あるいは、奥州藤原氏の平泉での確立期の状況を推定させる重要な発見である。

平成13年度の第55次調査では、新たに菴池の北側に大規模な建物の存在が明らかとなり、柳之御所遺跡の中核施設の移動が想定されるようになった。また、初代清衡の時代である12世紀初め頃のかわけがまとまって発見され、柳之御所遺跡の開始年代と遺跡の性格、ひいては平泉奥州藤原氏の設立期の問題を考える上で非常に大きな問題を示唆することとなった。

平成14年度は第2次三ヶ年計画の第2年次に該当し、通年で第56次調査に相当する。今年度は、第52次発掘調査の際に検出された大規模な堀（内堀）と張出施設を伴う溝の遺跡、北上川右岸縁での大型建物の展開の把握、遺跡を二分する外堀の遺跡をすることを目的として、堀内部地区の西側、堀に接する部分に調査区を設定した。

2 本年度の調査について

(1) 柳之御所遺跡調査整備指導委員会

当教育委員会では、平成10年度から柳之御所遺跡の内容確認調査を再開するにあたり、柳之御所遺跡調査研究指導委員会を設置し、柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査及び調査研究に対して指導助言を得てきた。平成12年に「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに追加登録されたことから、新たに3名の指導委員を委嘱し、委員会の名称を平成13年度から「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」に改めた。

さらに、今年度より柳之御所遺跡整備の基本計画策定の段階に入ることから、地元有識者2名の指導委員を新たに委嘱した。

本年度は以下の内容で委員会を開催した。

- ① 平成14年度第1回柳之御所遺跡調査整備指導委員会
平成14年7月26日(金) 平泉町役場
- ・柳之御所遺跡整備基本計画策定について(県教育委員会)
 - ・柳之御所遺跡第56次調査発掘調査計画について(県教育委員会)
 - ・平泉文化研究機関整備推進事業について(県教育委員会)
 - ・平泉遺跡群関連発掘調査計画について(平泉町教育委員会・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・岩手県立博物館)
 - ・現地視察 柳之御所遺跡(県教育委員会 中尊寺大池跡(平泉町教育委員会))
- ② 平成14年度第2回柳之御所遺跡調査整備指導委員会
平成15年2月13日(木) 平泉町役場
- ・柳之御所遺跡整備基本計画について(県教育委員会)
 - ・平泉町の都市計画等について(平泉町建設課)
 - ・平成14年度柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査成果等について(県教育委員会・岩手県立博物館・平泉町文化財センター)

柳之御所遺跡調査整備指導委員会

氏名	役職	専門分野	備考
入岡田 宜夫	東北大学東北アジア研究センター教授	歴史学(古代・中世)	
牛川 喜幸	京都橘女子大学教授	造園学・史跡整備	
遠藤 セツ子	メビウスの会代表	地元有識者	新任
岡田 茂弘	東北歴史博物館長	考古学(古代)	
小野 正敏	独立行政法人国立歴史民俗博物館助教授	考古学(陶磁器)	
河原 純之	川村学園女子大学教授	考古学(中世)	委員長
工藤 雅樹	福島大学教授	考古学・歴史学(古代)	副委員長
斉藤 利男	弘前大学教授	歴史学(中世)	
佐藤 信	東京大学大学院教授	歴史学(古代)	
清水 繁	東京工芸大学教授	建築学	
清水 真一	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 建造物研究室長	建築学	平成14年度より就任
関宮 治良	平泉町商工会事務局長	地元有識者	新任
田辺 征夫	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	考古学(歴史)	
玉井 哲雄	千葉大学教授	建築学	
西村 幸夫	東京大学大学院教授	都市工学	

柳之御所遺跡発掘調査年次別調査計画

年 次	調査回数	調 査 内 容 等	
第 1 次 三 ヵ 年 計 画	平成10年度	第49次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 堀内部地内の中心建物群、特に最大建物である南北棟4間9間42SB1（28SB4と一部重複）の東側地区の解明。 ・ 23次調査時の23SB2建物跡の延長確認。 ・ 23SA3柱列跡、23SA1堀跡の延長確認。 ・ 48SB1建物跡の延長確認と所属時期の検討。
	平成11年度	第50次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 池跡及び中心建物群を囲む23SA1堀跡の追跡。 ・ 4間9間の南北棟の東側の状況及び建物群の伸長。 ・ 42SD1大溝とされていた遺構の時期及び伸長状況追跡。 ・ 37次、42次の内容確認調査の時期に確認されていた溝・堀類の時期及び伸長状況の把握。
	平成12年度	第52次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 堀内部地区、中心建物群の北側地区の解明。 ・ 祭祀遺構周辺域の解明。 ・ 無量光院との対峙地域の解明。 ・ 堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。
第 2 次 三 ヵ 年 計 画	平成13年度	第55次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中心建物群の北側地区の解明。 ・ 中心建物群を囲むと推定される堀跡の検出。 ・ 堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。 ・ 現存する微高地状の高まりの性格把握。 ・ 北上川縁地域の状況把握。
	平成14年度	第56次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第52次発掘調査の際に検出された大規模な堀（内堀）と張出施設を伴う溝の追跡。 ・ 北上川右岸縁での大型建物の展開の把握。 ・ 遺跡を二分する外堀の追跡。
	平成15年度	第57次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。 ・ 北上川縁地域の状況把握。 ・ 堀外部地区との連絡施設（道路・橋等）の確認。

※ 第51次・53次・54次調査は平泉町教育委員会が実施。

(2) 調査の目的と調査の方法

平成14年度は柳之御所遺跡発掘調査第2次三カ年計画の2年目にあたり、堀内部地区の西側、堀に接する部分を主な調査対象地区として調査を実施した。

今年度は以下の内容を目的として調査を実施した。

- ① 第52次発掘調査の際に検出された大規模な堀（内堀）と張出施設を伴う溝の追跡。
- ② 北上川右岸縁での大型建物の展開の把握。
- ③ 遺跡を二分する外堀の追跡。

発掘調査にあたっては、昭和63年度の（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが行った緊急発掘調査の際に設定したグリッドに従った。グリッドの呼称についても同様である。

基本的には遺構の内容把握を主目的にしている。遺構の所属時期の確定・遺構の性格等を把握することを最優先しており、検出した遺構すべてを最終的な段階まで精査しているわけではない。なお、半載あるいは完掘した遺構については砂で埋め戻し、遺構面を保護し、可能な限り元の状態に復旧し保存を図っている。

柳之御所遺跡発掘調査年次計画

年 次	調査回数	調査面積	調査期間	予算(千円)	備 考	
第1次三カ年計画	平成10年度	第49次	500㎡	5月15日～10月31日	18,211	国庫補助
	平成11年度	第50次	1,800㎡	5月13日～10月31日	32,236	国庫補助
	平成12年度	第52次	2,500㎡	5月15日～11月17日	43,341	国庫補助
第2次三カ年計画	平成13年度	第55次	3,100㎡	5月11日～11月13日	46,103	国庫補助
	平成14年度	第56次	4,000㎡	5月13日～11月29日	62,054	国庫補助
	平成15年度		3,100㎡			

※ 平成14年度までは実績、15年度以降は予定

第Ⅱ章 検出遺構

今回の柳之御所遺跡56次調査は堀内部地区の中でも北西部から西端部にかけて調査区を設定した。北西部は北上川に一部面し、西端部は柳之御所を取り囲む堀跡に隣接する部分である。加えて堀間が淵の中にトレンチを複数設定し、堀跡の調査を実施した。

1 掘立柱建物跡

柳之御所遺跡56次調査では掘立柱建物跡が8棟検出された。今回の調査では遺構検出を原則とした調査であったため、遺物から所属時期を判断することができないものが殆どであるが、予測を含めて時期区分について見解を示したい。主に12世紀のものと同世のものに2大別される。

	遺 構 名
12世紀に属する建物	56S B 1、56S B 2、56S B 3、56S B 4、56S B 5
近世に属する建物	56S B 6、56S B 7、56S B 8

(1) 12世紀の建物

各建物の柱間寸法は1尺を30.3cm、面積は1坪を3.3㎡として計算している。時期的な位置付けや用途については、全体的な視点から他の遺構との兼ね合いを含めて考察せねばならず、ここでは詳しく述べない場合もある。

56S B 1 「三間四面」の建物と考えられるが南側の庇の柱穴が12世紀より新しい溝跡等によって失われている。この遺構はかつて本遺跡11次調査で検出された2号掘立柱建物跡と同じものであり、今回の調査でその全体規模を把握した。身舎の柱間寸法は桁行で8尺、梁間9尺を基調としているようである。庇の柱穴は小さいものが多く間尺もばらつきが目立つ。

56S B 2 前述した56S B 1と同様、11次調査で検出された1号掘立柱建物跡と同じもので、本調査で全体規模を確認した。「三間四面」の建物跡で桁行が約40尺、梁間が34尺を測る。新旧関係はS B 1よりもS B 2のほうが古い。

56S B 3 堀内部地区でも最も西側、堀のすぐ傍に位置している。P559は12世紀の整地層よりも新しいが大半の柱穴は整地層を除去して検出した。桁行は4間・34尺、梁間は3間・18尺を測る。

56S B 4 堀内部地区でも最も北西側、堀のすぐ傍らに位置している。柱穴は12世紀の整地層を掘り込んでいたが、出土遺物の中に12世紀以外の遺物は見られなかった。桁行が5間・33尺、梁間は2間・15.3尺を測り、P628により間仕切りされている。

56S B 5 平面プランでは56S B 3と重複するが、新旧関係は不明である。建物北側に対して、南側は標高が低くなっていること、東側には攪乱があることなどから建物の全体規模を把握していない可能性がある。

(2) 近世の建物

堀内部地区では北西側にあたる50-52グリッドを中心とした地区から3棟の建物を検出した。

56SB6 桁行4間、梁間2間で柱間寸法は8.3尺を基調としている。東側の梁行は3基の柱穴で構成されていると考えた。建物周囲には近世から近代の遺物が分布していることや、建物規模から農民の屋敷の主屋と考えられる。

56SB7 桁行3間、梁間2間でP346によって間仕切りをもつ建物と想定した。位置関係から56SB6に伴う付属小屋と考えられる。

56SB8 斜面部に立地し、規模は1×1間で柱痕も小さい。仮小屋的な施設と考えられる。

2 井戸状遺構

柳之御所遺跡56次調査では3基の井戸状遺構を検出し、その中で2基の井戸状遺構を精査した。

56SE1 66-53グリッドに位置し56SD19より古い。開口部は径2m程であるが、底面に向かうほど窄んでいく。底面は硬く締まった砂層に達しているが、それを更に一段掘り下げている。埋土の大半は地山ブロックを不規則に含む人為堆積である。かわらけは手づくね・ロクロ整形ともに見られ、1層と16層から主に出土し、他からはごく微量しか出土していない。常滑産陶器は4点、深美産陶器6点、須恵器系陶器1点、白磁1点、木製品（無加工含む）が1.5箱出土している。井戸状遺構の中では遺物量の少ない方である。

56SE3 57-58グリッドに位置している。現代まで機能していた木桶によって上部は掘削されていた。開口部で径2m程であるが、深さ1m付近までは窄まり、その下は垂直に掘り込まれていた。今回の調査は深さ約2.6mまでで中断している。埋土は基本的に地山ブロックを不規則に含む人為堆積である。かわらけは細片のみ、他に石製の鉢が出土している。

3 土坑

土坑は99基検出されている。12世紀の土坑は56SK1、3、6、12、19、24-43、51-60、62-70、72、77、80、84、85、87、89-91、93-97、99、101の59基がある。その他は近世から近代に属する可能性が高いと思われる。以下、実際に精査した12世紀の土坑を中心に記載する。

56SK31 62-50グリッドに位置している。周辺の類似した遺構からトイレ状遺構と考えられるが、それを裏付けるちゅう木や種子が確認されておらず、周辺で確認されているトイレ状遺構とは様相を異にする。埋土1層から中国南部の吉州窯で作られたと見られる陶器片が出土している。吉州窯製の製品の出土は平泉では初出である。この他にかわらけや、木製品等が出土している。

56SK33 63-50グリッド～64-50グリッドに位置している。遺構の深さから井戸状遺構と考えられるが、ちゅう木や種子の出土などから、後にトイレ状遺構に転用されたものと見られる。かわらけや常滑・深美などの国産陶器、白磁片、漆器碗や平瓦、鉄滓、全体に炭化している部材等も出土している。

56SK53 73-50グリッドに位置している。埋土には炭粒をほぼ全体に含んでいる。埋土につやのある黒色土があり、種子・ちゅう木なども出土することから、トイレ状遺構の特徴をもつ。かわらけと、常滑・深美

などの国産陶器の出土量がほぼ同じ量である。かわらけなどから、12世紀後半の遺構と考えられる。

56SK67 70-52グリッドに位置している。埋土につやのある黒色土があり、種子・ちゅう木なども出土することから、トイレ状遺構の特徴をもつ。かわらけの出土量が、他の精査したトイレ状遺構と比較して著しく少量である。

56SK80 56-50グリッドに位置している。整地層を掘り込んで構築されている。埋土上位の1層には人頭大の河原石を含み、埋土下位はグライ化している。精査途中で断面が崩落してしましたが、かわらけは各層から出土している他、瀬美産陶器2点、焼土塊、鉄製品等が出土している。

56SK99 56-51グリッドに位置し、整地層を掘り込んでつくられている。埋土には炭灰を多く含み、1層と3層からかわらけがまとめて出土した。他に産地不明陶器2点が出土し様々なものを廃棄する坑であったと考えられる。

遺構名	種別	時期	その他特記事項
56SK1(36SK30)	土坑	12世紀	
56SK2	土坑	時期不詳	56SK5及び56SK103より古い。
56SK3	土坑	12世紀	
56SK5	土坑	時期不詳	56SK103・56P73より古く、56SK2・56P87より新しい。
56SK6	土坑	12世紀	56SD19より古い。
56SK7	墓坑	近世以降	
56SK8	墓坑	近世以降	
56SK9	墓坑	近世以降	56SK19より新しい。
56SK10	墓坑	近世以降	56P160より新しい。
56SK11	土坑	時期不詳	56P197より古く、56SK18より新しい。
56SK12	土坑	12世紀	56SK23より古い。
56SK13	墓坑	近世以降	56P156より新しい。56P157と切りあうが、新旧関係は不明。
56SK14	墓坑	近世以降	
56SK15 (36SK30)	土坑	12世紀の可能性が高い	56SK24・56SK81・56SK82・56P639より古い。
56SK16	土坑	時期不詳	56SK44より古く、56SD15より新しい。
56SK17	土坑	時期不詳	56SD5・56SD6より古い。
56SK18	土坑	時期不詳	56SK11・56P93・56P98・56P99・56P100・56P101・56P197より古く、56SD15より新しい。
56SK19(36SK35)	土坑	12世紀	56SK9・56P153より古い。
56SK20	墓坑	近世以降	56SD40・56SX16より新しい。
56SK21	土坑	12世紀以降	56P210、56SD40・56SD12より新しい。
56SK22	墓坑	近世以降	56SD40より新しい。
56SK23	土坑	時期不詳	56SK12より新しい。砂が入っている。
56SK24	土坑	12世紀	56SK15(36SK30)より新しい。
56SK25	土坑	12世紀	かわらけ、木製品出土。
56SK26	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、種子、木製品、炭化物出土。
56SK27	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、種子、木製品、炭化物出土。
56SK28	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、同産陶器、中国産磁器、種子、木製品、炭化物出土。
56SK29	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、国産陶器、種子、木製品、炭化物出土。
56SK30	土坑	12世紀	木枠を検出。上部は削平を受けていると見られる。
56SK31	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、国産陶器、中国産陶器、木製品出土。中国産陶器は吉州窯の製品と考えられる。
56SK32	土坑	12世紀か	かわらけ小片出土。

56 S K33	井戸状遺構	12世紀	かわらけ、国産陶器、中国産磁器、平瓦、鉄滓、砥石、種子、木製品、漆器、炭化物出土。
56 S K34	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、国産陶器片、炭化物出土。
56 S K35	トイレ状遺構	12世紀	56 S D40より新しい。
56 S K36	トイレ状遺構	12世紀	56 S D40より新しい。
56 S K37	トイレ状遺構	12世紀	56 S D40より新しい。
56 S K38	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K39	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K40	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K41	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K42	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K43	土坑	12世紀	遺構の深さはあまりない。かわらけ、国産陶器、壁土出土。
56 S K44	土坑	近世以降	56 S D7・56 S D19より古く、56 S D15・56 S K16より新しい。
56 S K45	墓坑	近世以降	56 S D40・56 S X16より新しい。56 P209と切りあうが、新旧関係は不明。
56 S K46	墓坑	近世以降	56 S X16より新しい。
56 S K47	墓坑	近世以降	56 S D40より新しい。
56 S K48	墓坑	近世以降	56 S D40より新しい。
56 S K49	墓坑	近世以降	56 S D40より新しい。
56 S K50	墓坑	近世以降	56 S D40より新しい。
56 S K51	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K52	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K53	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、国産陶器、種子、木製品出土。
56 S K54	トイレ状遺構	12世紀	56 P265より古い。
56 S K55	トイレ状遺構	12世紀	56 P267より古い。
56 S K56	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K57	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K58	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K59	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K60	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K62	トイレ状遺構	12世紀	56 S K63より古い。
56 S K63	トイレ状遺構	12世紀	56 S K62より新しい。
56 S K64	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K65	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K66	トイレ状遺構	12世紀	56 P291より新しい。
56 S K67	トイレ状遺構	12世紀	かわらけ、木製品出土。
56 S K68	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K69	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K70	トイレ状遺構	12世紀	
56 S K71	土坑	時期不詳	
56 S K72	土坑	12世紀	56 S K73より古い。
56 S K73	墓坑	近世以降	56 S K72より新しい。
56 S K74	墓坑	近世以降	56 S X16・56 S D40より新しい。56 P163と切りあうが、新旧関係は不明。
56 S K75	墓坑	近世以降	56 P320・56 S X16・56 S D40より新しい。
56 S K76	墓坑	近世以降	寛永通宝出土。
56 S K77	土坑	12世紀	56 P423より新しい。
56 S K78	土坑	時期不詳	56 P349より新しい。56 P351と切りあうが、新旧関係は不明。
56 S K79	土坑	時期不詳	
56 S K80	井戸状遺構	12世紀	整地層よりも新しい。かわらけ、国産陶器、漆製品、壁土出土。
56 S K81	土坑	時期不詳	56 S K15 (36 S K30) と切りあうが、新旧関係は不明。
56 S K82	土坑	時期不詳	56 S K15 (36 S K30) よりも新しい。
56 S K83	土坑	時期不詳	

56 S K 84	土坑	12世紀	56 S D 29・56 S X 10より新しい。
56 S K 85	土坑	12世紀	
56 S K 86	土坑	時期不詳	
56 S K 87	土坑	12世紀	
56 S K 89	土坑	12世紀か	
56 S K 90	土坑	12世紀か	56 S D 20より古い。
56 S K 91	土坑	12世紀	56 S D 34より古い。
56 S K 92	墓坑	近世以降	56 S D 40より新しい。
56 S K 93	土坑	12世紀か	56 S K 94より古い。
56 S K 94	土坑	12世紀か	56 S K 93・56 P 744・56 P 745より新しい。
56 S K 95	土坑	12世紀か	56 S K 96より古い。
56 S K 96	土坑	12世紀か	56 P 742より古く、56 S K 95より新しい。
56 S K 97	土坑	12世紀か	
56 S K 99	土坑	12世紀	整地層より新しい。かわらけ、国産陶器、中国産陶器出土。
56 S K 100	墓坑	近世以降	
56 S K 101	土坑	12世紀	56 S D 20より古い。
56 S K 102	墓坑	近世以降	56 S D 10より古く、56 P 198より新しい。
56 S K 103	土坑	時期不詳	56 S K 2・56 S K 5より新しい。

4 溝・堀跡

56次調査では35条の溝跡と3条の堀跡を検出した。この内、12世紀に属する溝はSD4・20・24・28・41である。同様に堀跡SD38～40が12世紀の遺構である。溝の平面図は長大になるため遺構配置図を参照して頂きたい。

〈溝跡〉

56 S D 4 掘立柱建物跡56 S B 1を構成するP33とP48とを結ぶように検出された。埋土は人為堆積と判断した。本遺構も建物跡に関連すると考えられる。出土遺物なし。

56 S D 20 66～53グリッドから59～60グリッドにかけて検出された。過去に報告された41 S D 1、52 S D 26と同じ遺構である。56 S D 38・56 S D 40より新しく、56 S D 21より古い。今回の調査ではその全体規模を把握した。全長は約85mで上幅は1～4m、深さは0.2～1.1mを測る。標高の最も高いところ(66～53)から掘り込みが開始されていることを断面観察から確認した。本溝はそれから低い方へ蛇行して流れ、最も西側に面した部分は「コ」字状の張出をもつように掘削されている。それからは南側へ向きを変え柳之御所を取り囲む堀跡56 S D 38に流れ込んでいる。本遺構から柳之御所を囲む堀跡56 S D 38に土砂を流し込む状況把握した結果、56 S D 38は12世紀後半頃にはかなり埋まっていたことも明らかになったのである。

埋土は基本的に自然堆積である。これまでの調査により本遺構は1189年の奥州藤原氏の滅亡時に開口していたと推測されており、柳之御所遺跡の最終段階の遺構と位置付けられている。多量のかわらけの他、150片を越える国産陶器、白磁6片(193g)、瓦、焼土塊などが出土している。

56 S D 24 60～49グリッドに位置する。12世紀の遺構と思われる56 S X 15と同時期か古い溝跡である。

56 S D 28 56～52グリッドに位置している。12世紀の整地層を掘り込んで構築されているが、埋土の質感から近世以降の遺構ではないと判断した。かわらけが少量出土している。

56 S D 41 58～49グリッドに位置し、12世紀の整地層を掘り込んで構築されているが、本遺構も12世紀段階

に機能していた可能性が高い。

〈堀跡〉

柳之御所堀内部地区を取り囲む2条の堀は、内側の堀を56SD38、外側の堀は56SD39とした。今回の調査では、柳之御所と無量光院との間に立地する猫間が淵と呼ばれる低地にT1-T4としたトレンチを設定してこれらの堀跡を検出し、一部精査も行った。

56SD38 (41SD2) 後述する56SD39とほぼ平行に走り、堀内部地区を取り囲む堀跡である。56SD38として今回の調査では、長さ約20m、幅約3mのトレンチを57-65グリッド、58-65グリッドに設定した。遺構は現在の町道の下を通るために、町道の東側を中心とした一部分を調査したに過ぎないものの、今回設定したトレンチとT2の東端で、両端が確認されている。上幅は約10m、深さは少なくとも3m以上あるものと考えられる。遺物としては、かわらけ24,775g、常滑・瀬美・須恵器系などの国産陶器片2,174g（うち、常滑988g、瀬美1,140g）、中国産磁器51g（白磁21g・青白磁30g）、平瓦、丸瓦、柱状高台、壁土、下駄や鍛などの木製品等が出土している。かわらけや陶磁器の出土量は、外側の堀（56SD39）と比べるとかなり多いのが特徴である。かわらけや陶磁器等の遺物出土状況から、12世紀後半には埋まりかけているものと考えられる。また、28層より下層については出土遺物の主体は木製品となる。堀土の土質もシルト質が主体となり、間に砂質土が入ってくる。

なお、27層から、焼成及び保存状況がよくなかったため、図化できなかったものの、比較的大きな丸瓦の破片が1点出土している。

56SD39 (T1) では遺構検出のみを行った。上幅は6.5mを測り56SD38との距離は最短で7.2m程である。表土からは瓦が57片と比較的多く出土している。

56SD39 (T2) は現地表面から35-85cm掘り下げた段階で検出された。56SD37より古い。上幅約6.5m、下幅3.3m、深さは約2.1mを測る。底面は概ね平坦で断面形は逆台形を呈する。断面A-Bはトレンチの北西面、C-Dは南東面である。埋土は基本的に自然堆積の様相を呈する。泥質及び砂質土が交互に流れ込んでおり、地表から1m以上深くなるとグライ化が著しい。これは猫間が淵の堆積土にも言えることで、堀と猫間が淵の土をはっきりと区別して掘り下げるのは非常に難しかった。そのため最初に断面A-Bでは散って掘りすぎ気味にサブトレンチを入れて堀の規模を断面で把握してから全体の精査に入った。精査の結果、断面A-Bを作成した地点では堀の底面からの立ち上がり（西側）が極端に緩やかになっていることが明らかになった。これは抑々、猫間が淵という土質の柔らかい低地を掘削して堀を構築しているため、壁が崩落したためと推察される。56SD38とは最短距離で3.7mを測る。出土遺物を見ると、かわらけ(5,130g)、常滑産陶器9片、瀬美産陶器15片、白磁3片、瓦3片が出土したほか木製品（無加工含む）がコンテナ(42×32×30cm)で7箱出土した。

56SD39 (T3) では遺構検出のみを行った。上幅は8-9mを測る。

56SD39 (T4) は現地表面から25-50cm掘り下げた段階で検出された。上幅は5.5m以上、下幅2.8m、深さ1.2mを測り、底面は平坦で断面形は逆台形を呈する。埋土は基本的に自然堆積である。個々の堆積土については注記を参照して頂ければ判るが、要約すると泥質・砂質土が交互に流れ込んだ様相を呈し、グライ化が著しい。東側の壁はいわゆる地山であったのに対し、西側は猫間が淵の堆積土が壁になっている。出土遺物を見るとかわらけ(8,830g)、常滑産陶器14片、瀬美産陶器18片、須恵器系陶器2片、白磁4片、青磁1片、焼土塊2片、羽口1片の他、木製品・動植物遺体がコンテナ(42×32×30cm)で3箱見られた。こ

の中には底部に脚が取り付くと見られる折敷(4109)がある。

盛土地業 堀の遺構検出面に於いて56SD39の両側辺沿いに人為的に盛土された部分が検出された。言い方を変えれば56SD38と56SD39の間と、56SD39に西隣して盛土の広がりを確認した。猫間が濶に設定したT1-T4のトレンチ何れにもこうした盛土が分布していることが明らかとなった。T2の断面A-Bでは①②層と、4-7層が相当する。T4の断面A-Bでは1-3層がこれにあたる。層厚は40-70cmで上部は水田耕作によって削平されており上部構造は不明である。黄褐色土と黒褐色土の混合土が主体で、これは堀を構築した際に生じる土質とは明らかに異なる。猫間が濶以外から持ち込まれていると考えるのが妥当であろう。56SD38は明瞭にこの盛土を切って掘り込まれていた。一方、56SD39も盛土を切るか盛土と同時並行で掘り込まれたように断面では観察された。2条の堀には盛土を介して新旧関係があり、56SD38より56SD39のほうが最初に構築されたと言える。しかし2条の堀の時期的な差は殆どないという印象をもつ。56SD39(及び盛土)を構築し、直ぐに56SD38を掘削したと解釈したい。遺物は殆ど入らず甕産陶器3片、瓦1片が出土したに過ぎない。前述したように上部が削平されているため性格については難しい。現段階の見解としては2条の堀の間に土壘が存在していたが、軟弱な猫間が濶に堀を構築したため崩れを防ぐための地業かを想定している。

56SD40 65-50グリッドから57-59グリッドにかけて位置している。52SD26の古段階と同じ遺構である。12世紀の遺構と考えられる56SK35-37、同じく12世紀の56SD20よりも古い。今回の調査でその全体規模を把握することができた。全長約65mで西側に緩やかに膨らむ弓状を呈する。上幅が5-6m、下幅3.5-4m、深さは0.8-1.2mを測る。底面は概ね平坦で底面の標高は、北側が高く南側が低くなる。全体規模を把握したと前述したように、両端部が検出されたため、その部分をそれぞれ精査し、平面だけでなく断面の観察に於いて明らかに底面から垂直気味に外傾して立ち上がっている壁面を確認した。よって削平によってプランが徐々に失われていくといったことは決してない。これは56SD20の北端部も同様である。埋土は底面から底面直上にかけて薄く黒褐色土を主体とする自然堆積層が見られる他は人為堆積である。所謂地山ブロックを多量に含む暗褐色土で一気に埋め戻されている。また本遺構には62-52グリッド付近に小規模な土橋(56SX16)が設けられている。出土遺物はこの埋め戻された土からのみ少量出土している。本遺構に伴うとみせる底面付近からは自然木片しか出土していない。しかしながら、他の12世紀の遺構との重複関係では何れも本遺構が古く、12世紀のある段階には機能を失い埋め戻された施設といえる。そうした意味からも12世紀の中でも古い段階に位置付けられる可能性を有する。

両先端部が止まっていることから排水目的の溝とは考えられないことや、その規模や土橋を設置していることから堀内部地区の西側を区画する目的の堀と見る方が素直であろう。但し両先端部が如何なる理由で止まっているのか不明である。おそらくは当時の地形的な要因によるものと推測するが、それについてはまとめて触れることとする。

5 その他の遺構

56SX1 70-59グリッドに位置している。土壘状の高まりを有していたもので、今回の調査では土層断面と地形測量を行った。長さ23m、幅1.5-4m、地表から0.7mの高さがある。灰黄色粘土や黄褐色土を用いて構築されている。かわらけや国産陶器片などが出土しているものの遺構の時期は判然としにくい。

56SX2 56SX1と並行して71-56グリッドに位置している。今回の調査では土層断面と地形測量を行っ

た。長さ8m、幅2.8m、地表から0.6m程の高さがある。にぶい黄褐色土や褐色土で構築されており、かわらけや白磁片が出土したが所属時期は12世紀とは断定できない。

56S X 3 64-53グリッドに位置し、56S D19・20よりも古い。他の遺構に切られているが、円形を基調とした平面形であったと考えられ、土坑とした方が適切であったかもしれない。埋土は自然堆積か人為堆積か判然としない。出土遺物は56S D20の遺物が混じっている可能性があるが遺構の所属時期は12世紀である。

56S X 4 68-53グリッドに位置している。開口部2.5×2.3m、深さ1.3m、底面は凹凸が著しい。埋土は地山ブロックを不規則に含む人為堆積が主体で、底面付近の8・10層のみが自然堆積である。かわらけや渥美産陶器片が少量出土しているが何れも埋め戻された層からの出土である。他時期の遺物を含まないことから、本遺構の所属時期は12世紀と考えたいが性格は判然としない。

56S X 9 70-55グリッドに位置している。不整形で掘り込みも浅く残存状況は悪い。埋土は人為堆積と考えられかわらけや陶器片が散在する状態で出土した。12世紀の遺構であろう。

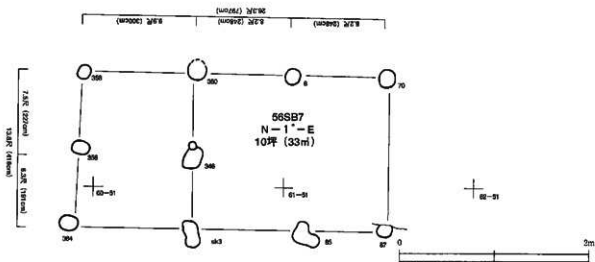
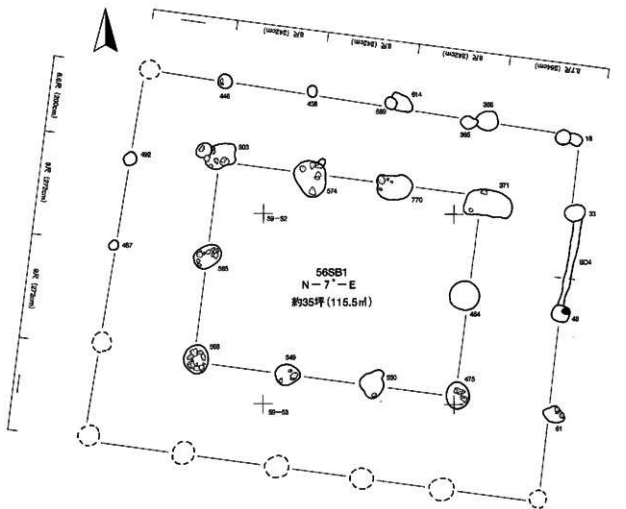
56S X 15 60-50グリッドに位置し11次調査の1～4号集石と同じものである。56S D24よりは新しいが所属時期は不明である。

56S X 16 内堀56S D40の北端部から南西へ19m(63-53グリッド)に位置している土橋である。長さ6m、上幅2.8～1.5m、下幅は約3mと推測される。北側2カ所で精査した結果、底面から土橋上面への立ち上がりを観察され、遺跡ののり基盤層を掘り残すかたちで土橋を構築していることが明らかになった。内堀に直交するように設置されており、軸線はN-40°-Wを指す。門などの付属する施設は判然としない。56S D40内堀に伴う土橋であるので12世紀に位置付けられる。

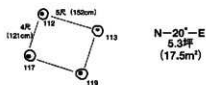
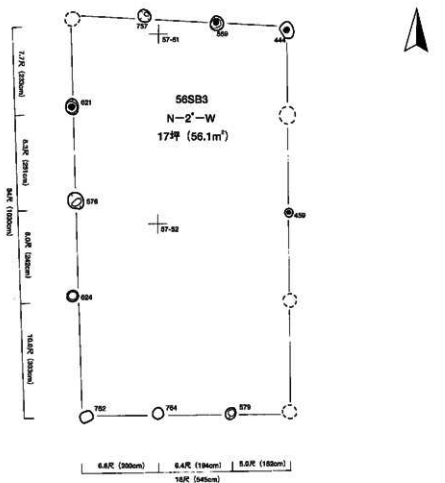
56S X 17 58-50グリッドに位置しており、11次7号溝と同じ遺構で不整形な溝状を呈している。埋土を見ると12世紀の整地層をつくる際に一緒に埋められた様相を呈しており、開口していたのはそれよりも古いと考えられる。調査部分では水性堆積の状況は認められなかった。人為的に構築された遺構なのか、周囲に数多く分布する雨裂溝の一種なのかよく判らない。

整地層 堀内部地区の西端、柳之御所を囲む堀に隣接して位置している(60-49グリッド-56-51グリッド)。南北最大約20m、東西最大23mの範囲に盛土地業の痕跡が広がっていた。12世紀の56S K80・99より古い。56S K93-96は整地層を除去した段階でプランを確認したが、埋土が似ていたため識別できなかったかもしれない。整地層の土層断面を見ると大きく3層に分けられる。上層が黒褐色土に炭粒や遺物細片を多量に含むもの、下層に灰黄褐色土に炭粒や遺物細片を微量含む層、この間に廃棄された焼土層(1～3cm程)が部分的に入る。但し、これらに極端な時期差は存在しないと考えられる。第8回の焼土はこの整地層から検出されたもので、焼土を廃棄したものである。整地層は柱穴を検出するためにベルトを残して掘り下げた。旧表土は平坦ではなく凹凸のある地形で、多数の雨裂溝が堀に向かって延びており、こうした地形を整えるための地業であったと理解できる。堀を挟んで対岸でも同様に整地層が見られる。かわらけ(12,861g)、国産陶器22片、青磁1片、瓦1片の他、焼土塊が1,870g出土した。

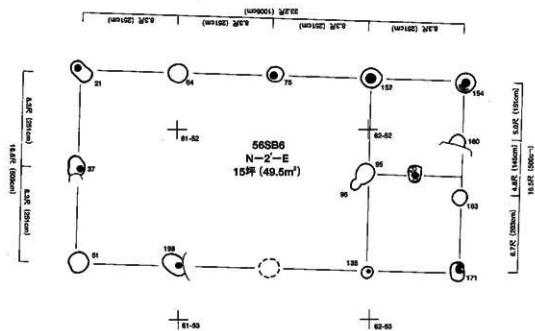
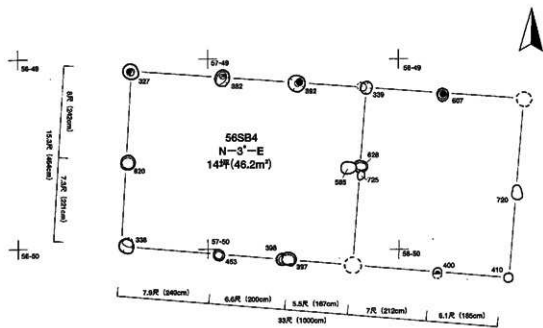
猫間が淵 トレンチ T 2 において猫間が淵の精査を行った。柳之御所を取り囲む堀はⅣ層直下で検出されていることから12世紀当時の猫間が淵は現地表面から1mも低くならないことが判る。それからⅤ層は十和田 a 降下火山灰である。よって10世紀前半代の猫間が淵は現地表面から1.5m下がったところになる。これより下位では土器・石器の出土はなかった。基本的に砂質と泥質土が交互に堆積しており、流水と沈殿を繰り返していた様子が読みとれる。しかしそれはかなり古い時代のことで前述したように12世紀段階では現在とあまり変わらず、低湿地のような景観であったと理解される。深さ3.3mまで掘り下げたが基盤層には達しなかった。XⅠ～XⅤ層では自然木がまとまって見られ、湧水も若干認められるようになる。



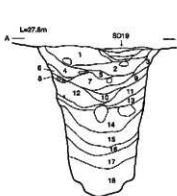
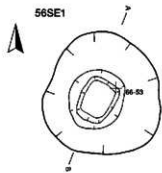
第1圖 56SB1・56SB7



第3圖 56SB3・56SB8



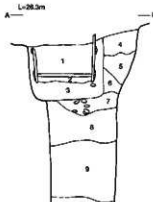
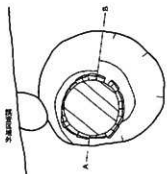
第4圖 56SB4・56SB6



56SE1

- 1 10YR4/6灰黄褐色土 地山ブロックをごく微量含む 炭粒をごく微量含む 粘性やや有 締っている
 - 2 10YR4/3赤い黄褐色土 地山ブロック大量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 3 2.5Y7/4淡黄色地山ブロック主体 その隙間に灰黄色土入る 粘性やや有 締りやや有
 - 4 2.5Y6/3赤い黄褐色土 地山ブロック小粒を多量に含む 炭粒を多量に含む 粘性やや有 締っている
 - 5 2.5Y4/1黄褐色土 地山ブロックを微量含む 炭粒を微量含む 粘性有 締りやや有
 - 6 2.5Y4/1黄褐色土 地山ブロック少量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 7 5Y4/1灰褐色土 炭粒少量 地山ブロック多量に含む 粘性やや有 締りやや有
 - 8 5Y5/1灰色砂質土 地山ブロック微量 自然埋蔵 粘性やや有 締りやや有
 - 9 10Y4/1灰褐色土 地山ブロック大量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 10 10Y5/1灰褐色土 黒色土ブロック微量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 11 5Y3/1赤い黄褐色土 地山ブロック多量 炭粒微量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 12 10Y4/1灰褐色土 地山ブロック大量多量含む 粘性やや有 締っている
 - 13 7.5GY5/1緑灰色土 炭粒微量含む 粘性やや有 締り弱
 - 14 7.5GY5/1緑灰色土 粘性やや有 締り弱
 - 15 9G5/1緑灰色砂質土 部分的に黒褐色土も混れ込んだ状態で見られる 粘性やや有 締り弱
 - 16 10YR5/3黒褐色土 緑灰色の地山との互層 粘性やや有 締り弱
 - 17 5G5/1緑灰色土 黒褐色土をごく微量含む 粘性やや有 締り弱
 - 18 5G5/1緑灰色土 黒褐色土との互層 塊分多量 粘性やや有 締り弱 (自然埋蔵に見える)
- ※ 定層しても境界は認められなかった。かつては黒褐色の砂層を掘り込んだ時点で水が湧いたのか？水が湧かない穴は井戸も多くあったのか？
- ※ 14-17は遺物少ない

56SE3



56SE3

- 1 10YR2/2黒褐色土 部分的に地山ブロック含む ビニール袋・缶ローヒ等が入っていた 粘性弱 締り弱
 - 2 5G4/1緑褐色土 地山ブロック・炭粒を少量含む 粘性弱 締りやや有
 - 3 5G4/1緑褐色土 地山ブロック少量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 4 7.5YR5/6褐色土 赤い黄褐色土ブロック少量含む 粘性弱 締っている
 - 5 5Y7/1淡黄色土 地山ブロックが主体で、その隙間に赤い黄褐色土が入る 粘性弱 締っている
 - 6 7.5GY4/1緑褐色砂質土 河原石少量入る 粘性やや有 締っている
 - 7 10GY5/1黄褐色土 多量の砂を含む 粘性やや有 締りやや有
 - 8 7.5GY4/1緑褐色砂質土 明ネリブ灰褐色土ブロック含む 量は少量含む 粘性弱 締っている
 - 9 10GY4/1黄褐色土 明ネリブ灰褐色土ブロック含む 量(小さい)を多量に含む 粘性弱 締っている
- ※ 河原石に1cm程度の黒褐色土層が見られるほど混れ込んだ土と見られる

56SK25



56SK25

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂質粘土 層に10YR5/1黄褐色粘土有 締り真し 粘性有 粘層に水がけ・石を含む 隙間に炭化粒を含む
- 2 10YR6/6黄褐色粘土 締り真し 粘性強

† 85-60

0 5m

第5図 56SE1・56SE3・56SK25

63-49
56SK26



56SK27



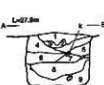
56SK27

- 1 7.5YR6/4黄褐色土 締りなし 粘性なし
- 2 10YR5/1灰褐色土 締りなし 粘性有 炭灰混入1% 一部に7.5YR7/1褐色土と7.5YR6/1褐色土を含む
- 3 10YR6/4黄褐色土 締りなし 粘性有 かわらけ片混入 堆山粘土混入
- 4 10YR8/4黄褐色土 締りやや悪い 粘性有 炭灰混入1% 堆山 下部に赤土が混入
- 5 10YR6/4黄褐色土 (赤っぽい) 締りやや悪い 粘性有 炭灰混入3% 赤土混入1% 下層砂混入
- 6 10YR6/4黄褐色土 締りなし 粘性有 炭灰混入3% 赤土混入3%
- 7 2.5Y/6/2に赤い黄砂 締りなし 粘性有 赤土混入3% 下部に赤土が混入 10YR5/1灰褐色土を含む
- 8 2.5Y/2暗灰色土 締りやや悪い 粘性有
- 9 5Y/6オリーブ黄砂 締りなし 粘性有 赤土混入3% 粘土を含む 一部に10YR5/1灰褐色土を含む
- 10 5Y/2オリーブ黄砂土 締りやや悪い 粘性有 ウリ科の種子混入
- 11 7.5Y/6/1緑灰色土 締りやや悪い 粘性有 木片混入 2.5Y/7黄褐色土を含む
- 12 10YR2/2黒褐色土 締り悪い 粘性有 ウリ科の種子混入
- 13 10YR1/1黒褐色土 締りやや悪い 粘性有 種子あり 10YR4/2黄褐色土 混入
- 14 10YR3/2黒褐色土 締り悪い 粘性有 赤土混入
- 15 10Y6/1緑褐色土 締り悪い 粘性有 炭灰混入1%



56SK26

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂 締り強 粘性なし 炭灰混入1% 赤土混入3%
- 2 10YR7/2に赤い黄褐色土 締りなし 粘性有 炭灰混入1% 赤土混入10%
- 3 10YR2/1黒褐色土 締りなし 粘性有 炭灰混入1%
- 4 10YR6/4褐色土 一部に10YR8/3黄褐色粘土を含む 締りなし 粘性有 炭灰混入1%
- 5 10YR4/4褐色土 一部に2.5Y/6/2に赤い黄褐色土を含む 締りなし 粘性有 炭灰混入1%
- 6 5Y/6オリーブ黄砂土 締りなし 粘性有 炭灰混入1%
- 7 5Y/5/6オリーブ粘土 締りなし 粘性有 炭灰混入1%
- 8 9G/4/1緑褐色土 締りやや悪い 粘性有
- 9 10YR2/1黒褐色土 締りなし 粘性有 炭灰混入1%



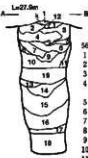
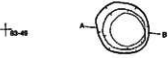
56SK29



56SK29

- 1 10YR7/2に赤い黄褐色 3%赤土混入 締り強 粘性なし
- 2 10YR3/1黒褐色土 1%炭灰混入 締りなし 粘性なし 高部 かわらけ有
- 3 10YR1/7/1黒褐色土 炭灰混入 締りやや悪い 粘性やや有 木片有
- 4 10YR6/4に赤い黄褐色粘土 締り悪い 粘性有
- 5 10YR3/2黒褐色土 30%粘土混入 締り悪い 粘性有
- 6 10YR7/2に赤い黄褐色粘土 締り悪い 粘性強
- 7 10YR2/2黒褐色シルト質粘土 種子混入 締りなし 粘性なし

56SK28



56SK28

- 1 10YR6/1灰白砂質 締りなし 粘性なし 堆山粘土混入1%
- 2 10YR6/2に赤い黄褐色土 締りなし 粘性有 堆山粘土混入30%
- 3 10YR7/2に赤い黄褐色土 締りなし 粘性有 堆山粘土混入50%
- 4 10YR2/1黒褐色土 締りやや悪い 粘性有 炭灰混入1% 堆山粘土混入3%
- 5 10YR7/4に赤い黄褐色土 締り悪い 粘性有 堆山粘土混入5%
- 6 7.5Y/6/1緑褐色土 締り悪い 粘性強
- 7 5Y/6/1灰褐色土 締り悪い 粘性強 堆山粘土混入3%
- 8 10YR1/7/1黒褐色土 締りやや悪い 粘性有 木くず混入
- 9 10YR2/1黒砂質 締り悪い 粘性有 木くず混入
- 10 10YR6/2黒褐色土 締りやや悪い 粘性強
- 11 10YR3/1黒褐色土 締り悪い 粘性有
- 12 10YR2/2黒褐色砂 締り悪い 粘性なし 炭灰混入
- 13 5Y/6オリーブ黄色 黒褐色土まじらを含む 粘土 締りやや悪い 炭物ほねなどなし
- 14 2.5GY/4/1暗オリーブ灰色 締り悪い 珪土多量いれを含む
- 15 7.5Y/4/1灰色 木製品 炭物等を含む
- 16 7.5Y/3オリーブ黄 黒褐色土の炭物多量に含む
- 17 10YR1/7/1黒 炭物質 (ワラ状のものや種子など) のものを多く含む 締り悪い
- 18 7.5GY/5/1暗灰色粘土質 締り悪い 遺物なし
- 13-15は人為堆積

56SK30



56SK30

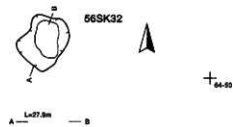
- 1 10YR5/6黄褐色土 一部に10YR6/1褐色色粘土を含む 締り強 粘性強 炭灰及/底部に木炭片 (薪材?) 有



56SK31

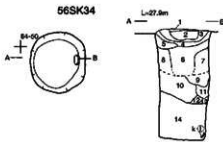


第6図 56SK26~56SK31



56SK32

- 1 2.5Y7/2暗褐色土少量混入 粘り強 粘性なし かわらけ有
- 2 7.5YR5/6暗灰土少量混入 粘り強 粘性やや有

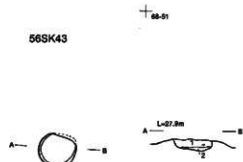


56SK34

56SK34

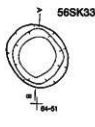
- 1 2.5Y7/2灰土 粘り強 粘性なし
- 2 5Y2/1オリーブ黒土 30% 7.5YR2/6暗褐色土混入 粘り強し かわらけ・灰あり 粘性有
- 3 7.5YR5/6暗褐色土 50% 5Y7/2白土混入 粘り強 粘性なし 炭混入
- 4 7.5Y7/2オリーブ黒土 粘り強し 炭混入 粘性強
- 5 2.5Y4/2灰褐色土 粘りやや弱し 炭混入 粘性なし
- 6 2.5Y4/2暗灰土 40%に灰い黄色粘土混入 10%明赤褐色土混入 粘性やや有 炭・かわらけ混入
- 7 2.5Y6/4に灰い黄色粘土 10%明赤褐色土混入 粘性強 炭混入
- 8 2.5Y7/2暗褐色土 20%に灰い黄色粘土混入 粘性やや有 炭混入
- 9 8G5/1緑灰色土 炭褐色土のブロック多量混入 粘性やや有 粘り強
- 10 8G5/5/1オリーブ灰色土 黄灰色土ブロック多量混入 粘性やや有 粘り強
- 11 10YR4/1暗灰色土 黒山ブロック多量に含む 粘性やや有 粘り強
- 12 8G5/1緑灰色土 黒褐色土上に少量含む 粘性やや有 粘り強
- 13 8G5/5/1オリーブ灰色土 粘性やや有 粘りやや有
- 14 8G5/4/1暗オリーブ灰色土 粘性土質 粘り強 かわらけ・炭混入

56SK43



56SK43

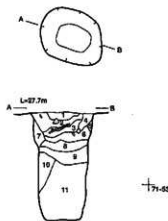
- 1 10YR2/2暗褐色粘土 粘り強 粘性有 かわらけ片を含む 多量の炭化物を含む 灰黄色粘土・明赤褐色粘土ブロックを含む 人為的堆積か?
- 2 10YR2/6暗赤褐色シルト質粘土と10YR2/2灰黄色シルト質粘土の混合層 粘り強 粘性強 炭混入



56SK33

- 1 10YR2/1暗褐色土 粘り強 粘性有 10YR7/1灰白色粘土ブロック 10YR4/2灰黄褐色粘土を含む
- 2 10YR2/1暗褐色土 粘り有 粘性有 炭化物を少量含む かわらけ片を中量含む
- 3 10YR2/2暗褐色粘土 粘りやや有 粘性有 炭化物を少量含む かわらけ片を少量含む 礫をやや多く含む 緑灰色粘土ブロックを中量含む (中層部分に小片多く含む)
- 4 土層は3層以上は厚さ (最下10YR2/1に含む) 木片出土増加 (3層とはこの層をさす)
- 4 10YR4/2灰黄色土と10YR7/3に灰い青灰色粘土の混合層 炭化物を微量含む 粘り強 粘性強
- 5 10YR2/1暗褐色粘土 粘り強 粘性有 明赤褐色土ブロックを少量含む
- 6 10YR2/1褐色土 粘り有 粘性ほとんどなし 木片の混入を主体とする (炭・かわらけを含む)
- 7 10YR2/1褐色土質粘土 粘りやや有 粘性やや有 黄灰色粘土を若干含む 木片の混入は少ない 炭化物少量混入
- 8 2.5Y3/1黒褐色土と10YR7/1明赤褐色土質粘土の層 前後はそれぞれ粘り強し層状に堆積している 粘り強 粘性あまりなし 木片・木炭混入を多量に含む かわらけ・礫砂を含む
- 9 10YR2/1褐色土 黒山ブロック (緑褐色) 多量に含む 炭土の混入が少量混入 粘性有 粘りやや弱 (後述から約3m層の地点で自然層が埋蔵から3~6点出土)
- 10 2.5Y3/1暗オリーブ灰色土 黒山ブロック (オリーブ灰と灰白色土ブロック) 大量に含む 炭混入を含む 粘性有 粘性強 (炭混入は2.5Y3/1緑灰色土ブロックの1層が強いと感じ)
- 11 8G6/1緑灰色土 2.5Y2/1褐色土 黒山ブロック (オリーブ灰色土) を多量に含む 粘性強 粘り強 かわらけを少量含む

56SK67

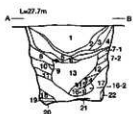
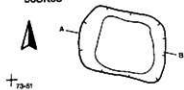


56SK67

- 1 10YR4/3灰い黄褐色土 黒山ブロック大量に含む 粘性中量 粘り強
- 2 10YR2/2暗褐色土 黒山ブロック多量含む 自然層が混入し 粘性やや有 粘り強
- 2 5Y2/1褐色土 本層ロウコンを含む 粘性やや有 粘りやや有
- 2 5Y6/2黄褐色土 黒山ブロック少量含む 粘性中量 粘り強
- 2.5Y7/4灰黄色土 粘性中量 粘り強
- 10YR2/2暗褐色土 本層ロウコンを含む 粘性中量 粘りやや有
- 10YR4/2灰黄褐色土 黒山ブロック多量含む 粘性中量 粘りやや有
- 10YR2/2暗褐色土 炭土を含む 黒山ブロック多量含む 粘性有 粘り強
- 10YR2/2暗褐色土 灰黄褐色粘土・明赤褐色粘土ブロックを大量に含む 粘りやや有 粘性有
- 10YR2/1暗褐色土 オリーブ灰色粘土ブロックを大量に含む 粘りやや有 粘性有
- 10YR2/2暗褐色土 粘り強 粘性やや有 ウチ草等の種子混入 10層より厚層は小さいがオリーブ灰色粘土を多く含む 本層混入を含む

第7図 56SK32~56SK34・56SK43・56SK67

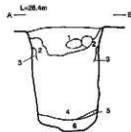
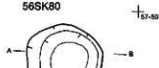
56SK53



56SK53

- 2.5Y7/2灰黄色土と10YR3/3暗褐色土との混合層 粘り強 粘性強 炭化物较少 (φ1-3mm) を少量含む
- 10YR2/2深褐色土 粘り強 粘性中 炭化物较少 (φ1-3mm) を少量含む
- 10YR2/2深褐色土 粘り強 粘性強 炭化物较少 (φ1-3mm) を少量含む 2.5YR/3灰黄色砂質粘土が上に厚く堆積する
- 10YR2/2深褐色土 粘り強 粘性強 堆山礫層か 人為堆積 炭化物ごくわずかに含む
- 10YR4/2黄褐色土 粘りやや有 粘性有 堆山ブロックを少量含む 炭化物を多く含む 礫を少量含む
- 2.5Y7/3黄褐色土 粘り有 粘性有 5層の上のブロックが少量混入 かわらけ片を少量含む 人為堆積か?
- 1.5YR5/2黄褐色土と10YR5/2灰黄色粘土との混合層 粘り強 粘性強 灰質腐植土内に炭化物を少量含む
- 7-2 10YR2/1深褐色土 粘り有 粘性有 炭化物粒子をわずかに含む
- 2.5Y7/3黄褐色土 粘りやや有 粘性有 炭化物粒子を少量含む 堆山ブロックを多く含む
- 2.5YR/3灰黄色土 粘りあまりなし 粘性中
- 5YR3/1赤褐色土 粘りやや有 粘性有 炭化物较少 ブロックを多く含む 焼土粒子をごく微量含む 堆山ブロックを多く含む
- 5G7/1暗褐色土と2.5Y7/4黄褐色土との混合層 粘り強 粘性有 炭化物を少量含む
- 2.5YR/3灰黄色土 粘り強 粘性強 人為堆積か?
- 土層は5層厚から25cm程度 10YR2/1黄褐色土 粘りやや有 粘性有 かわらけ含む 堆山ブロックをやや多く含む 炭化物をやや多く含む 焼土粒子を若干含む 下層は10YR3/1深褐色土 粘り有 粘性有 堆山ブロックを少量含む 焼土粒子を少量含む 炭化物を少量含む 様子様を多く含む
- 10YR3/1深褐色土 粘りやや有 粘性有 深黄色粘土ブロックを少量含む 人為堆積
- 5G7/1赤褐色土 粘りやや有 粘性強 堆山礫層を少量含む
- 10YR2/1深褐色土 粘り強 粘性有 一部にウリ科の種子を含む
- 10YR2/1深褐色土 粘り強 粘性有 深黄色土 土層の上(ウリの種子を含む)を少量含む 一部ブロック状の腐植層を有す 人為的堆積土のものか
- 10YR2/1深褐色土 粘りやや有 粘性有 炭化物を少量含む 緑黄色土を少量含む
- 10G7/3緑黄色砂質粘土 粘り弱 粘性やや有
- 2.5Y/4黄褐色土 粘り強 粘性強
- 10YR2/1深褐色土 粘り強 粘性強 1層に腐植に入る 上部に未片含む
- 2.5YR/3灰黄色土 粘り強 粘性有
- 17層→22層までは人為堆積か?

56SK80



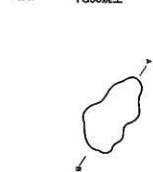
56SK80

- 10YR2/3暗褐色土 かわらけ細片を多量に含む 炭粒を多量に含む 10-20cm程度の自然石を多量に混入 粘性やや有 粘っている
- 10YR4/4黄褐色土 堆山ブロック多量 炭質腐植土も 粘性やや有 粘っている
- 2.5YR/2黄褐色土 炭粒ごく微量含む 粘性有 粘りやや有
- 5G7/1赤褐色土 粘性有 粘り弱
- 2.5YR/2に赤黄色砂 粘性弱 粘りやや有
- 10G7/3暗緑黄色土 粘性弱 粘りやや有 粘り弱
- 5 Y 3 5 4 はアライモ属らしい

57-51

56-51

YG56焼土



56SK99



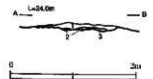
56SK99

- 10YR3/3暗褐色土 堆山ブロック微量 炭粒少量含む 粘性やや有 粘りやや有
- 2.5Y7/4黄褐色土と灰黄色土との混合土 炭粒微量含む 粘性有 粘りやや有
- 10YR4/1黄褐色土 炭粒多量含む 粘性やや有 粘りやや有
- 2.5Y7/4黄褐色土 炭粒ごく微量含む 粘性やや有 粘りやや有 炭粒少

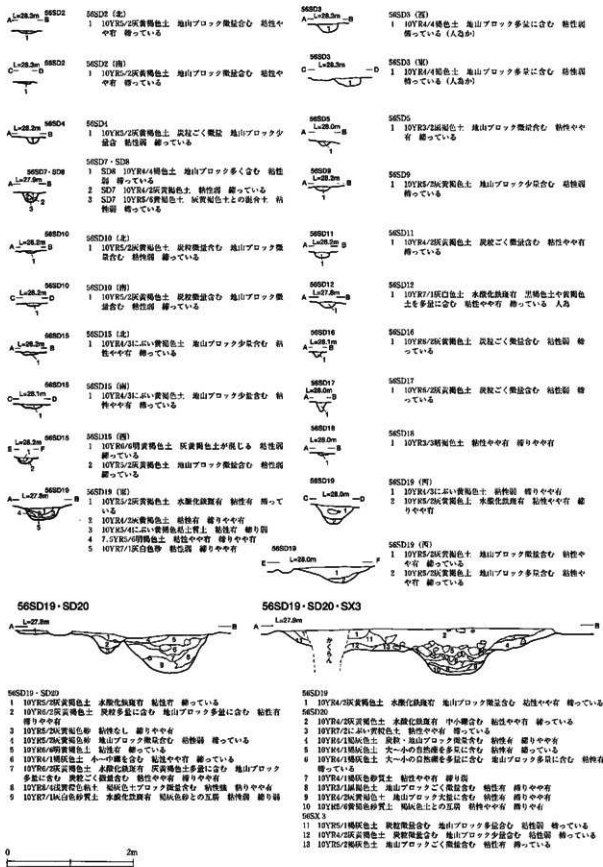
※ 1・3層にはかわらけ入る

36 豊島管内焼土

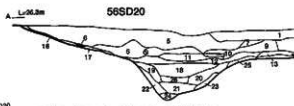
- 5YR5/3暗褐色土と褐色土・黄褐色土の混土 何れもブロック 粘性やや有 粘りやや有 (現地産ではない)
 - 10YR1/7褐色炭粒
 - 10YR7/1赤褐色土 褐色土ごく微量含む 粘性弱 粘りやや有 (豊島)
- ※ この焼土は3層の中にある 3層は2層の底の層で上下に分けられるが、大きな球磨所ではないと思われる



第8図 56SK53・56SK80・56SK99・焼土



第9図 溝・堀断面①



56SD20

- 1 10YR5/2灰黄褐色土 締まっている 粘性やや有 酸化鉄が現れる
- 2 10YR7/1灰白色粘土 締りやや有 粘性やや有
- 3 2.Y7/3成実色粘土 締っている 粘性やや有
- 4 10YR5/2灰黄褐色土 締っている 粘性やや有
- 5 10YR4/1灰白色土 締りやや有 粘性やや有 地山ブロックを多く含む
- 6 10YR4/2黄灰色土 締っている 粘性やや有 地山ブロックを少量含む
- 7 5GY6/1オリーブ灰白色土 締っている 粘性なし
- 8 2.GY6/4暗オリーブ灰白色土 締っている 粘性やや有
- 9 2.SGY5/1オリーブ灰白色土 締っている 粘性やや有 結灰色シルト質粘土を多く含む
- 10 10YR5/4黄褐色土 締っている 粘性なし
- 11 10YR5/6黄褐色砂質粘土 締っている 粘性やや有 黄褐色粘土 緑灰色シルト質粘土を多く含む
- 12 2.SGY5/1暗オリーブ灰白色シルト質粘土 締っている 粘性強 地山ブロックを少量含む
- 13 2.SGY5/1暗オリーブ灰白色粘土 締りやや有 粘性強 緑灰色シルト質粘土を少量含む
- 14 5Y7/2褐色土 締っている 粘性強
- 15 7.SGY7/1緑灰色粘土 締っている 粘性強
- 16 10YR5/6黄褐色土 締っている 粘性やや有 地山
- 17 5Y7/2褐色土 締っている 粘性強
- 18 10YR5/6黄褐色土 2.2.SGY5/1オリーブ灰白色の混成物 締っている 粘性なし 炭化物及び地山ブロックを少量含む

- 19 5GY7/1暗オリーブ灰白色砂質粘土 締りやや有 粘性やや有
- 20 5Y6/3オリーブ黄褐色土 締りやや有 粘性強
- 21 5Y6/2オリーブ砂 締りやや有 粘性なし
- 22 5Y7/3成実色粘土 締っている 粘性強
- 23 5Y7/3成実色粘土 締っている 粘性強
- 24 7.SY6/2暗オリーブ砂 締り強 粘性なし
- 25 5Y7/3成実色粘土 締っている 粘性強
- 26 5Y6/2オリーブ砂 締りやや有 粘性なし 炭化物を少量含む



56SD20

- 1 2.SY7/3成実色粘土 水酸化鉄混有 灰黄色土ブロック少量含む 大小礫少量含む 粘性やや有礫りやや有 (入)
 - 2 2.SY6/2成実色砂 成実色土少量含む 粘性強 礫り強 (自然)
 - 3 2.SY6/2成実色砂 粘性強 礫り強 (自然)
- ※ 大率は1層に建設が入る。2・3層には入らない
2と3は層が連続していた層

56SD21

A Le=27.2m B



56SD21 (西)

- 1 10YR5/2灰黄褐色土 水酸化鉄混有 粘性やや有
- 2 10YR5/6明黄褐色土 粘性やや有 締っている

56SD21

C Le=27.2m D



56SD21 (東)

- 1 10YR4/2灰黄褐色土 水酸化鉄混有 地山ブロック散在含む 粘性やや有 締っている

56SD23

A Le=27.2m B



56SD23 (北)

- 1 10YR5/1暗灰色土 地山ブロック少量含む 粘性弱 締っている

56SD28

A Le=14.1m B



56SD28

- 1 10YR3/2暗褐色土 炭粒・極小礫・地山ブロックを散在含む 粘性強 礫りやや有
- ※ 断面より厚い

56SD22

A Le=27.2m B



56SD22 (南)

- 1 10YR4/1暗灰色土 水酸化鉄混有 粘性やや有 締っている

56SD22

C Le=27.2m D



56SD22 (西)

- 1 10YR5/2灰黄褐色土 水酸化鉄混有 粘性やや有 締っている

56SD23、SD22

C Le=27.2m D



56SD23 (南) (最も厚みのある部分)

- 1 10YR4/4褐色土 粘性弱 締っている
 - 2 10YR5/6明黄褐色土 黄褐色土、褐色土ブロックと混成 粘性強 締っている
 - 3 10YR5/1暗灰色土 自然礫含む 粘性やや有 締っている
 - 4 10YR5/4黄褐色土 灰白色土ブロック多量を含む 粘性やや有 礫りやや有
 - 5 10YR4/1暗灰色土 地山ブロック大粒を少量含む 粘性やや有 礫りやや有
 - 6 10YR5/4成実色粘土 水酸化鉄混有
- ※ 北・南端ははくれている

56SD38(41SD2)

A Le=25.2m B



56SD38 (41SD2)

- 1 7.SY7/3成実色粘土 締り強 粘性やや有 礫3-5cmの灰黄褐色粘土をブロック状に5%程度含む 地山塊含む
- 2 10YR4/2成実色粘土 締り有 粘性なし 下部に酸化鉄が薄層に含まれる部分有 草根に灰褐色粘土ブロックを散在含む
- 3 10YR4/3成実色砂質土 締りやや有 粘性なし かわかけ片を少量 炭化物を微量含む
- 4 10YR4/4成実色砂質土 締り強 粘性なし 締り強 かわかけ片を少量含む
- 5 10YR3/2成実色砂質土 締りやや有 粘性やや有 炭化物を少量含む かわかけ片を少量含む 礫を多く含む
- 6 10YR3/2成実色砂質土 締り強 粘性なし 炭化物・かわかけ片を少量含む
- 7 10YR5/6成実色砂質土 締り強 粘性なし
- 8 10YR4/4成実色砂質土 締り強 粘性なし かわかけ片が散在する
- 9 10YR4/4成実色砂質土 締り強 粘性やや有 かわかけ片1.2cm
- 10 10YR4/4成実色砂質土 締り強 粘性あまりなし 明黄褐色砂質土ブロックを散在含む かわかけ片1点含む
- 11 10YR4/4成実色砂質土 締りやや有 粘性なし
- 12 10YR3/4成実色砂質土 締り強 粘性やや有 かわかけ片少量含む 炭化物微量含む
- 13 2.SY7/3成実色砂質土 締り強 粘性やや有 かわかけ片1.5cm含む
- 14 10YR4/4成実色砂質土 締り有 粘性やや有 かわかけ片を少量含む
- 15 2.SY7/3成実色砂質土 締り有 粘性やや有 かわかけ片を多く含む 礫を少量含む 炭化物を微量含む

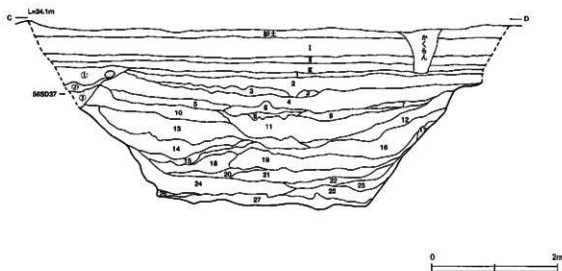
0 2m

第10図 溝・畑断面 ②

- 16 10YR3/2暗褐色砂質粘土 粘り強 粘性やや有 塵・かわらけ片少 炭化物を
やや多く含む
- 17 2.5Y/4暗黄褐色砂 粘りあまりなし 粘性なし 炭化物を少量含む 黄褐色
粘上ブロッコを散見含む
- 18 10YR4/4褐色砂質粘土 粘り弱 粘性 かわらけ片を少量含む 炭化物を散
見含む 明黄褐色土ブロッコを散見含む
- 19 10YR4/4褐色砂質土 粘りあまりなし 粘性ほとんどなし 炭化物・かわらけ
片散見 黄褐色粘上ブロッコを少量含む
- 20 2.5Y/3オリーブ褐色砂質土と2.5Y/3暗オリーブ褐色砂質粘土の混成層 粘
りやや有 粘性やや有 かわらけ片・炭化物を散見含む
- 21 2.5Y/1灰褐色砂 粘りあまりなし 粘性なし 黄褐色粘上粒子(φ3mm)・炭
化物・かわらけ片を散見含む 水浸境線の境界あり
- 22 2.5Y/2灰黄色粘土 粘り強 粘性強 炭化物を散見含む
- 23 2.5Y/4オリーブ褐色砂質粘土 粘り強 粘性やや有 明黄褐色粘上ブロッ
コを散見含む
- 24 2.5Y/4/1暗オリーブ灰色砂 粘り弱 粘性あまりなし 炭化物をごく少量含
む
- 25 2.5Y/4/1暗オリーブ灰色砂 粘り弱 粘性あまりなし

- 26 2.5Y/2/1黒色シルト質土と7.5GY/3暗緑灰色砂の混成層 粘り弱 粘性やや
有 かわらけ片を散見含む 炭化物を散見含む 塵を少量含む
- 27 10YR3/2暗褐色砂質粘土 粘りやや有 粘性強 炭化物ブロッコをわずかに含
む 炭化物粒を少量含む 黄褐色粘上粒子を若干含む
- 28 2.5GY/4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土 粘り有 粘性強 炭化物粒を多く
含む かわらけ片を少量含む 高級品産出多し
- 29 10YR2/2暗褐色シルト質粘土 粘りやや有 粘性強 炭化物粒をやや多く含む
水汗が少量含まれる
- 30 10YR2/2暗褐色砂質土 粘り弱 粘性やや有
- 31 5GY/4/1暗オリーブ灰色砂質粘土 粘り弱 粘性やや有
- 32 2.5Y/1黒褐色シルト質土 粘り弱 粘性有 炭化物を散見含む
- 33 5G5/1黒灰色シルト粘土 粘り弱 粘性強
- 34 2.5Y/3/1暗褐色シルト質粘土 粘りやや有 粘性強
- 35 2.5Y/4/1暗オリーブ灰色 粘り強シルト質粘土 粘りやや有 粘性強
- 36 10YR4/4褐色砂 粘り有 粘性やや有
- 37 10YR4/2/1暗黄褐色粘土 粘り強 粘性強
- 38 7.5GY/3/1暗褐色粘土 粘り強 粘性有
- 39 2.5GY/3/1暗オリーブ灰色砂 粘りなし 粘性なし

56T2SD39

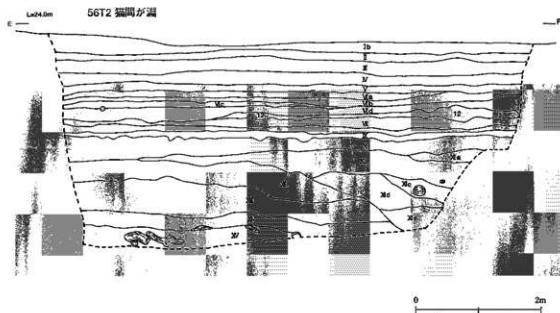


56 T 2 SD39 Ⅲ (断面)

- ① 10YR4/2灰黄褐色土 炭粒からかわらけ片を多量に含む 粘性やや有 粘っている
- ② 2.5Y/2/2黒褐色土 炭分を含む 粘性有 粘り弱
- ③ 10YR2/2暗褐色泥 粘性やや有 粘り弱
- I 10YR3/2黒褐色土 粘性やや有 粘りやや有 (粘性土)
- II 10YR6/6暗褐色土 炭土 粘性やや有 粘っている
- III 10YR3/2黒褐色土 粘性やや有 粘りやや有
- 1 10YR2/2暗褐色土 炭分散見含む 粘性有 粘りやや有
- 2 10YR4/3/1黄褐色土 炭分ごく少量含む 粘性やや有 粘っている
- 3 10YR6/6暗褐色土ブロッコ主体 その隙間に黒褐色土ごく少量 粘性やや有 粘りやや有
- 4 10YR2/2/1黄褐色粘上質土 粘性有 粘りやや有 (炭分散見含む)
- 5 10YR4/2灰黄褐色土 炭分含む 粘性やや有 粘りやや有
- 6 10YR4/2灰黄褐色土 炭分含む 粘性やや有 粘りやや有
- 7 2.5Y/2/2灰黄色砂 炭分散見含む 粘性なし 粘りやや有
- 8 2.5Y/2/2灰黄色砂 炭分散見含む 粘性なし 粘りやや有
- 9 10YR4/2灰黄褐色粘上質土 砂との互層を成す 粘性やや有 粘りやや有
- 10 10YR5/3/1黄褐色砂質土 粘性やや有 粘りやや有

- 11 10YR4/2灰黄褐色粘上質土 土の互層を成すとの混成 粘性やや有 粘っている
- 12 10YR5/2灰黄褐色砂 炭分的に炭粒土を含む 粘性なし 粘りやや有
- 13 2.5Y/2/1黒褐色土の互層 黄褐色砂との互層 粘性やや有 粘りやや有
- 14 7.5Y/1オリーブ褐色泥 部分的に緑灰色土を含む 粘性やや有 粘り弱
- 15 10YR2/2暗褐色砂 塵との互層を成す 粘性弱 粘っている
- 16 10YR2/2暗褐色土 砂との互層を成す 15層との間に小水汗や水浸等が認められている 粘性やや有 粘り弱
- 17 10YR4/3/1黄褐色土 地山ブロッコ多量に含む 粘性やや有 粘りやや有
- 18 10Y3/2オリーブ灰色砂 炭質泥散見含む 粘性強 粘っている
- 19 2.5Y/4/2暗黄褐色泥 砂と互層を成す 炭化物散見含む 粘性やや有 粘りやや有
- 20 10Y3/2オリーブ灰色砂 黒褐色泥散見含む 粘性強 粘っている
- 21 2.5Y/4/2暗黄褐色泥 砂との互層を成す 炭粒を少量含む 粘性やや有 粘りやや有
- 22 7.5Y/4/2灰黄色砂 粘性強 粘りやや有
- 23 10Y3/2オリーブ灰色砂質土 粘性やや有 粘りやや有
- 24 2.5GY/3/1暗褐色粘土 砂との互層に砂が入る (褐色) 粘性やや有 粘りやや有
- 25 10Y4/1黒色土ブロッコ主体 その隙間に灰黄褐色土少量入る 粘性やや有 粘りやや有
- 26 2.5Y/2/2暗褐色泥 粘性有 粘りやや有
- 27 2.5Y/4/1黄褐色土 粘性やや有 粘りやや有 (粘りすぎ)

第11図 溝・掘断面 ③

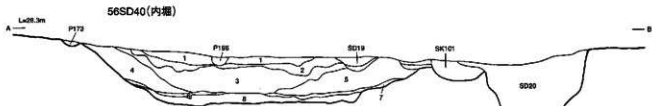


- 56 T2 築堤が図 (西側)
- Ib 10YR4/2灰黄褐色土 水田土 粘性やや有 締りやや有
 II 10YR4/8明黄褐色土 床上 鉄分多量に含 粘性弱 締っている
 III 10YR3/4暗褐色砂質土 粘性弱 締りやや有
 IV 10YR4/2黄褐色土 粘性やや有 締っている
 V 10YR4/2黄褐色土 鉄分大量に含む 粘性やや有 締っている
 VIa 2.5Y3/2黒褐色土 粘性やや有 締っている
 VIb 10YR4/3ぶい黄褐色砂質土 炭粒ごく微量含む 粘性やや有 締っている
 VIc 10YR5/2灰黄色砂質土 鉄分含む 粘性弱 締っている
 VIId 10YR3/4暗褐色土 若干砂っぽい 鉄分多量含む 粘性弱 締っている
 XII 10YR4/2灰黄褐色土 砂少量混じる 粘性やや有 締りやや有
 XIII 10YR3/2暗褐色土 鉄分微量含む 粘性やや有 締りやや有
 XIV 2.5Y7/1灰白色火山灰 粘性なし 締りやや有
 X 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 鉄分ごく微量含む 粘性弱 締りやや有
 XIa 10YR4/2灰黄褐色砂 炭は粗い 粘性なし 締っている
 XIb 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂 粘性なし 締りやや有
 XIc 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂 黄褐色土との互層 粘性なし 締りやや有
 XI4 2.5Y4/1黄灰色砂質土 粘性やや有 締りやや有
 XIe 10Y4/1灰色砂 炭がやや粗い 黄褐色土混じる 粘性弱 締りやや有
 XI 5Y3/1オリーブ黒色土 炭粒ごく微量含む 粘性やや有 締っている
 XII 2.5GY4/1暗オリーブ灰色土 若干砂っぽい 粘性やや有 締りやや有
 XIV 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂 黄褐色土との互層 粘性弱 締りやや有
 XV 2.5Y3/1黒褐色土 砂との互層 炭多量に含む 粘性やや有 締りやや有

- 56 T4 S030
 (堀北土層)
- かくらん 2.5Y3/2暗オリーブ黒色土 地山ブロック少量混入 粘性やや有 締りやや有
 I 2.5Y3/2暗オリーブ黒色土 酸化鉄有 粘性やや有 締りやや有
 II 10YR4/6褐色土 水田土 粘性弱 締っている
 III 10YR2/1黒色土 酸化鉄有 粘性やや有 締りやや有
 IV 10YR4/3ぶい黄褐色土 地山ブロック少量をごく微量含む 粘性やや有 締っている
 V 10YR7/4明黄褐色土 粘性やや有 締っている (地山)
 VI 2.5Y7/1灰黄色砂 砂とら-10cmの層からなる 粘性なし 締っている
 VII 2.5Y7/3灰黄色砂 粘性やや有 締り弱
- T4 (築堤部分)
- I 10YR5/4黄褐色土 暗褐色土ブロック少量含む 粘性やや有 締っている
 II 2.5Y7/3灰黄色砂質土 暗褐色・黄褐色土ブロックと混ざる 粘性やや有 締っている
 III 2.5YR3/3黄褐色土 暗褐色土・小礫との混合土 粘性有 締っている
- T4 (66SD30)
- 1 2.5Y3/1黒褐色土 径20cm前後の河原石を含む 粘性やや有 締りやや有
 5 10YR4/4褐色土 小礫ごく微量含む 粘性弱 締りやや有

- T4 (66SD30)
- 4 10YR4/2灰黄褐色土 酸化鉄多量に見られる 小礫ごく微量含む 粘性やや有 締っている
 7 2.5Y3/1黒褐色土 中小礫少量含む 粘性やや有 締りやや有
 8 10YR4/6褐色土 酸化鉄有 粘性有 締りやや有
 9 2.5GY4/1暗オリーブ灰色泥 酸化鉄有 粘性有 締りやや有 (沈殿層)
 10 5GY4/1暗オリーブ灰色土 地山ブロック多量含む 粘性やや有 締っている
 11 7.5Y3/2オリーブ黒色泥 粘性強 締りやや有 (沈殿)
 12 5Y3/1オリーブ黒色泥 粘性強 締りやや有 (沈殿)
 13 10YR2/1黒色土 炭粒大量 かわらけ餅片を少量含む 粘性やや有 締りやや有 (人為物) (水田)
 14 2.5Y3/5黄褐色土 礫混入土 粘性やや有 締りやや有
 15 10YR4/2暗灰黄色砂 粘性やや有 締り弱
 16 5Y4/1灰色泥 木部入る 粘性やや有 締っている
 17 7.5Y3/1灰色砂質土 粘性やや有 締りやや有
 18 5Y4/1灰色泥 地山ブロック少量含む 粘性強 締り固 (沈殿)
 19 2.5Y4/1暗オリーブ灰色泥 木部含む 粘性やや有 締り弱 (沈殿)
 20 7.5GY/1暗灰色砂 粘性やや有 締り弱 (炭れ込み)
 21 2.5Y4/1黄灰色土 粘性有 締り弱
 22 5.6GYオリーブ砂質土 灰色土との混合土 水質濃縮含 粘性やや有 締り弱

第12図 溝・堤断面④



56SD40 (内堀)

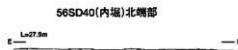
- 56SD40 (内堀) 断面
 P196 10YR7/4Cに多い黄褐色砂質土 粘土質 粘り 弱く 炭化物少量 灰黄褐色土層
 1 10YR7/4Cに多い黄褐色砂土と10YR5/2灰黄褐色土の混成 (灰黄褐色土層) 下面に炭化物少量
 2 10YR5/2に多い黄褐色粘土土 10YR5/2灰黄褐色土 少量だから含む
 3 10YR7/4Cに多い黄褐色粘土土と10YR5/2灰黄褐色土の混成 3層ほどは砂質 まだら状
 4 10YR7/4Cに多い黄褐色砂土 粘り均等だが灰黄褐色土を露出

- 5 10YR7/4Cに多い黄褐色砂土 粘り均等だが灰黄褐色土を露出
 6 10YR5/2灰黄褐色粘土 砂質を少量含む 水成層弱
 7 10YR5/2灰黄褐色粘土 砂質を少量含む 水成層弱
 8 10YR7/4Cに多い黄褐色粘土土 粘り均等だが灰黄褐色土を露出 下面に10YR5/2灰黄褐色粘土 (3cm厚)
 ※ 1-3は一層の人為堆積



56SD40 (内堀) 南端部

- 56SD40 (内堀) 南端部
 1 10YR7/4Cに多い黄褐色砂質土 小礫石を多く含む 粘性弱 締まっている(人為)
 2 2.5Y6/4Cに多い黄褐色土 風乾粘土を露出される 粘性やや弱 締りやや弱
 3 10YR4/2灰黄褐色土 粘性強 締りやや弱 (自然)
 4 2.5Y7/4灰黄褐色土 暗褐色土を露出含む 粘性やや弱 締っている
 5 2.5Y6/4Cに多い黄褐色土 風乾粘土を露出を含む 粘性弱 締りやや弱 (人為)
 6 10YR5/2灰黄褐色土 粘土やや粘り 締りやや弱 (自然)
 7 10YR6/2Cに多い黄褐色砂質土 粘性弱 締り弱
 8 5GY5/1オリーブ灰褐色土 砂材や木屑などを含む 粘性弱 締りやや弱
 9 2.5Y7/4灰黄褐色土 水成層状粘性 粘性やや弱 締っている (露の崩れかけか)
 10 10YR5/2灰黄褐色土 粘性やや粘り 締りやや弱 (自然)
 11 10YR5/2C灰黄褐色土 粘性やや粘り 締りやや弱 (自然)
 12 10YR3/1黒褐色土 木材や種子を含む 粘性弱 締り弱 (自然)
 ※ 12層は内堀が掘られてすぐの段階 内堀が保っていた 土がたまたま崩れ落ちてきたりしていた
 1-2層は内堀を掘る
 3層は人為的に埋める (跡上の処理なのか)
 4層は埋まらないうちの時点で木材などが堆積した
 9-11層は残まっていた自然

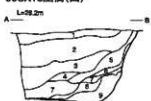


56SD40 (内堀) 北端部

56SD40 (内堀) 北端部

- 56SD40 (内堀) 北端部
 1 2.5Y6/4明黄褐色土 地山ブロッコ多量含む 粘性やや弱 締っている
 2 10YR6/4明黄褐色土 地山ブロッコ土層 その下に暗褐色土が露出される 粘性少し弱 締っている
 3 10YR2/1黒褐色土 地山ブロッコ (径2-15cm) 多量 灰黄褐色土ブロッコ少量含む 粘性少し弱 締っている
 4 2.5Y6/1黄褐色土 立上り層方は黄褐色を露す (地山) 粘性やや弱 締っている
 5 7.5Y5/1緑灰色泥炭 地山ブロッコ不規則に少量含む 粘性やや弱 締りやや弱
 6 7.5Y5/1緑灰色泥炭 地山ブロッコ不規則に多量含む 粘性やや弱 締りやや弱
 7 2.5Y7/2灰黄褐色土 砂を少量含む 粘性少し弱 締っている
 8 10YR6/4明黄褐色砂質土 炭分含む 粘性弱 締っている
 9 2.5Y7/2灰黄褐色土質 灰黄色土ごく露出含む 粘性やや弱 締っている
 10 2.5Y7/2灰黄褐色土質 炭分含む 粘性少し弱 締っている
 ※ 1-3は人為堆積、4-7は自然堆積、8-10は露の崩れ

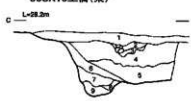
56SX16土橋 (西)



56 内堀の一部 西

- 56 内堀の一部 西
 1 10YR5/4Cに多い黄褐色土 地山ブロッコごく露出含む 粘性やや弱 締っている
 2 10YR2/3暗黄褐色土 地山ブロッコ小〜大粒を多量含む 粘性やや弱 締っている
 3 2.5Y3/1黒褐色土 地山ブロッコ大粒を大量を含む 粘性弱 締っている 炭分有
 4 2.5Y7/2灰黄褐色土 地山 灰黄褐色土ごく露出含む 粘性弱 締っている 炭分有
 5 2.5Y6/2灰黄褐色土 灰黄褐色土の粘土 炭分含む 粘性弱 締りやや弱
 6 2.5Y6/2灰黄褐色土 灰黄褐色土の粘土含む 粘性やや弱 締りやや弱
 7 10YR2/1黒褐色土 部分的に灰黄褐色を露す 炭黄褐色土層含む 3-4層との境には崩度で定まっている 粘性やや弱 締りやや弱
 8 2.5Y7/2灰黄褐色土 灰黄褐色土少量含む 粘性やや弱 締っている 炭分含む
 9 2.5Y6/4暗黄褐色土層 炭分含む 粘性弱 締っている

56SX16土橋 (東)

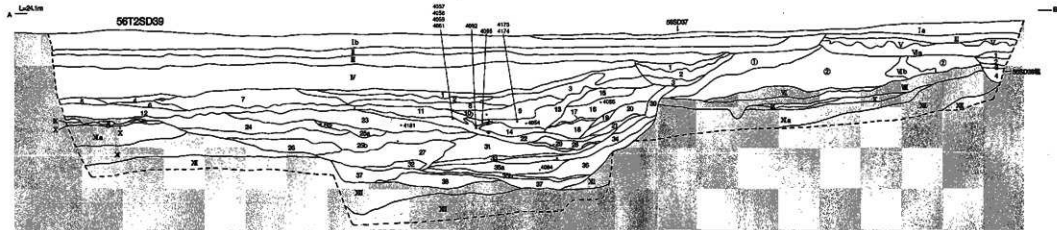


56 内堀の一部 東

- 56 内堀の一部 東
 1 10YR5/4Cに多い黄褐色砂質土 粘り 弱く 炭化物少量 かわらけ少量
 2 10YR4/2に多い黄褐色砂土 粘り 弱く 炭化物少量 かわらけ少量 10-20cm次の内堀を含む 炭化物・かわらけ少量 (内堀土中の砂の露出)
 3 10YR2/3暗黄褐色粘土 粘り 弱く 炭化物・かわらけやや多く含む (内堀土中の砂の露出)
 4 10YR6/4Cに多い黄褐色砂土 粘り 弱く 炭化物少量含む (下層にやや多い)
 5 10YR5/4Cに多い黄褐色砂土 粘り 弱く 炭化物少量含む 灰褐色の砂質土少量
 6 10YR6/2灰黄褐色粘土 粘り 弱く 炭化物少量 10YR4/2灰黄褐色土含む
 7 2.5Y7/2灰黄褐色粘土 粘り 弱く 炭化物少量 均質土上
 8 10YR6/2に多い黄褐色砂質土 粘り 弱く 灰黄褐色土少量含む 下に灰褐色の砂質土含む
 9 2.5Y6/4に多い黄褐色砂土 粘り 弱く 炭化物ごく露出含む 均質土上
 ※ 1-9は人為堆積



第13図 溝・堀断面 ⑤



- 56 T2 SD39
T2 (堰上土層)
1 Ia 107/8にたいし黄褐色砂質土 鉄分を含む 粘粒や中骨 粘り強
1 Ib 107/8にたいし黄褐色砂質土 鉄分が若干欠乏しているのか 粘粒や中骨 粘り強
2 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘性や中骨 粘りや中骨

T2 SD39

- 1 107/8の黄褐色粘土 鉄分を豊富含む 粘粒弱 粘り弱
2 107/8の黄褐色粘土 鉄分を含む 粘粒弱 粘り弱
3 107/8にたいし黄褐色粘土 鉄分を含む 地山ブロック不規則に少量含む 粘性や中骨 粘りや中骨
4 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 鉄分を含む 粘粒や中骨 粘りや中骨
5 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 鉄分を豊富含む 粘粒や中骨 粘りや中骨 粘れ強く粘着含む
6 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘れ強く粘着含む 粘れ強く粘着含む 粘粒弱 粘りや中骨
7 107/8にたいし黄褐色粘土 鉄分を含む 地山ブロック不規則に含む (とくに面方) 粘粒や中骨 粘り弱
8 107/8にたいし黄褐色粘土 鉄分を含む 粘り強
9 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘性や中骨 粘り弱
10 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘性や中骨 粘り弱
11 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 鉄分を含む 粘れ弱
12 107/8の黄褐色粘土 鉄分を豊富含む 粘性や中骨 粘りや中骨
13 107/8の黄褐色粘土 鉄分を豊富含む 粘性や中骨 粘りや中骨
14 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘れ弱 粘り弱
15 107/8の黄褐色粘土 鉄分を豊富含む 粘れ弱 粘り弱
16 107/8の黄褐色粘土 砂との互層 粘性や中骨 粘りや中骨 (注)
17 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
18 7.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘粒や中骨 粘りや中骨
19 7.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘粒弱 粘り弱
20 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱 粘り弱

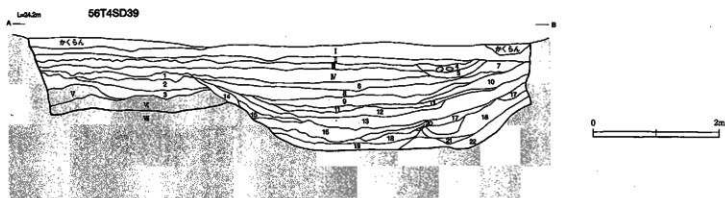
- 21 7.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 地山ブロックごく少量含む 粘性や中骨 粘りや中骨
22 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 砂を豊富含む 粘性や中骨 粘り強
23 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 黄褐色粘土との互層 粘粒弱 粘りや中骨
24 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 黄褐色粘土との互層で河原石ごく少量含む 粘粒弱 粘りや中骨
25a 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
25b 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
27 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 地山ブロックを少量含む 粘れ弱 粘り弱
28 107/8の黄褐色粘土 砂との互層 粘性や中骨 粘り強
29 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
30 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘りや中骨
31 107/8の黄褐色粘土 砂との互層 粘性や中骨 粘り弱
32 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘れ弱 粘りや中骨
33 7.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 砂との互層 粘性や中骨 粘り弱
34 107/8の黄褐色粘土 地山ブロックを豊富含む 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘りや中骨
35a 7.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘性や中骨 粘り強 (堰の側方)
35b 107/8の黄褐色粘土 粘性や中骨 粘り強
36 107/8の黄褐色粘土 黄褐色粘土との互層 粘性や中骨 粘り強
37 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 地山ブロックを豊富含む 河原石ごく少量含む 粘性や中骨 粘りや中骨
38 2.5/2.5/1/1の黄褐色粘土 粘性や中骨 粘り弱

- T2 (堰側) 土層?
① 107/8の黄褐色粘土 黄褐色粘土地山ブロックを豊富含む 粘性や中骨 粘り弱
② 107/8の黄褐色粘土 107/8の黄褐色粘土地山ブロックで面した 面は粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り弱

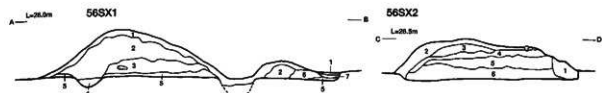
- T2 (堰側) 土層?
① 107/8の黄褐色粘土 黄褐色粘土地山ブロックを豊富含む 粘性や中骨 粘り弱
② 107/8の黄褐色粘土 107/8の黄褐色粘土地山ブロックで面した 面は粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り弱

T2 (堰側) 土層?

- T2 (堰側) 土層?
① 107/8の黄褐色粘土 黄褐色粘土地山ブロックを豊富含む 粘性や中骨 粘り弱
② 107/8の黄褐色粘土 107/8の黄褐色粘土地山ブロックで面した 面は粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り弱
③ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
④ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑤ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑥ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑦ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑧ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑨ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑩ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑪ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑫ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑬ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑭ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑮ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑯ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑰ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑱ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑲ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強
⑳ 107/8の黄褐色粘土 粘れ弱に粘り強を含む 粘性や中骨 粘り強



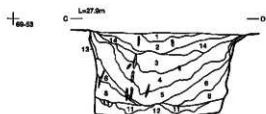
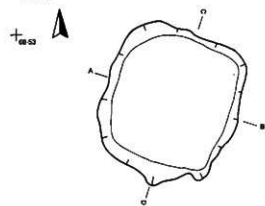
第14図 溝・堀断面 ⑥



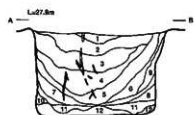
- 56SX1
- 1 10YR2/3暗褐色土 草根多 粘性やや有 締りやや有
 - 2 2.5Y7/2灰黄色粘土 その中に暗褐色土及び明褐色砂質土ブロックを多量に含む 粘性有 締っている
 - 3 10YR5/3暗褐色土 粘性やや有 締りやや有
 - 4 2.5Y6/2灰黄色粘土 明褐色砂 灰黄色粘土ブロックを多量に含む 粘性有 締っている
 - 5 2.5YR2/4浅黄赤土 粘性有 締っている (地山)
 - 6 2.5YR6/4にぶい黄色粘土 暗褐色土ブロック少量含む 粘性有 締り弱
 - 7 7.5GY6/1緑灰色砂 粘性なし 締りやや有 埋め戻した砂

- 56SX2
- 1 10YR7/3にぶい黄褐色土 粘性有 締っている 過去の調査で露出した部分
 - 2 10YR4/6褐色土 本量多 粘性弱 締り強
 - 3 10YR6/4にぶい黄褐色土 地山ブロック少量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 4 10YR2/2黒褐色土 地山ブロック少量含む 粘性やや有 締りやや有
 - 5 10YR6/6明褐色土 地山ブロック大量含む 粘性やや有 締っている
 - 6 10YR4/6褐色土 地山 粘性やや有 締っている

56SX4



- 56SX4
- 1 10YR2/3暗褐色土 地山ブロック少量含む 粘性弱 締っている
 - 2 2.5Y7/2灰黄色土ブロック本体 その断面に灰黄色粘土 粘性弱 締っている
 - 3 2.5Y6/4黄褐色土 灰砂多量に含む 粘性やや有 締っている
 - 4 2.5Y7/4浅黄赤土ブロック主体 (一部グライ化) その断面に黒褐色土少量含む 粘性やや有 締っている
 - 5 5G8/1緑灰色土と黒褐色土の混成土 粘性やや有 締っている
 - 6 10YR2/2黒褐色土 にぶい黄褐色土ブロックを少量含む 粘性やや有 締っている
 - 7 5G5/1緑灰色土と黒褐色土との混成土 粘性やや有 締っている
 - 8 10Y7/2灰白色土 部分的に砂っぽい所もある 粘性やや有 締りやや有
 - 9 5Y7/3暗褐色土 灰分多量含む 粘性やや有 締っている
 - 10 5G6/1緑灰色砂質土 粘性やや有 締りを欠く
 - 11 2.5Y4/2灰黄色土 浅黄赤土との混成土 粘性やや有 締りやや有 (締り方?)
 - 12 2.5Y4/2暗黄赤土 粘性やや有 締っている
 - 13 10YR3/3暗褐色土 粘性弱 締っている
 - ※ 8・10層が自然堆積 他は人為堆積
 - 14 5Y7/3浅黄赤土 地山ブロック・灰黄色・明褐色土ブロックの混成土 粘性弱 締っている



56SX9



- 56SX9
- 1 10YR4/2灰黄色土 明黄褐色地山ブロックと混成 炭化物を少量含む 粘性弱 締っている

第15図 その他の遺構 (SX)

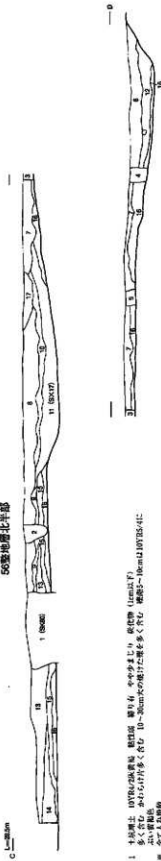
56 整地層南半部



- 1 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）及びおろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 2 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 3 粘土（腐植土）、粘性中や有、腐り中や有、腐植土上には腐植土層を多量に含む、粘性中や有
- 4 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 5 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 6 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有

- 7 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 8 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 9 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 10 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 11 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有

56 整地層北半部



- 1 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）及びおろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 2 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 3 粘土（腐植土）、粘性中や有、腐り中や有、腐植土上には腐植土層を多量に含む、粘性中や有
- 4 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 5 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 6 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有

- 7 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 8 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 9 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 10 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有
- 11 100%粘土、泥炭土、腐植土、水石（厚1-2cm）、おろけ層の多量に含む、粘性中や有、腐り中や有

第16図 整地層断面

第三章 出土遺物

56次調査で出土した遺物は、かわらけ（ロクロ・手づくね）、国産陶器（常滑、濠美、須恵器系）、輸入陶磁器（白磁、青磁、青白磁、陶器）、瓦（軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦）、木製品（ちゅう木、箸、桶、下駄ほか）、石製品、鉄器、羽山などがある。本文中では頁数の関係もあり、個々の遺物についての説明はおこなわない。個々の遺物の特徴については観察表に記してある。

1 かわらけ

12世紀のかわらけは56次調査全体で136,895g 出土した。56次調査の南側及び西側部分の表土は第11次、36次、42次、52次調査により除去されており、そこからも遺物は多量に出土していることから、本来はもっとかわらけの出土量は多かった筈である。

出土したかわらけは遺構出土のものを中心に記載した。全部で126点を図示した。個々の特徴については表に記してあるので、文章ではとくに記載を控えることとした。手づくねとロクロかわらけに分けられる。そして手づくねかわらけは以下のように分類される。

- | | |
|-------------------|--------------------|
| C 3…2段なで、口縁部面取りなし | C 4…2段なで、口縁部をつまみ上げ |
| C 5…2段なで、口縁部面取りあり | D 2…1段なで、口縁部外反 |
| D 3…1段なで、口縁部面取りなし | D 4…1段なで、口縁部面取りあり |

その他に内折かわらけがある。

ロクロかわらけについては特別、形態分類をしていない。

表中の法量は実測図上で計測した。よって反転実測で求められた数値を記している場合もある。重さは残存している重さである。色調は代表的な部分の色を記した。残存度は正確な数値による測定値ではなく、表面積の残存率を目分量によって測ったものである。

2 国産陶器

今回の調査でも12世紀の国産陶器（常滑産、濠美産、須恵器系）の破片が多量に出土している。常滑産陶器は396片（19,150g）、濠美産陶器は468片（32,790g）、須恵器系陶器（古代の須恵器を含む）が97片（6,049g）である。合計すると961片（57,989g）になる。56SI20からの出土が最も多く、56SD38堀跡も狭い調査範囲ではあったが出土量が多い。

3 中国産陶磁器

56次調査で中国産陶磁器は白磁62片（767g）、青磁2片（12g）、青白磁1片（30g）が出土した。実測図には代表的なものを、写真と観察表には実測できないものも加えて掲載した。中国産陶磁器は17片（178g）が出土し、その大半を掲載した。中国産陶磁器の構成は以下になる。

以前から指摘されていたことだが陶磁器の種類では白磁が圧倒的に多く次いで陶器、青磁、青白磁となる。柳之御所堀内部地区では平泉遺跡群の中でも陶器の割合が多い。器種別には壺類が大半を占め、碗皿類の倍近くにのぼる。

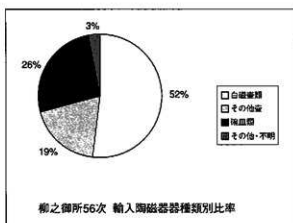
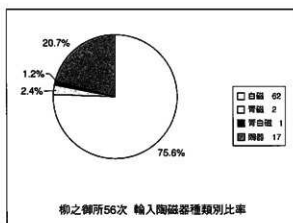
56次調査輸入陶磁器種構成

白磁

器種		壺類				碗類											皿類							袋物			
組分類	白磁	II系	III系	不明	皿類	碗	化磁青碗	化磁土碗	碗	II	IV	V	VI	VII	Vか皿	皿	化磁土皿	化磁土皿	II	月か皿	III	IV	V	VI	VII	II	
遺跡名	総数	2	21	20	1	0	0	0	4	2	2	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1
柳之御所56次	62	2	21	20	1	0	0	0	4	2	2	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1

青磁・青白磁・陶器

種類		青磁										青白磁					陶器											
分類	青磁	龍泉窯系			同安窯系			青白磁					陶器															
器種		碗	皿	壺	13C碗	13C皿	15C地皿	碗	皿	血	皿	血	壺	小壺	特殊	掃帚	貫茶	緑盤	絞胎	13C陶器								
遺跡名	総数	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	12	0	1	0	0
柳之御所56次	20	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	12	0	1	0	0



4 瓦

56次調査では12世紀の瓦は138点(5.397%)出土した。この中から状態のよいものを中心に丸瓦7点と平瓦7点を掲載した。

とくに猫間が淵の中に位置する56SD38・56SD39堀跡(T1)を検出する際に多量の瓦片が出土している。この場所は堀内部地区にある岡池や中心建物群と猫間が淵を挟んだ対岸にある無量光院との間に位置している。

3001は陽刻の連珠剣頭三巴文が施される軒平瓦と思われる。3002は連珠三巴文の軒平瓦である。3010は陰刻剣頭文を施す軒平瓦、3014の軒平瓦はあまり平泉遺跡群では見かけない文様をもつ。唐草文の一種であろうか。

丸瓦、平瓦は胎土や質感など様々なものが見られるが、今回の調査で出土した瓦には軟質な焼成で胎土に細かい砂粒が混じるものと、硬質で灰色に発色する焼成で胎土には砂粒はあまり混入していないものに分けられる。前者には3001・3002・3003・3004・3006・3007・3012が、後者は3005・3008・3009・3011・3013が該当する。

5 木製品

木製品については、実測図および写真図版を掲載したものの118点、写真図版のみのもの154点の計272点を掲載した。

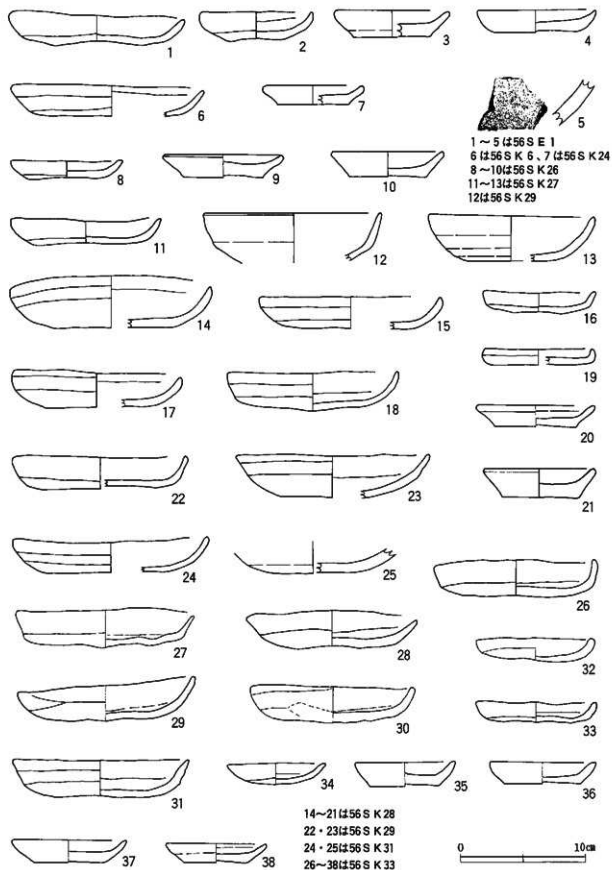
主な木製品の出土地点は、56SD38（11SD2）、56SD39などの堀、56SK33などのトイレ状土坑、56SE1、竊間が淵である。このうち、56SD39は掲載したもののうちの139点を占める。また、竊間が淵から出土したものは、すべて自然木である。

実測図を掲載したもののうち、特記すべきものについて述べる。

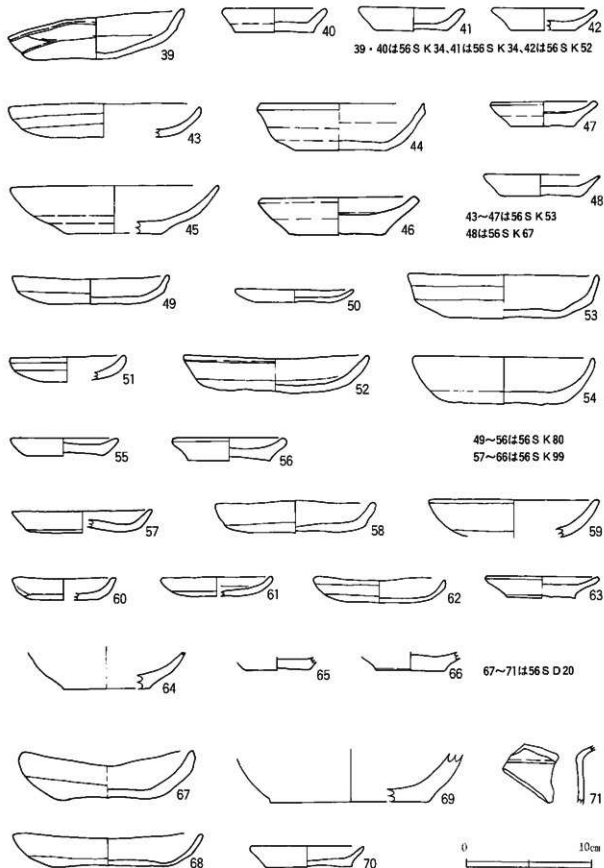
4005、4069は曲物銅板である。いずれも破片であり、曲物の容量を特定することはできない。4030、4035、4083は漆器輪である。いずれも破片ではあるが、阿面黒漆塗りである。4083は漆の剥離が著しい。4031は部材である。表面全体が炭化している。4044は楯である。柄の部分は今回の調査では検出されなかった。先端に穿孔がある。4047は扇の骨である。下部のみの残存である。4051、4055、4092、4095は下駄である。うち、4055、4092は連曲下駄、4051、4095は差歯の下駄である。差歯のものはいずれも歯の部分のみである。4095は歯の部分が残っており、さらに割を継いでいる様子も伺える。4054は杓子形木製品である。ほぼ完形の状態で残っているが、杓子としては大型すぎるものであり、本来別の用途があったものと思われる。4085は墨書のある板片である。文字の左払いの部分のみであり、内容については不明である。4093は彫形木製品である。4097は輪である。漆などの塗られた痕跡は認められない。底部にクロクロの爪跡がある。4105、4107はいずれも用途不明品であるが、樹皮の綴じ具がある。4109は折敷である。三辺に縁が残っている。裏面に多数の釘跡が認められる。なお、この折敷については、まどめの項で改めて詳説する。このほかに、ちゅう木16点、箸14点などが出土している。

6 その他の遺物

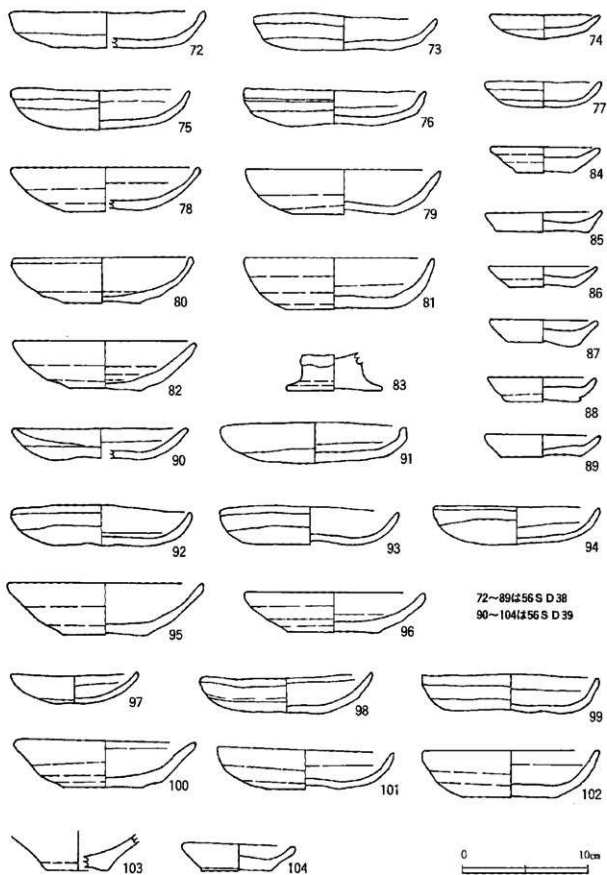
5001・5002は増場の破片である。出土した全てを図示している。5003は石製の鉢になる。5004は鉢（35.6g）と思われる。金属の種類は不明で12世紀のものではないかもしれない。5005は鉄釘の可能性ある。5006は基石であろうか。5007は土師器高台付坏と思われる。内面黒色処理は施されていない。5008～5010は縄文土器である。若下であるが赤色の漆が残っており、文様の上から彩色していたようである。時期は晩期であろう。5011は羽口である。5012は銅製品だが小片により種類は判らない。5013の銭貨は篆書体の聖宋元寶（1101年初鑄）と思われる。脆いため拓本はとらなかった。5020・5021は焼けた粘土塊である。今回の調査では全部で6,370g出土している。主に整地層の中に含まれており、中には整土が焼け残ったようなものもみられるが多くは破片が小さく一既に整土の焼けたものと断ずることができないものもある。整地層でみられた廃棄土層とも関係が予想される遺物である。



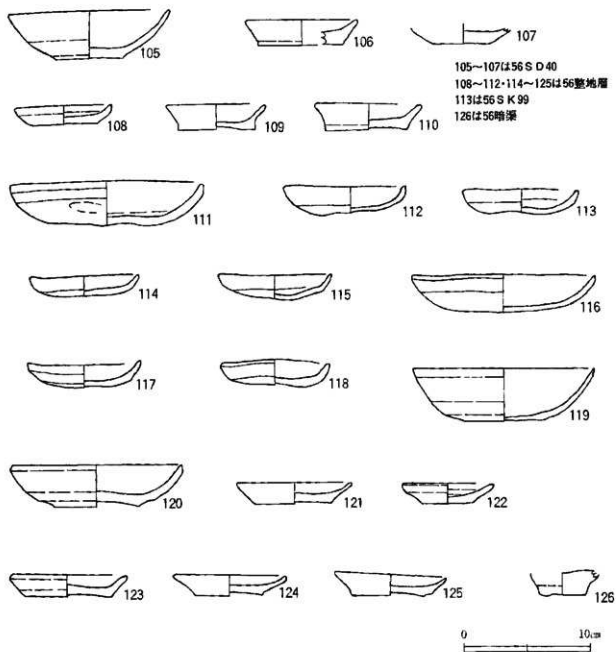
第17図 かわらけ(1)



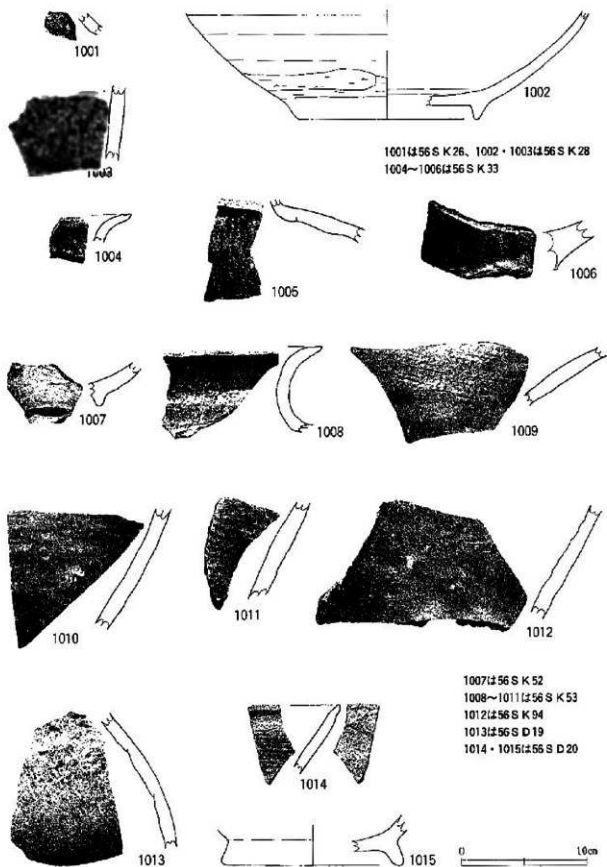
第18図 かわらけ(2)



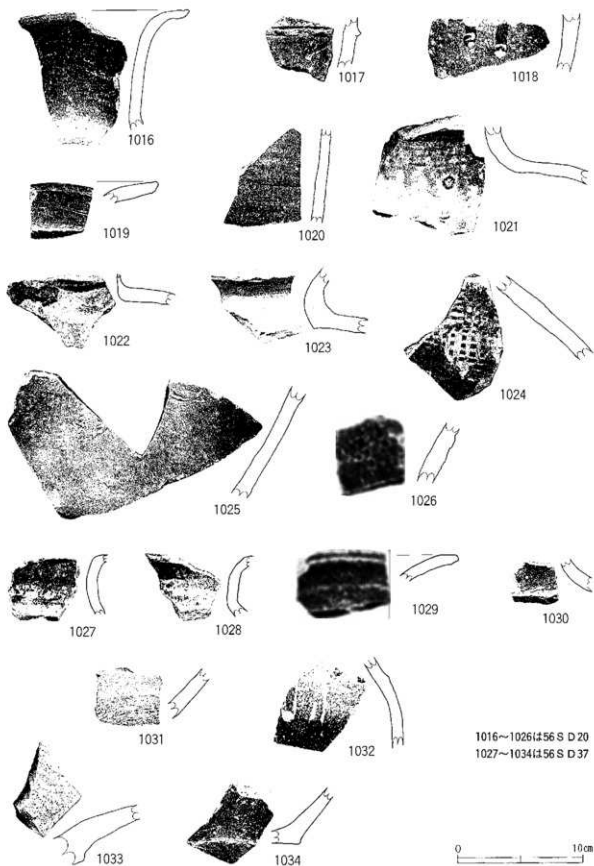
第19図 かわらけ(3)



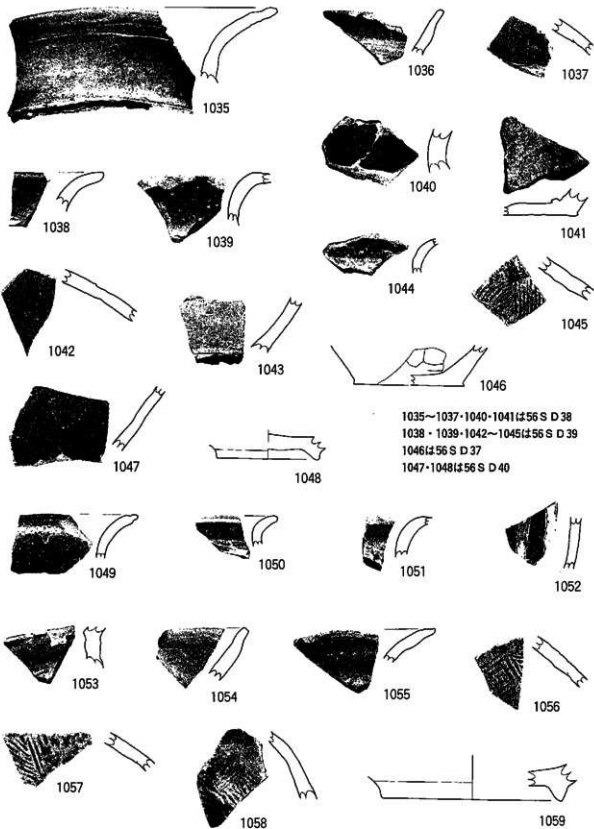
第20図 かわらけ(4)



第21図 常滑産陶器(1)



第22図 常滑産陶器(2)

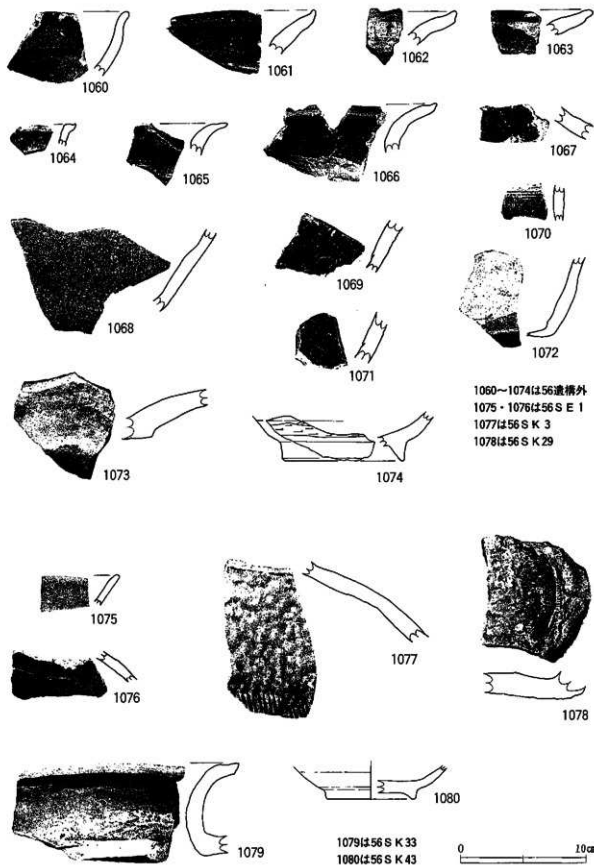


1035~1037・1040・1041は56 S D 38
 1038・1039・1042~1045は56 S D 39
 1046は56 S D 37
 1047・1048は56 S D 40

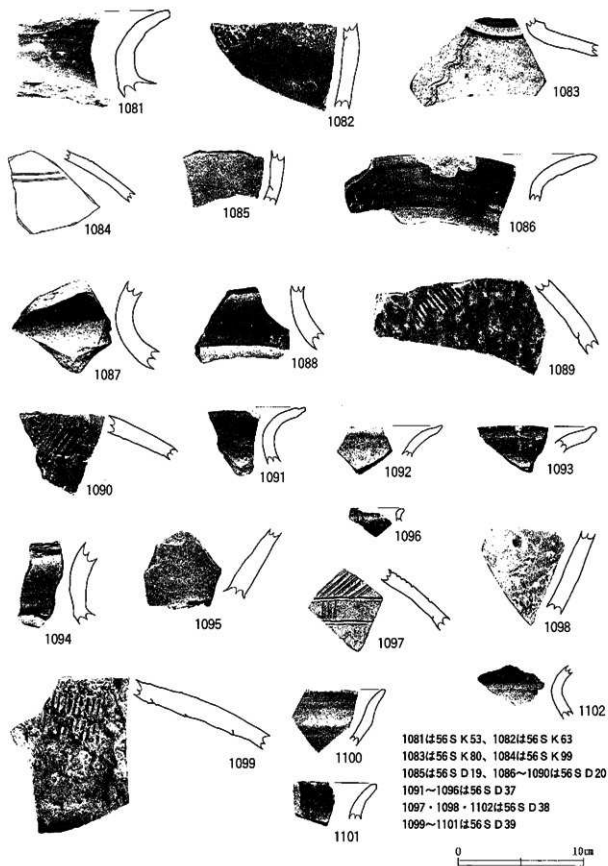
1049は56 S X 1、1050は56 S X 3、1051・1052は56 S 整地層
 1053は56 S X 16、1054~1059は56 S 遺構外

0 10cm

第23圖 常滑産陶器(3)

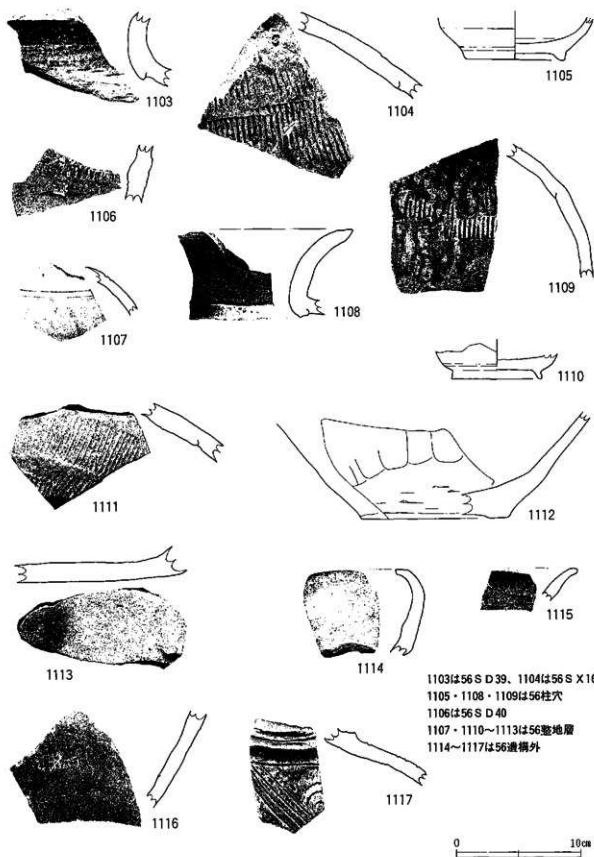


第24図 常滑産陶器(4)・瀬美産陶器(1)



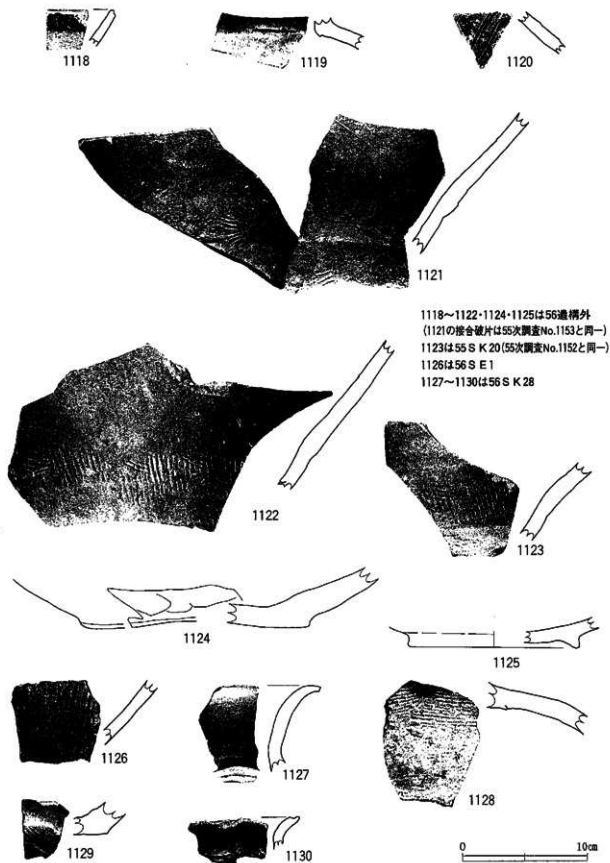
1081 \pm 56 S K 53、1082 \pm 56 S K 63
 1083 \pm 56 S K 80、1084 \pm 56 S K 99
 1085 \pm 56 S D 19、1086 \sim 1090 \pm 56 S D 20
 1091 \sim 1096 \pm 56 S D 37
 1097 \cdot 1098 \cdot 1102 \pm 56 S D 38
 1099 \sim 1101 \pm 56 S D 39

第25図 渥美産陶器(2)

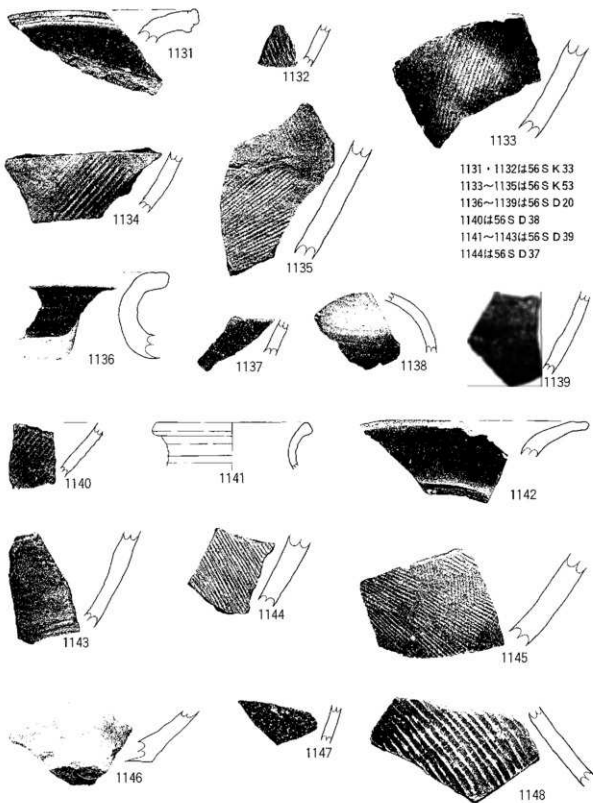


1103は56 S D 39、1104は56 S X 16
 1105・1108・1109は56柱穴
 1106は56 S D 40
 1107・1110～1113は56地層
 1114～1117は56遺構外

第26図 渥美産陶器(3)



第27図 渥美産陶器(4)・須恵器系陶器(1)

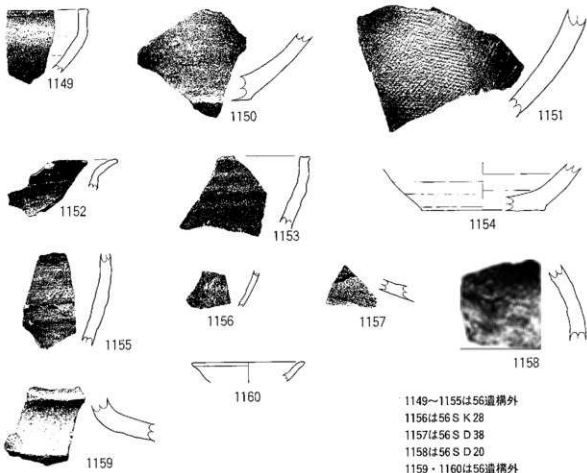


1131・1132は56 S K 33
 1133~1135は56 S K 53
 1136~1139は56 S D 20
 1140は56 S D 38
 1141~1143は56 S D 39
 1144は56 S D 37

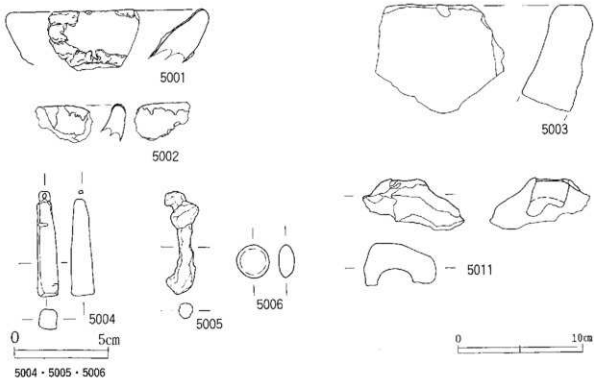
1145・1146は56 S x 1、1147は56整地層、1148は56柱穴

0 10cm

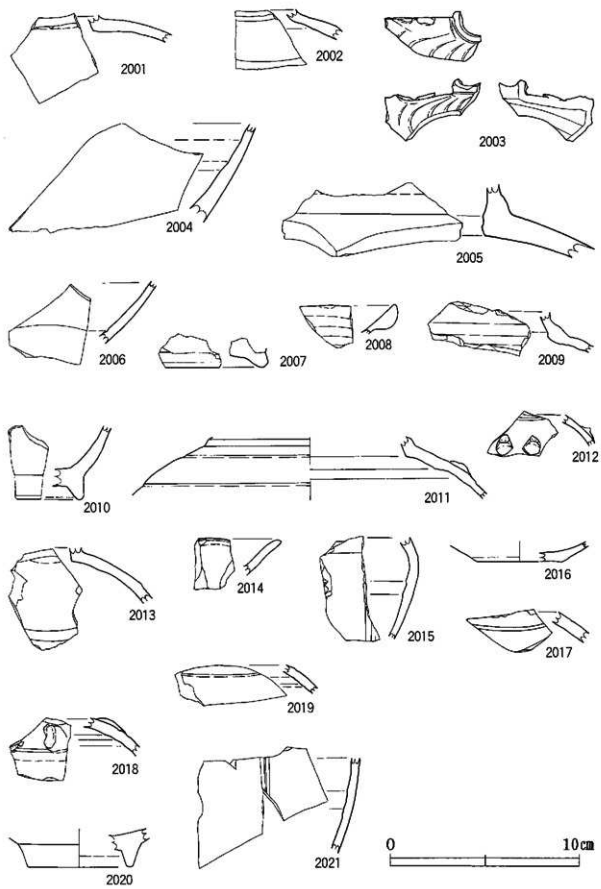
第28図 須恵器系陶器(2)



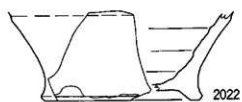
1149～1155は56遺構外
 1156は56 S K 28
 1157は56 S D 38
 1158は56 S D 20
 1159・1160は56遺構外



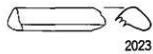
第29図 須恵系陶器(3)・その他の遺物



第30图 中国産陶磁器 (1)



2022



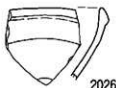
2023



2024



2025



2026



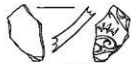
2027



2028



2029



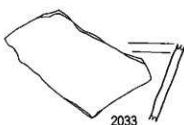
2030



2031



2032



2033



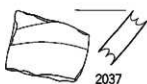
2034



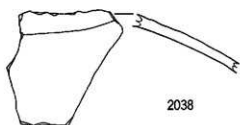
2035



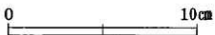
2036



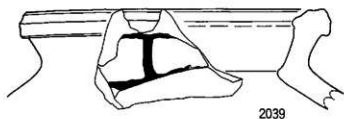
2037



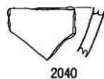
2038



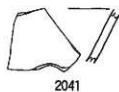
第31图 中国産陶磁器(2)



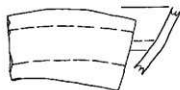
2039



2040



2041



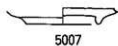
2042



2043



2044



5007



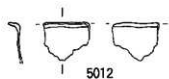
5008



5009



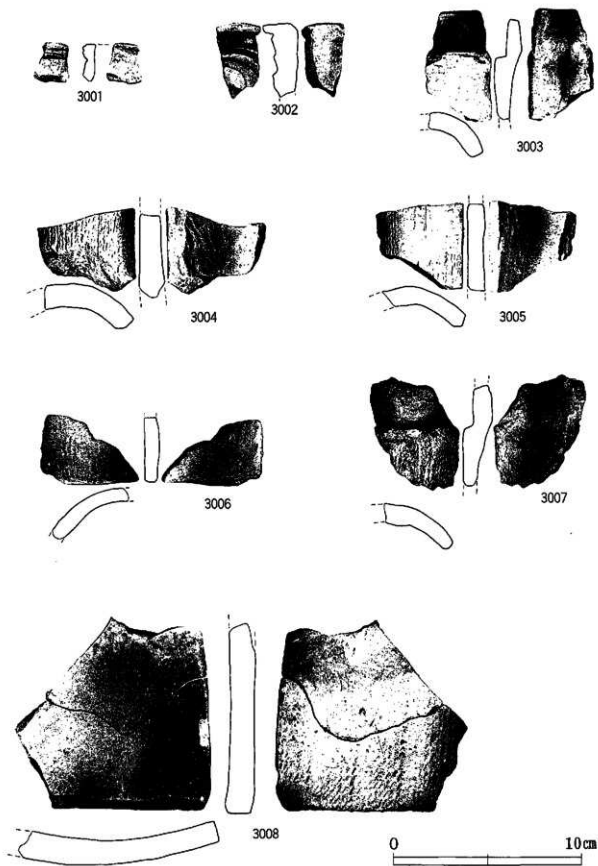
5010



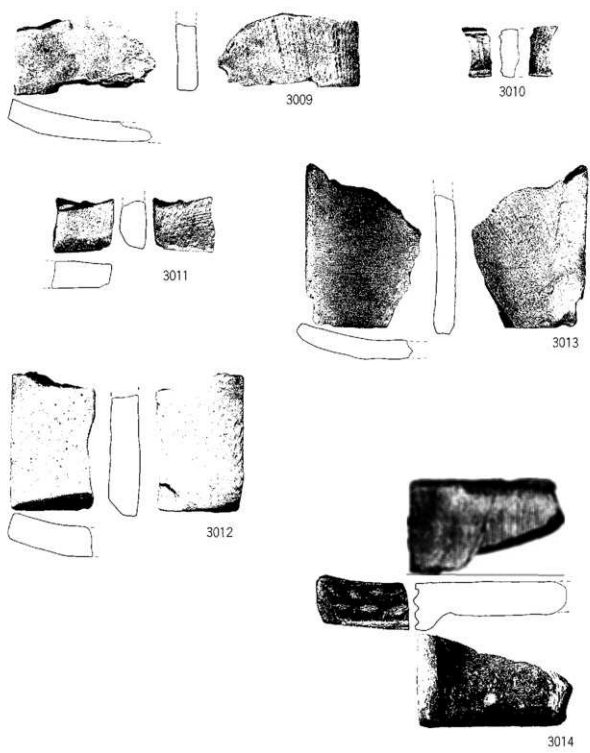
5012



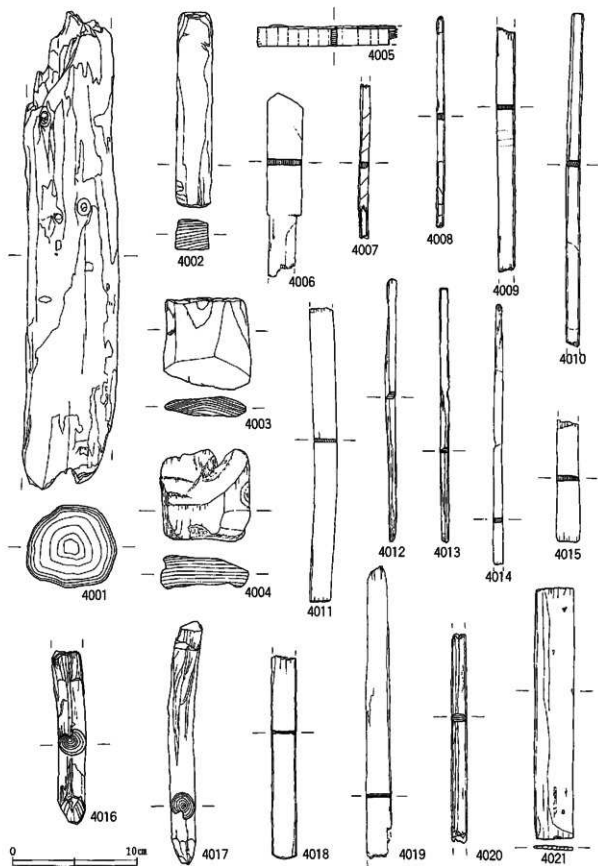
第32图 中国産陶磁器(3)ほか



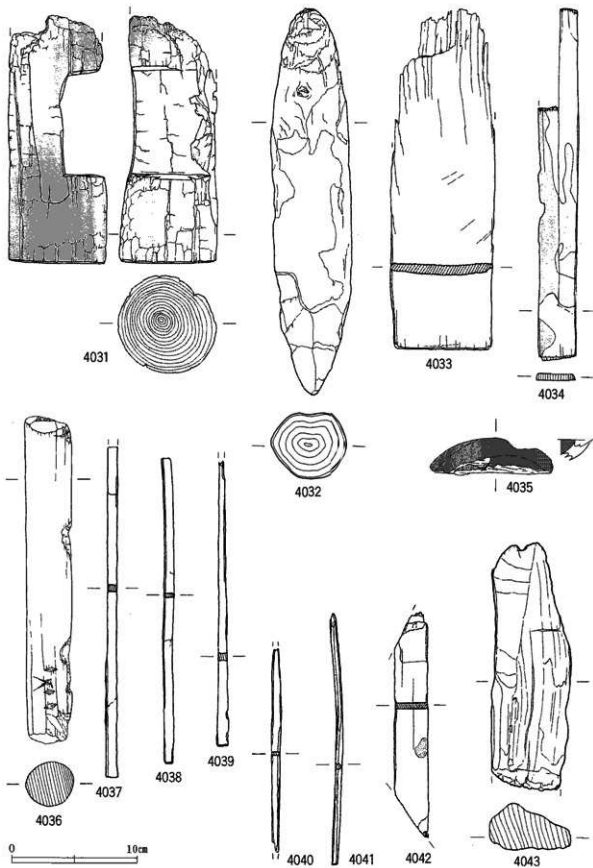
第33圖 瓦 (1)



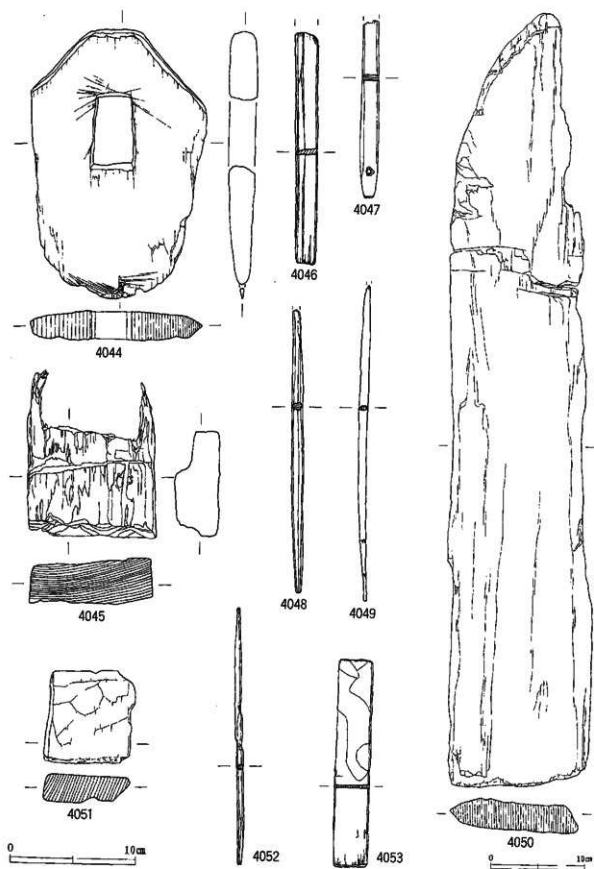
第34圖 瓦 (2)



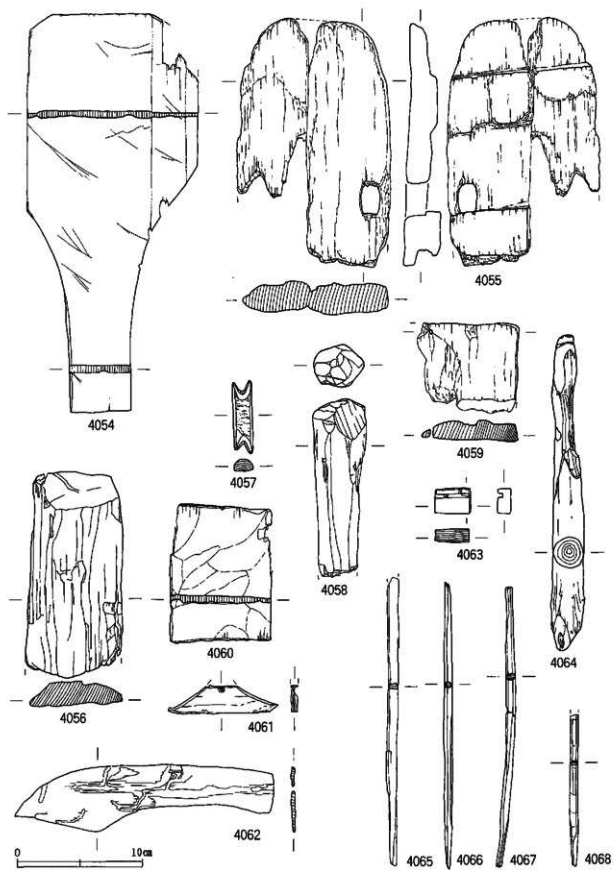
第35圖 木製品(1)



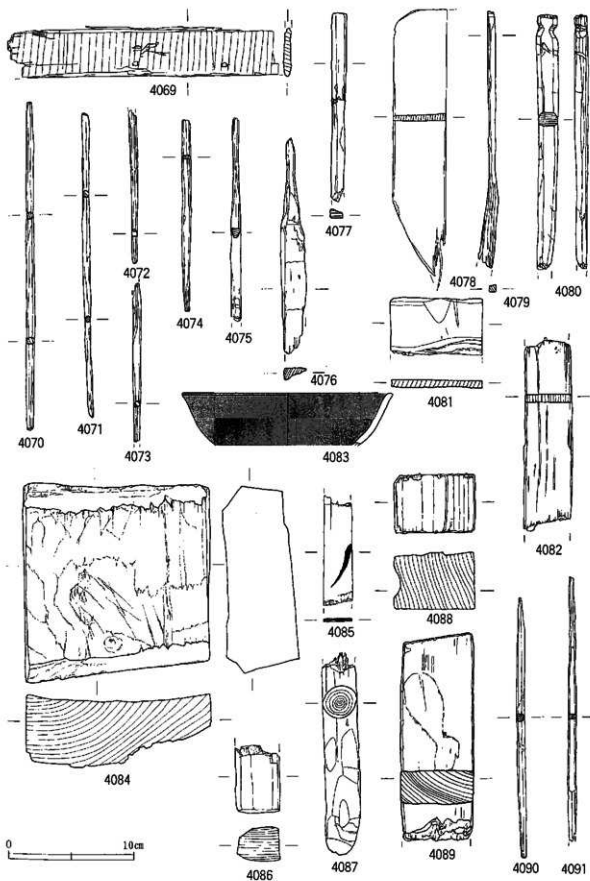
第37図 木製品（3）



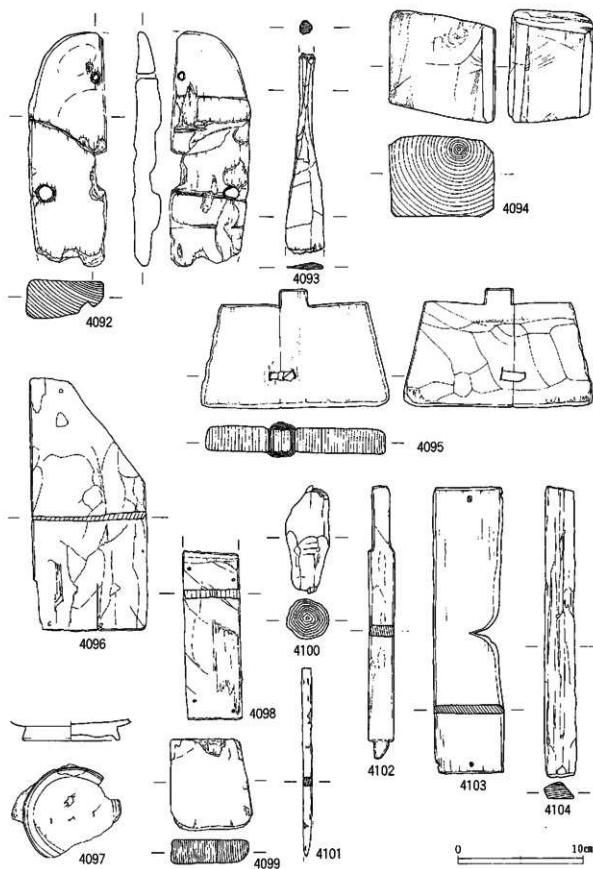
第38图 木製品(4)



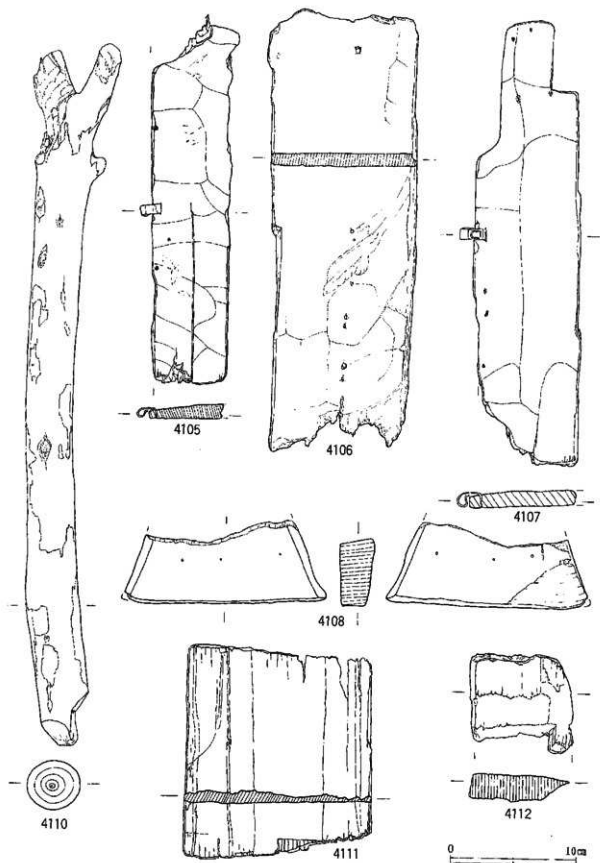
第39圖 木製品 (5)



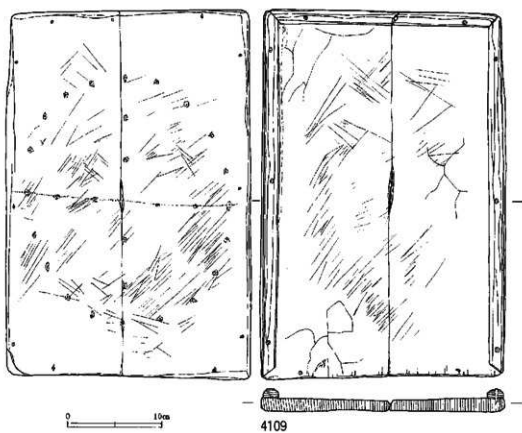
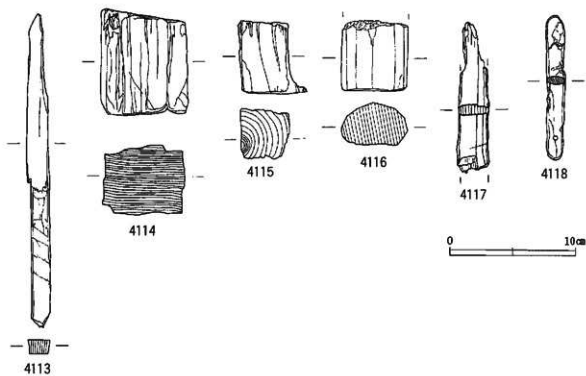
第40圖 木製品 (6)



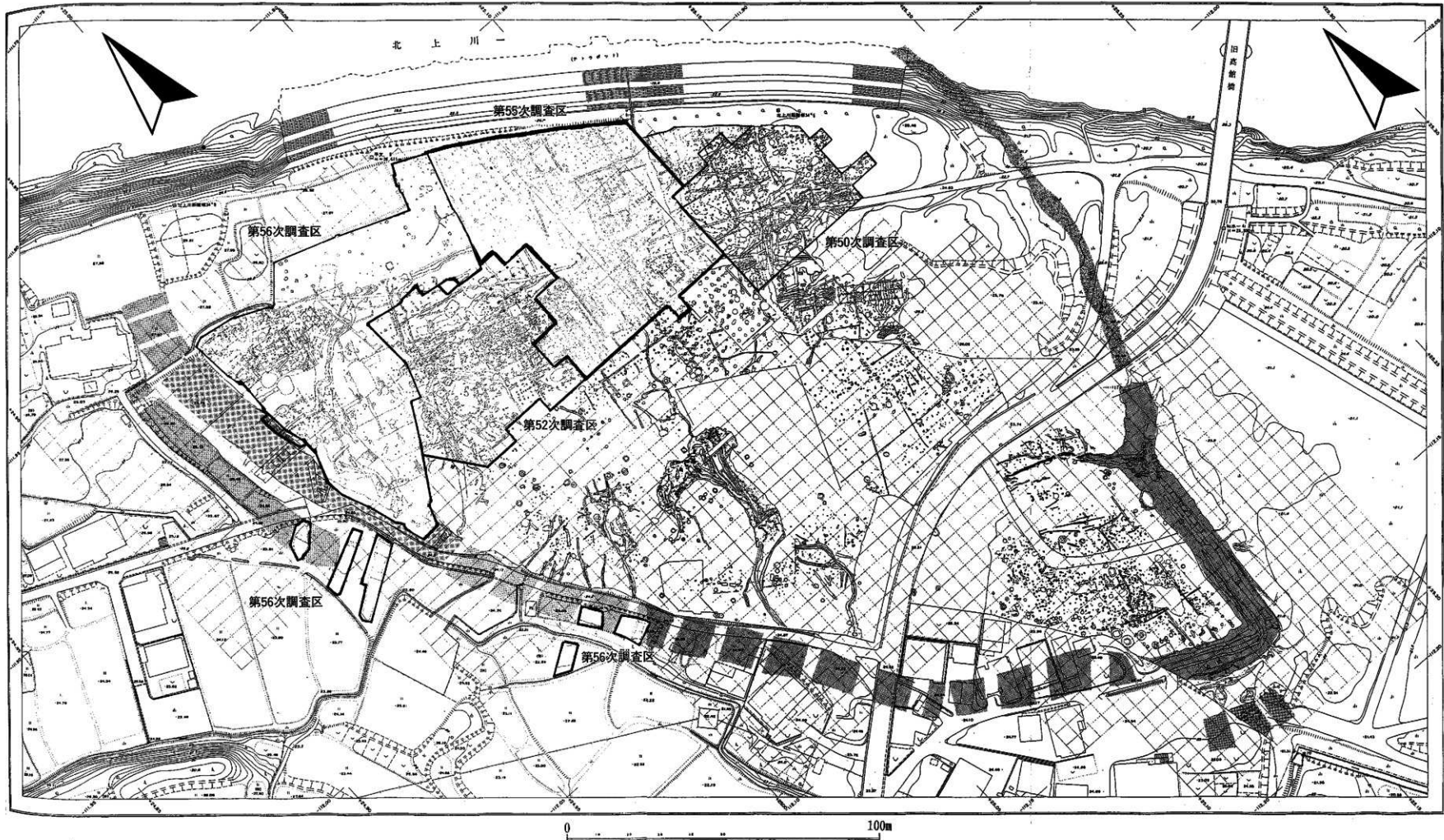
第41圖 木製品(7)



第42圖 木製品(8)



第43図 木製品(9)



第44図 柳之御所遺跡調査区全図

柱穴番号	標高 (m)	深さ (cm)	建物番号
P1	28.279		
P2	28.250		
P3	28.213		
P4	28.251		
P5	28.173		
P6	28.222		56SB7
P7	28.230		
P8	28.239		
P9	28.227		
P10	28.222		
P11	28.221		
P12	28.217		
P13	28.230		
P14	28.228		
P15	28.212		
P16	28.227		
P17	28.232		
P18	28.205		56SB1
P19	28.218		
P20	28.215		56SB2
P21	28.224		56SB6
P22	28.204		
P23	28.219		
P24	28.197		
P25	28.182		
P26	28.181		
P27	28.180		
P28	28.189		
P29	28.195		
P30	28.182		
P31	28.170		
P32	28.166		
P33	28.177		56SB1
P34	28.170		
P35	28.198		
P36	28.158		
P37	28.180		56SB6
P38	28.164		
P39	21.168		56SB2
P40	21.160		
P41	28.137		
P42	28.150		
P43	28.160		
P44	28.177		
P45	28.180		
P46	28.102		
P47	28.090		
P48	28.131		56SH1
P49	28.134		
P50	28.090		
P51	28.114		56SB6
P52	28.111		
P53	28.120		
P54	28.128		56SB2
P55	28.110		
P56	28.102		
P57	28.090		
P58	28.084		
P59	28.098		
P60	28.074		
P61	28.053		56SD1
P62	28.057		
P63	28.212		56SB2
P64	28.183		56SB6
P65	28.169		
P66	28.154		

柱穴番号	標高 (m)	深さ (cm)	建物番号
P67	28.150		
P68	28.167		
P69	28.196		
P70	27.831		56SB7
P71	27.789		
P72	27.980		
P73	27.995		
P74	28.156		
P75	28.154		56SH6
P76	28.135		
P77	28.143		
P78	28.161		
P79	28.131		
P80	28.133		
P81	28.119		
P82	28.125		
P83	28.110		
P84	28.156		
P85	28.179		56SB7 56SH2
P86	28.153		
P87	28.128		56SB7
P88	28.153		
P89	28.158		
P90	28.165		
P91	28.125		
P92	28.090		
P93	28.180		
P94	28.090		
P95	28.125		56SB6
P96	28.130		56SB6
P97	28.155		
P98	28.165		
P99	28.085		
P100	28.115		
P101	28.065		
P102	28.080		
P103	28.020		
P104	28.087		
P105	28.045		
P106	27.879		56SB2
P107	28.025		
P108	27.995		
P109	28.025		
P110	27.954		
P111	28.132		
P112	27.957		56SB8
P113	27.925		56SB8
P114	27.966		
P115	27.972		
P116	27.984		
P117	27.960		56SB8
P118	27.922		
P119	27.933		56SB8
P120	27.984		
P121	28.011		
P122	28.016		
P123	27.945		
P124	27.785		
P125	27.890		
P126	27.810		
P127	27.955		
P128	27.926		
P129	27.890		
P130	27.935		
P131	27.760		

柱穴番号	標高 (m)	深さ (cm)	建物番号
P132	27.692		
P133	28.195		
P134	28.185		
P135	28.185		56SB6
P136	27.933		
P137	27.959		
P138	27.925		
P139	27.892		
P140	27.868		
P141	27.905		
P142	27.918		
P143	27.810		
P144	27.745		
P145	27.725		
P146	27.700		
P147	27.706		
P148	27.695		
P149	27.660		
P150	27.620		
P151	27.580		
P152	28.089		56SB6
P153	28.104		
P154	28.115		56SB6
P155	28.100		
P156	28.088		
P157	28.075		
P158	28.028		
P159	28.034		
P160	28.120		56SB6
P161	28.150		
P162	28.155		56SB6
P163	28.130		56SB6
P164	28.170		
P165	28.160		
P166	28.140		
P167	28.185		
P168	28.170		
P169	28.195		
P170	28.170		
P171	28.095		56SB6
P172	28.030		
P173	28.060		
P174	27.950		
P175	28.150		
P176	27.875		
P177	28.055		
P178	28.055		
P179	28.035		
P180	28.030		
P181	27.905		
P182	27.845		
P183	27.835		
P184	28.030		
P185	28.020		
P186	28.020		
P187	28.000		
P188	28.010		
P189	27.980		
P190	27.965		
P191	27.915		
P192	27.770		
P193	27.760		
P194	27.880		
P195	27.885		
P196	27.785		
P197	28.090		

柱穴計測表(1)

柱穴番号	標高 (cm)	深さ (cm)	建物番号	柱穴番号	標高 (cm)	深さ (cm)	建物番号	柱穴番号	標高 (cm)	深さ (cm)	建物番号
P198	28,125		56SD6	P264	27,630	34.5		P331	28,270		
P199	27,860			P265	27,568			P332	28,245	18.0	56SD4
P200	27,880			P266	27,572			P333	28,260	22.0	
P201	27,730			P267	27,572			P334	28,370	49.5	
P202				P268	27,576			P335	28,150	24.0	
P203	27,660			P269	27,570			P336	28,140	29.4	
P204	27,740			P270	27,560			P337	28,260		
P205	27,766			P271	27,558			P338	28,135	21.5	56SH4
P206	27,777			P272	27,595			P339	28,280	11.2	56SB4
P207	27,756			P273	27,533			P340	28,200	29.8	
P208	27,725			P274	27,468			P341	28,245	29.3	
P209	28,020			P275	27,428			P342	28,295		
P210	27,860			P276	27,468			P343	28,180		
P211	27,940			P277	27,394			P344	28,215		
P212	27,843			P278	27,393			P345	28,285		
P213	27,832			P279	27,390			P346	28,195		56SB7
P214	28,145			P280	27,460			P347	28,255		
P215	27,744			P281	27,568			P348	28,275		
P216	28,998			P282	27,651			P349	28,160		
P217	27,862			P283	27,630			P350	28,175		
P218	27,000			P284	27,614			P351	28,215		
P219	27,799			P285	27,612			P352	28,185		
P220	27,764			P286	27,390			P353	28,175		
P221	27,765			P287	27,585			P354	28,290		
P222	27,724			P288	27,616			P355	28,195		56SB2
P223	27,728			P289	27,620			P356	28,085		56SB7
P224	27,734			P290	27,636			P357	28,125		56SB2
P225	27,744			P291	27,605			P358	28,275		56SB7
P226	27,719			P292	27,604			P359	28,265		
P227	27,755			P293	27,862			P360	28,170		56SD7
P228				P295	27,856			P361	28,175		
P229	27,982			P296	27,834			P362	28,180		
P230	27,712			P297	27,800			P363	28,150		
P231	27,780			P298	27,799			P364	28,145		56SB7
P232	27,762			P299	27,810			P365	28,200		56SD1
P233	27,769			P300	27,809			P366	28,210		56SB1
P234	27,751			P301	27,818			P367	28,235		
P235	27,775			P302	27,860			P368	28,215		
P236	27,737			P303	27,555			P369	28,210		
P237	27,772			P304	27,630			P370	28,160		
P238	27,755			P305	27,564			P371	28,145		56SH1 56SH2
P239	27,598			P306	27,609			P372	28,170		
P240	27,600			P307	27,927			P373	28,170		
P241	27,590			P308				P374	28,170		
P242	27,565			P309	27,809			P375	28,185		
P243	27,562			P310	28,140			P376	28,175		
P244	27,574			P311	27,950			P377	28,180		
P245	27,568			P312	27,914			P378	28,200		
P246	27,566			P313	27,882			P379	28,195		
P247	27,552			P314	27,894			P380	28,185		
P248	27,570			P315	27,949			P381	28,135	17.1	
P249	27,523			P316	27,873			P382	28,115	15.9	
P250	27,547			P317	27,676			P383	28,170	5.8	
P251	27,571			P318	27,774			P384	28,230		
P252	27,572			P319				P385	27,245		
P253	27,520			P320	27,966			P386	28,240		
P254	27,582			P321	28,047			P387	28,230		
P255	27,539			P322				P388	28,235		
P256	27,549			P323				P389	28,255		
P257	27,542			P324	28,041			P390	28,250	8.0	
P258	27,587			P325				P391	28,265	8.7	
P259	27,586			P326	28,205			P392	28,260	18.8	56SH4
P260	27,310			P327	28,235		56SH4	P393	28,265	9.5	
P261	27,685			P328	28,160	15.4		P394	28,270	25.6	
P262	27,712			P329	28,230			P395	28,290		
P263	27,673			P330	28,250						

柱穴計測表(2)

柱穴番号	標高 (m)	深さ (cm)	建物番号
P396	28.510	21.4	
P397	28.215	36.3	56SH4
P398	28.220	37.0	56SB4
P399	28.210		
P400	28.270		56SB4
P401	28.265	16.3	
P402	28.240		
P403	28.175		
P404	28.095		
P405	28.120		
P406	28.185	28.5	
P407	28.150		
P408	28.230	19.8	
P409	27.750		
P410	28.260		56SB4
P411	27.860		
P412	28.265		
P413	28.270		
P414	28.230		
P415	28.260	15.6	
P416	28.255	19.5	
P417	28.245	8.0	
P418	28.075	39.0	
P419	28.065	39.7	
P420	27.934	6.9	
P421	28.170		
P422	28.095		
P423	28.225		
P424	28.210		
P425	28.235		
P426	28.080		
P427	28.281		
P428	28.225		
P429	28.185		
P430	28.050		56SB2
P431	28.160		
P432	27.905		
P433	27.835		
P434	27.855		
P435	28.000		
P436	27.895		
P437	27.870		
P438	27.970		56SB1
P439	28.175		
P440	28.175		
P441	28.140		
P442	28.045		
P443	27.815		
P444	27.825		56SB3
P445	27.990		56SB2
P446	27.940		56SB1
P447	27.935		56SB2
P448	27.880		56SB2
P449	27.775		
P450	27.755		
P451	28.115		
P452	27.985		
P453	28.245	41.7	56SB4
P454	28.070		
P455	28.195		56SB2
P436	28.265	21.5	
P457	28.230	14.2	
P458	27.743		
P459	27.689		56SB3
P460	27.744		
P461	27.803		

柱穴番号	標高 (m)	深さ (cm)	建物番号
P462	28.140		
P463	28.125		
P464	28.130		56SB1・ 56SB2
P465	28.165		
P466	28.135		
P467	28.260		
P468	28.130		
P469	28.250		
P470	28.240		
P471	28.110		
P472	28.085		
P473	28.090		
P474	28.065		56SB2
P475	28.095		56SB1
P476	28.225		
P477			
P478	28.020		
P479	28.145		
P480	28.090		
P481	27.960		
P482	27.950		
P483	27.930		
P484	27.810		
P485	28.175		
P486	28.120		
P487	27.870		56SB1
P488	27.940		
P489	27.835		56SD2
P490	27.880		
P491	27.850		
P492	27.915		56SB1
P493	27.960		
P494	27.940		
P495	27.920		
P496	28.015		
P497	28.005		
P498	28.020		
P499	27.955		
P500	27.975		
P501	27.965		
P502	27.880		56SB2
P503	27.855		56SB1
P504	27.875		
P505	27.945		
P506	27.889		
P507	27.985		
P508	27.975		
P509	27.950		
P510			
P511	28.265		
P512	28.230		
P513	28.215		
P514	28.235		
P515	28.075		
P516	28.120		
P517	28.140		
P518	28.165		
P519	28.140		
P520	28.035		56SB2
P621	28.145		
P522	28.130		
P523	28.095		
P524	28.065		
P525	28.070		
P526	28.055		

柱穴番号	標高 (m)	深さ (cm)	建物番号
P527	28.000		
P528	27.955		
P529	27.870		
P530	27.915		56SB2
P531	27.945		
P532	27.935		
P533	27.890		
P534	27.875		56SB2
P535	27.845		
P536	27.850		
P537	27.860		
P538	27.910		
P539	27.830		
P540	27.890		56SB2
P541	27.925		56SB2
P542	27.995		56SB2
P543	27.975		
P544	28.180		
P545	28.095		56SB2
P546	27.945		
P547	28.120		
P548	28.160		
P549	27.955		56SD1
P550	28.045		56SB1
P551	28.165		
P552	28.150		
P553	27.855		
P554	27.975		
P555	27.935		
P556	27.965		
P557	27.950		
P558	27.830		
P559	27.975	21.3	56SH3
P560	28.125		
P561	27.815		
P562	27.825		
P563	27.988	22.3	
P564	27.890		
P565	27.860		56SD1
P566	27.970		
P567	27.755		
P568	27.820		56SH1
P569	28.065		56SB1
P570	28.115		
P571	28.095		
P572	27.975		
P573	27.890		
P574	28.160		56SD1
P575	27.930	20.2	
P576	27.893		56SB3
P577	27.975	63.5	56SH5
P578	27.735	44.9	56SB5
P579	27.720	25.6	56SB3
P580	27.945		
P581	27.870	17.2	
P582	28.260	10.6	
P583	28.295		
P584	28.265	19.1	
P585	28.210	39.5	56SB4
P586	28.085	13.5	
P587	28.060		
P588	27.975		
P589	28.140		
P590	28.215		
P591	28.230		
P592	28.220		

柱穴計測表(3)

番号	出土位置	分類	法京 (cm)		底径/口径	高さ	底径/口径	口径	色調	透存率 (%)	胎土	備考	図版
			口径	底径									
1	SE1 埋土上層	D 3	14.0	—	2.7	—	80.0	灰白	50	細砂		17 25	
2	SR1 16層	D 3	9.0	—	2.3	—	50.0	淡黄	30	細砂		17 —	
3	SE1 12層	ワタロ小	9.2	5.0	2.2	0.65	30.0	灰白	30	砂、骨針	すのこ版	17 —	
4	SE1 1層	ワタロ小	9.6	5.8	1.8	0.60	30.0	黄橙	30	砂、骨針		17 —	
5	SE1 17層(仮)	—	—	—	—	—	—	—	—	—		17 —	
6	SK6 埋土	C 3	15.6	—	—	—	20.0	淡黄橙	25	細砂	風化著しい	17 —	
7	SK24 埋土	ワタロ小	8.0	5.6	1.5	0.70	20.0	淡橙	25	砂、骨針		17 —	
8	SK26 3層	D 3	8.8	—	1.6	—	40.0	灰白	70	細砂	すのこ版	17 25	
9	SK26 8層	ワタロ小	9.6	5.3	1.8	0.66	90.0	淡黄	95	砂、骨針		17 25	
10	SK26 5層	ワタロ小	9.0	6.0	1.5	0.67	30.0	灰白	30	骨針		17 25	
11	SK27 19層(中)	D 3	12.0	—	2.1	—	50.0	灰白	45	細砂	底に紐目	17 —	
12	SK29 3・4層埋土	ワタロ小	13.8	—	—	—	40.0	灰白	20	砂、骨針		17 —	
13	SK27 9層	ワタロ大	13.0	7.0	3.7	0.54	50.0	灰白	30	砂、骨針	風化著しい	17 —	
14	SK28 埋土	C 4	16.0	—	4.2	—	60.0	黄灰	30	細砂		17 —	
15	SK28 埋土	C 4	14.6	—	2.6	—	50.0	淡黄	40	細砂		17 —	
16	SK26 埋土	D 2	9.0	—	1.8	—	30.0	灰白	45	細砂	底に指紋	17 25	
17	SK26 埋土	D 4	13.4	—	3.0	—	60.0	灰白	40	細砂		17 —	
18	SK26 埋土	C 3	13.8	—	—	—	130.0	灰白	80	細砂	すのこ版	17 25	
19	SK28 10層	内折れ	9.2	—	1.3	—	20.0	灰白	30	細砂、骨針		17 25	
20	SK28 埋土	ワタロ小	9.4	5.5	1.7	0.69	30.0	淡黄	35	砂、骨針		17 —	
21	SK28 埋土	ワタロ小	9.0	6.1	2.3	0.68	80.0	灰白	95	砂、骨針		17 25	
22	SK29 3層	D 3	14.0	—	2.8	—	60.0	灰白	40	細砂	内面黒	17 —	
23	SK29 3・5層	C 3	15.2	—	3.5	—	40.0	灰白	30	細砂		17 —	
24	SK31 1層	C 3	15.6	—	2.8	—	30.0	淡黄橙	20	細砂		17 —	
25	SK31 6層	ワタロ小	—	6.4 (2.0)	—	—	60.0	灰白	35	砂、骨針		17 —	
26	SK33 7層	D 2	14.0	—	3.0	—	140.0	淡黄	70	細砂	すのこ版	17 25	
27	SK33 6層	D 2	14.1	—	3.0	—	165.0	灰白	95	細砂	すのこ版	17 25	
28	SK33 7層	D 2	13.6	—	2.5	—	150.0	灰黄	80	細砂、金糸母		17 25	
29	SK33 10層	D 3	14.0	—	2.8	—	190.0	灰白	100	細砂	すのこ版	17 25	
30	SK33 8層	C 3	13.0	—	2.9	—	165.0	灰白	95	細砂	すのこ版、内面黒	17 25	
31	SK33 埋土	C 4	14.0	7.4	3.0	0.53	100.0	淡黄	40	細砂	すのこ版	17 25	
32	SK33 8層	D 3	9.3	—	1.9	—	75.0	灰白	100	細砂		17 25	
33	SK33 8層	D 3	9.6	—	1.6	—	—	灰白	30	細砂、金糸母		17 —	
34	SK33 8層	D 3	8.4	—	1.6	—	20.0	にぶい黄橙	40	細砂、内面黒		17 —	
35	SK33 8層	ワタロ小	8.0	5.6	1.9	0.70	50.0	灰白	60	砂、骨針		17 —	
36	SK33 11層	ワタロ小	8.4	6.0	1.7	0.71	20.0	灰白	30	砂、骨針		17 —	
37	SK33 8層	ワタロ小	9.2	5.4	1.8	0.59	20.0	灰黄	40	砂、骨針	貯土に金糸母	17 —	
38	SK33 7・36層	ワタロ小	8.0	3.0	1.5	0.63	40.0	橙	60	砂、骨針		17 25	
39	SK34 14層	C 4	14.0	—	3.3	—	200.0	灰白	100	細砂	すのこ版	18 26	
40	SK34 2層	ワタロ小	9.2	6.2	1.9	0.67	50.0	にぶい橙	40	砂、骨針		18 —	
41	SK34 6層	ワタロ小	8.4	6.0	1.8	0.71	50.0	淡黄橙	80	砂、骨針		18 —	
42	SK52 埋土	ワタロ小	8.4	5.4	1.8	0.64	20.0	にぶい黄橙	50	砂、骨針		18 —	
43	SK53 1・2層	C 3	14.4	—	—	—	40.0	淡黄橙	20	砂		18 —	
44	SK53 埋土	ワタロ大	13.6	7.8	3.7	0.57	180.0	灰白	70	砂、骨針		18 26	
45	SK53 1・2層	ワタロ大	16.4	7.6	3.8	0.46	50.0	淡黄橙	20	砂、骨針		18 —	
47	SK53 13層	ワタロ小	8.5	5.1	2.0	0.69	65.0	淡黄橙	95	砂、骨針	すのこ版	18 —	
48	SK67 2層	ワタロ小	9.3	6.0	1.6	0.65	20.0	灰白	20	骨針		18 —	
49	SK80 埋土上層	D 2	12.4	—	2.0	—	40.0	淡黄橙	25	細砂	すのこ版	18 —	
50	SK80 埋土下層	D 3	9.2	—	1.1	—	25.0	にぶい黄橙	45	砂、骨針	二次焼熟	18 —	
51	SK80 埋土下層	D 4	9.2	—	2.0	—	45.0	淡黄	50	細砂	すのこ版	18 26	
52	SK80 埋土	C 4	14.6	—	2.7	—	105.0	淡黄	50	細砂、砂?		18 26	
53	SK80 埋土	C 3	15.0	—	3.5	—	145.0	灰白	50	細砂	すのこ版	18 26	
54	SK80 埋土下層	ワタロ大	14.3	6.2	3.7	0.43	215.0	黄橙	70	砂、骨針		18 26	
56	SK80 埋土下層	ワタロ小	8.6	5.8	1.4	0.67	65.0	灰白	75	砂、骨針		18 26	
56	SK80 埋土下層	ワタロ小	9.0	6.4	1.8	0.71	45.0	灰白	50	砂、骨針		18 26	
57	SK99 埋土	D 2	11.2	—	1.7	—	30.0	淡黄橙	20	細砂	内面黒	18 —	
58	SK99 南平	D 3	12.6	—	2.5	—	75.0	淡黄橙	50	細砂	すのこ版	18 26	
59	SK99 南平	D 4	13.4	—	—	—	40.0	橙	30	細砂		18 —	
60	SK99 南平	D 3	8.2	3.2	1.7	0.63	10.0	にぶい黄橙	5	細砂		18 —	
61	SK99 埋土	D 3	8.8	—	1.5	—	10.0	淡黄	20	細砂	すのこ版	18 —	
62	SK99 南平埋土	D 4	10.4	—	2.0	—	70.0	灰白	100	細砂	口唇に黒	18 26	
63	SK99 埋土	ワタロ小	9.0	5.3	1.6	0.59	60.0	黄橙	100	砂、骨針		18 26	
64	SK99 南平	ワタロ大	12.4	6.8	(2.8)	0.55	20.0	淡黄橙	10	砂、骨針		18 —	
65	SK99 南平	ワタロ小	—	5.0 (1.0)	—	—	35.0	にぶい黄橙	30	砂、骨針		18 —	
66	SK99 南平	ワタロ小	—	5.4 (1.5)	—	—	50.0	にぶい橙	40	砂、骨針		18 —	
67	SD20 埋土	D 3	14.0	—	3.8	—	70.0	淡黄橙	30	細砂	風化著しい	18 —	

かわらけ観察表 (1)

番号	出 土 位 置	分 類	法長 (cm)			底径/ 口径	高さ (R)	色 調	遺存率 (%)	胎 土	備 考	図版	写真 図版
			口径	底径	高さ								
68	SD20 竪上	D3	13.0	-	2.6	-	30.0	にぶい殻	25	細砂		18	-
69	SD20 竪下段	ロタロ	-	12.6	(1.3)	-	60.0	淡黄	5	砂、骨針		18	26
70	SD20 竪上	ロタロ小	9.0	6.6	1.7	0.73	30.0	黄	50	砂、骨針		18	-
71	SD90 横出	-	-	-	-	-	20.0	淡黄	-	-	十割器か	18	-
72	SD38 27層	D2	14.4	-	2.9	-	100.0	灰黄	45	細砂		19	-
73	SD38 27層	D4	14.4	-	3.0	-	210.0	にぶい黄殻	95	細砂		19	26
74	T2 SD38 3層	D3	8.8	-	-	-	30.0	淡黄	50	細砂		19	26
75	SD38 27層	C3	13.2	-	3.2	-	150.0	淡黄	98	細砂		19	26
76	SD38 28層	C4	15.4	-	-	-	100.0	淡黄	60	細砂	すのこ板	19	27
77	SD38 27層	C3	9.2	-	2.0	-	40.0	灰白	60	細砂	底に指紋	19	27
78	SD38 28層	ロタロ大	13.0	6.5	-	0.43	80.0	灰白	40	骨針		19	27
79	SD38 27層	ロタロ大	13.6	7.8	3.5	0.50	120.0	灰白	60	砂、骨針		19	27
80	SD38 14層	ロタロ大	14.3	5.9	3.6	0.41	135.0	灰白	80	砂、骨針	すのこ板	19	27
81	SD38 27層	ロタロ大	14.2	7.6	4.0	0.54	280.0	灰白	90	砂、骨針		19	27
82	SD38 28層	ロタロ大	14.6	6.5	3.9	0.45	120.0	淡黄	45	砂、骨針		19	-
83	SD38 竪上	柱状高台	-	8.0	(3.2)	-	95.0	淡黄	45	砂、骨針		19	27
84	SD38 27層	ロタロ小	9.4	5.5	2.0	0.59	50.0	淡黄	60	砂、骨針		19	27
85	T1 SD38 竪上	ロタロ小	9.2	7.4	1.7	0.80	60.0	淡黄	70	砂、骨針		19	27
86	SD38 27層	ロタロ小	8.6	5.3	1.6	0.62	60.0	にぶい黄殻	100	砂、骨針		19	27
87	SD38 28層	ロタロ小	8.6	5.7	2.0	0.66	60.0	にぶい黄殻	70	砂、骨針		19	27
88	SD38 27層	ロタロ小	8.8	5.8	1.9	0.66	50.0	淡黄	50	砂、骨針		19	27
89	SD38 28層	ロタロ小	9.2	6.3	1.7	0.68	60.0	灰白	80	砂、骨針		19	27
90	T2 SD38 竪上	D3	13.8	-	3.0	-	50.0	灰白	30	細砂		19	27
91	T2 SD38 竪上	D3	16.0	-	3.3	-	200.0	灰白	95	細砂	すのこ板	19	27
92	T2 SD38 27層	D4	14.2	-	3.2	-	195.0	灰白	95	細砂	すのこ板	19	27
93	T2 SD38 28層	D4	14.2	-	3.1	-	160.0	灰白	100	細砂		19	28
94	T2 SD90 皿・ N材、1-3層	D4	13.2	-	-	-	100.0	灰白	80	細砂		19	28
95	T2 竪出 瓦層	ロタロ大	13.4	6.8	4.1	0.44	70.0	灰白	30	骨針		19	-
96	T2 竪出 瓦層 SD38-39の間	ロタロ大	13.4	7.6	-	0.57	120.0	淡黄	50	骨針		19	28
97	T4 SD38 1-3層	D3	10.0	-	2.4	-	30.0	灰白	60	細砂		19	-
98	T4 SD38 13層	D4	13.6	-	3.2	-	120.0	淡黄	50	細砂	すのこ板	19	28
99	T4 SD38 13層	C3	14.0	-	2.8	-	60.0	淡黄	30	細砂	底に指紋	19	-
100	T4 SD38 13層	ロタロ大	14.4	6.6	3.8	0.46	170.0	灰白	60	砂、骨針		19	28
101	T4 竪上中	ロタロ大	13.8	6.2	3.3	0.45	110.0	淡黄	60	砂、骨針		19	28
102	T4 SD38 竪上	ロタロ大	14.0	7.6	3.8	0.54	210.0	灰白	95	砂、骨針		19	28
103	T4 SD38 11-25層	ロタロ小	-	5.0	(2.5)	-	20.0	黄	5	砂、骨針		19	-
104	T4 SD38 15層	ロタロ小	9.0	5.7	2.3	0.63	60.0	灰白	60	砂、骨針		19	28
105	SD40 南武蔵野土	ロタロ小	12.8	5.2	3.8	0.41	50.0	淡黄	40	砂、骨針		20	28
106	SD40 竪上 63-53	ロタロ小	8.8	-	2.0	-	10.0	淡黄	20	砂、骨針		20	28
107	SD40 竪上 63-52	ロタロ小	-	4.7	(1.2)	-	40.0	黄	65	砂、骨針		20	28
108	竪出層 北平	ロタロ小	8.0	5.7	-	0.71	30.0	淡黄	70	砂、骨針		20	28
109	竪出層 北平	ロタロ小	8.6	6.0	2.0	0.70	30.0	にぶい黄殻	40	砂、骨針		20	28
110	竪出層 北平・ 北高野原土	ロタロ小	8.4	6.5	2.2	0.77	80.0	にぶい殻	100	砂、骨針		20	28
111	西郷豊後屋 土層	C3	15.4	-	3.5	-	225.0	淡黄	100	細砂	すのこ板	20	28
112	竪出層 南平上層	D3	8.6	-	2.4	-	50.0	淡黄	80	細砂		20	28
113	SK99 西平上層	D3	9.2	-	2.0	-	40.0	淡黄	80	砂		20	29
114	竪出層 南平上層	D3	8.6	-	1.7	-	40.0	淡黄	70	細砂		20	29
115	竪出層 南平上層	D3	8.8	-	2.0	-	50.0	淡黄	100	細砂		20	29
116	竪出層 南平上層	D4	14.4	-	3.0	-	110.0	灰白	95	細砂		20	29
117	竪出層 南平上層	C3	9.0	-	2.0	-	50.0	灰白	95	細砂		20	29
118	竪出層 南平上層	D4	8.6	-	2.2	-	60.0	淡黄	100	細砂		20	29
119	竪出層 南平上層	ロタロ大	14.2	6.3	4.2	0.44	200.0	黄	95	粗砂、骨針		20	29
120	竪出層 南平上層	ロタロ大	13.6	6.6	3.3	0.49	100.0	黄	60	砂、骨針		20	29
121	竪出層 南平上層	ロタロ小	9.0	5.9	2.7	0.66	60.0	黄	95	砂、骨針		20	29
122	竪出層 南平上層	ロタロ小	7.2	4.0	1.6	0.56	20.0	淡黄	70	砂、骨針	洗滌最小	20	29
123	竪出層 南平上層	ロタロ小	9.2	6.8	1.7	0.74	120.0	淡黄	98	砂、骨針		20	29
124	竪出層 南平上層	ロタロ小	9.0	5.2	1.7	0.58	50.0	淡黄	98	砂、骨針		20	29
125	竪出層 南平上層	ロタロ小	8.8	6.2	1.7	0.70	50.0	淡黄	100	砂、骨針		20	29
126	竪出層 南平上層	柱状高台	-	3.8	(1.9)	-	-	黄	30	-		20	-

かわらけ観察表(2)

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他	版取	写真 面取
1001	常滑	壺か	胴部	SK26 埴土	12C	オリーブ灰		21	31
1002	常滑	片口鉢	底部	SK28 9層	12C	黄灰	ヘラケズリ	21	29
1003	常滑	壺	体部	SK28 埴土	12C	暗オリーブ	外面に輪	21	31
1004	常滑	壺か	口縁部	SK33 2層	12C	暗オリーブ		21	31
1005	常滑	広口壺	胴部	SK33 6・8層	12C	暗オリーブ	3型式の壺か、外面に輪	21	31
1006	常滑	壺	底部	SK33 埴土	12C	黒焼		21	31
1007	常滑	片口鉢	底部	SK52 埴土	12C	灰黄	ヘラケズリ、外面に煤	21	31
1008	常滑	壺	口縁部	SK53 13層	12C	オリーブ	2型式か	21	31
1009	常滑	壺	体部	SK53 1・2層	12C	にぶい黄橙	押印	21	31
1010	常滑	壺	体部	SK53 8-13層	12C	オリーブ焼		21	31
1011	常滑	壺	体部	SK53 1・2層	12C	暗黄灰	2種類の押印	21	32
1012	常滑	壺	体部	SK94 埴土	12C	にぶい赤褐	底部に近い部分か	21	32
1013	常滑	壺	胴部	SD19 (埴地層南半)	12C	オリーブ	外面に輪	21	32
1014	常滑	片口鉢	口縁部	SD20 埴土(66-53)	12C	灰白	外面ヘラケズリ	21	32
1015	常滑	片口鉢	底部	SJ20 埴土	12C	灰白	外面ヘラケズリ	21	30
1016	常滑	壺	口縁部	SD20(64-53)	12C	にぶい赤褐	長頸壺か	22	32
1017	常滑	壺	胴部	SD20 埴土66-53	12C	灰地	突帯がつく	22	32
1018	常滑	壺	体部	SD20 埴土	12C	灰褐	突帯、輪の流れ	22	32
1019	常滑	壺	口縁部	SD20 埴土	12C	褐灰	1b型式か	22	32
1020	常滑	壺	体部	SD20 埴土	12C	にぶい壺		22	32
1021	常滑	壺	胴部	SD20(64-53)	12C	灰オリーブ	3型式、胴部黒色	22	32
1022	常滑	壺	体部	SD20 埴土	12C	オリーブ灰		22	32
1023	常滑	壺	胴部	SD20 埴土	12C	オリーブ黄	2型式	22	32
1024	常滑	壺	体部	SD20 埴土	12C	灰地	押印、帯突か	22	32
1025	常滑	壺	体部	SD20 埴土	12C	暗青褐	2種類の押印	22	32
1026	常滑	壺	体部	SD20 埴土(59-60)	12C	黒焼	押印	22	32
1027	常滑	壺	口縁部	SD37(T2) 1層	12C	灰オリーブ		22	33
1028	常滑	壺	口縁部	SD37(T2) 埴土	12C	オリーブ黄		22	33
1029	常滑	壺	口縁部	SD37(T2) 埴土	12C	灰オリーブ	2-3型式	22	33
1030	常滑	壺	胴部	SD37(T3)	12C	灰赤	中国産陶器か	22	33
1031	常滑	片口鉢	体部	SD37(T2) 1層	12C	灰白	ヘラケズリ	22	33
1032	常滑	広口壺	胴部	SD37(T2) 埴土	12C	灰青黄	外面に輪の流れ	22	33
1033	常滑	壺	底部	SD37(T3)	12C	黄灰	帯突か	22	33
1034	常滑	壺	底部	SD37(T2) 埴土	12C	暗青灰	内面に輪	22	33
1035	常滑	壺	口縁部	SD38(T1)	12C	褐灰	口縁に沈線	22	33
1036	常滑	片口鉢	口縁部	SD38(T2) 1・2層	12C	褐灰		22	33
1037	常滑	三趾壺	胴部	SD38 19層	12C	灰オリーブ	内面無輪	22	33
1038	常滑	壺か	口縁部	SD39(T4) 埴土	12C	灰赤	中国産陶器か	22	33
1039	常滑	広口壺	口縁部	SD39(T1) 埴土	12C	灰オリーブ	2-3型式、内面自然輪	22	33
1040	常滑	壺	胴部	SD38(59-66) 3層	12C	褐灰		22	33
1041	常滑	壺	底部	SD38(58-66) 3層	12C	オリーブ灰	胎土に小礫多量	22	33
1042	常滑	壺か	体部	SD39(T4) 8層	12C	黒焼		22	33
1043	常滑	片口鉢	底部	SD39(T1)	12C	黄灰	ヘラケズリ	22	33
1044	常滑	壺	口縁部	SD39(T2)	12C	オリーブ灰	黄の可能性ある	22	33
1045	常滑	壺	体部	SD38(T1) 埴土	12C	暗オリーブ	押印	22	33
1046	常滑	壺	底部	SD37(T3)	12C	にぶい壺		22	30
1047	常滑	壺	体部	SD40 横断面(63-53)	12C	暗赤褐	広口壺か	22	33
1048	常滑	山形罎	底部	SD40 埴土(62-52)	12C	灰白		22	30
1049	常滑	壺	口縁部	SX1 2層	12C	暗赤褐	1b-2型式か	22	33
1050	常滑	壺	口縁部	SX3 埴土	12C	灰オリーブ		22	33
1051	常滑	壺	口縁部	豊地層北半	12C	灰オリーブ		22	33
1052	常滑	壺か	体部	豊地層北半	12C	黒焼	輪の流れ	22	33
1053	常滑	壺	胴部	SX16輪出面	12C	灰	須臾系系陶器か	22	33
1054	常滑	片口鉢	T2 盤地層	12C	灰白			22	34
1055	常滑	壺	T2 皿層	12C	黄灰			22	33
1056	常滑	壺	T2 皿層	12C	灰オリーブ		帯突か	22	34
1057	常滑	壺	T2 皿層	12C	灰オリーブ		押印	22	34
1058	常滑	壺	T2 皿層	12C	にぶい赤褐		押印	22	34
1059	常滑	片口鉢	T4	12C	灰白			22	30
1060	常滑	片口鉢	SX8-51	12C	褐灰			22	34
1061	常滑	壺	口縁部	59-59	12C	黒焼		22	34
1062	常滑	壺	口縁部	灰採	12C	灰黄	中国産陶器か	22	34
1063	常滑	壺	口縁部	灰採	12C	にぶい赤褐		22	34
1064	常滑	壺	口縁部	74-49	12C	灰		22	34
1065	常滑	壺	口縁部	50-59	12C	赤褐	内面に輪	22	34
1066	常滑	壺	口縁部	67-54 68-54	12C	黒焼	内面に輪	22	34

国産陶器観察表(1)

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他	図版	写真 掲載
1067	常滑	甕	体部	62-35	12C	灰灰	押印	24	34
1068	常滑	甕	胴部	74-49	12C	オリーブ黄		24	34
1069	常滑	甕	体部	松本レンチ	12C	黒褐	押印	24	34
1070	常滑	三筋壺	胴部	表探	12C	黒灰		24	34
1071	常滑	甕	体部	遺跡外	12C	黒灰	押印	24	34
1072	常滑	壺	底部	65-32(水田橋)	12C	灰白	須恵系陶器か	24	34
1073	常滑	壺	底部	61-60	12C	にぶい黄	押印	24	34
1074	常滑	片口鉢	底部	57-61 0層	12C	灰白	外周ヘラケズリ	24	34
1075	瀬美	山茶碗	口縁部	SE1・SD19 掘上	12C	青灰		24	35
1076	瀬美	壺	胴部	SE1 1-7層	12C	暗オリーブ	装束等文様	24	35
1077	瀬美	甕	胴部	SK53 1・2層	12C	暗オリーブ	外周に輪	24	35
1078	瀬美	甕	底部	SK29 埋土	12C	緑灰	内面に輪	24	35
1079	瀬美	甕	口縁部	SK33 1層	12C	灰		24	35
1080	瀬美	山茶碗	底部	SK43 1層	12C	明緑灰	内周に輪	24	30
1081	瀬美	甕	口縁部	SK53 3-5層	12C	灰		25	35
1082	瀬美	甕	体部	SK63 検出面	12C	暗赤褐		25	35
1083	瀬美	壺	胴部	SK80 埋土	12C	灰白	割線	25	35
1084	瀬美不明	甕	胴部	SK99 掘上	12C	黒灰	深黄塗か	25	35
1085	瀬美	壺	体部	SD19 埋土	12C	灰オリーブ	割線	25	35
1086	瀬美	甕	口縁部	SD60 埋土	12C	黒灰		25	35
1087	瀬美	甕	胴部	SD20 埋土	12C	灰白		25	36
1088	瀬美	壺	底部	SD20 埋土(65-53)	12C	灰		25	36
1089	瀬美	甕	体部	SD20 掘上	12C	暗オリーブ	外周に輪	25	36
1090	瀬美	甕	体部	SD20 埋土	12C	暗オリーブ	内面に輪	25	36
1091	瀬美	壺	口縁部	SD37(T2)掘上	12C	黒灰		25	36
1092	瀬美	器種不明	口縁部	SD37(T2)1層	12C	灰白	内面に輪	25	36
1093	瀬美	甕	口縁部	SD37(T3)	12C	黄灰		25	36
1094	瀬美	甕	胴部	SD37(T3)	12C	灰	須恵系陶器か	25	36
1095	瀬美	甕	体部	SD37(T2)1層	12C	灰青褐		25	36
1096	瀬美	小壺	口縁部	SD37(T2)1層	12C前	オリーブ系		25	36
1097	瀬美	壺	胴部	SD38 下層	12C	黄灰	割線	25	36
1098	瀬美	甕	体部	SD38(56-61)掘上	12C	オリーブ	外周に輪	25	36
1099	瀬美	甕	体部	SD39(T4)13層	12C	灰オリーブ		25	37
1100	瀬美	山茶碗	口縁部	SD39(T2)底部付近	12C	灰		26	37
1101	瀬美	不明	口縁部	SD39(T1)	12C	黒褐		26	37
1102	瀬美	壺	胴部	SD38(56-61)埋土	12C	暗黄褐		26	36
1103	瀬美	甕	胴部	SD39(T1)表探	12C	オリーブ灰	外周に輪	26	36
1104	瀬美	甕	体部	SK16 検出面	12C	暗オリーブ	押印	26	37
1105	瀬美	山茶碗	底部	PD48 埋土	12C	灰白	底部自傷ない	26	30
1106	瀬美	甕	体部	SD40(52-52)埋土	12C	灰	押印	26	37
1107	瀬美	壺	胴部	釜地府南平部上層	12C	灰白	割線	26	37
1108	瀬美	甕	口縁部	P275 埋土	12C	黒灰		26	38
1109	瀬美	甕	胴部	P273 検出面	12C	暗オリーブ	押印	26	38
1110	須恵系	宮内付	底部	釜地層 北平部	12C	灰白	12Cではない	26	30
1111	瀬美	甕	体部	釜地層 北平部	12C	黄灰	外周に輪	26	37
1112	瀬美	甕	底部	釜地層 北平部検出面	12C	黒灰		26	30
1113	瀬美	甕	底部	釜地層 南平部下層	12C	灰白		26	37
1114	瀬美	口縁部	T2 装束層	12C	明青灰		内外周に輪	26	37
1115	瀬美	柄・皿	口縁部	T2 直轄	12C	暗オリーブ系		26	37
1116	瀬美	甕	体部	須恵が遺(T2)N・V層	12C	黒灰	内周に輪	26	38
1117	瀬美	壺	胴部	T4 1-3層	12C	灰オリーブ	筋面文様	26	37
1118	瀬美	山茶碗	口縁部	59-62	12C	灰	底部自傷ない	27	37
1119	瀬美	甕	胴部	74-50	12C	黄灰	外周に輪	27	38
1120	瀬美	壺	胴部	遺跡外検	12C	オリーブ灰	割線	27	38
1121	瀬美	甕	体部	遺跡外	12C	黒灰	筋面が遺(T2)の須恵系陶器か(須恵系?)	27	38
1121	瀬美	甕	体部	95次調査掘出	12C	灰黄褐	常滑か	27	38
1122	瀬美	甕	体部	遺跡外	12C	灰黄褐	1121と同一個体	27	38
1123	瀬美	壺	体部	SSK20 埋土	12C	灰褐	常滑か(SS次調査 No.1152と同一)	27	38
1124	瀬美	壺	底部	69-55	12C	黒灰		27	30-31
1125	瀬美	片口鉢	底部	67-54・68-54	12C	黒灰		27	30
1126	須恵系	甕	体部	SE1 埋土上層	12C	黒灰	古代の須恵系か	27	39
1127	須恵系	長頸瓶	口縁部	SK28 9層	12C	青灰		27	39
1128	須恵系	甕	体部	SK28 埋土	12C	灰オリーブ		27	39
1129	須恵系	甕	底部	SK28 埋土	12C	青灰		27	39
1130	須恵系	甕	口縁部	SK28 埋土	12C	暗青灰		27	39
1131	須恵系	甕	口縁部	SK33 埋土	12C	黒灰		28	39

国産陶器観察表(2)

番号	種類	器種	部位	出七位置	年代など	色調	その他	図版	写真 図版
1132	須恵器系	甕	体部	SK33 8層	12C	青黒	古代の須恵器か		28 39
1133	須恵器系	甕	体部	SK53 8-13層	12C	灰			28 39
1134	須恵器系	壺	体部	SK53 1-2層	12C	褐色			28 39
1135	須恵器系	甕	体部	SK53 1-2層	12C	灰	胎土に小石含む		28 39
1136	須恵器系	甕	口縁部	SD20 埴土	12C	暗青灰			28 39
1137	須恵器系	甕	体部	SD20 埴土	12C	黒褐	胎土に砂多量		28 39
1138	須恵器系	甕	体部	SD20 埴土	12C	灰			28 39
1139	須恵器系	甕	体部	SI20 埴土兼土層	12C	灰			28 39
1140	須恵器系	甕	体部	SD38(59-66)3層	12C	暗青灰	古代の須恵器か		28 39
1141	須恵器系	壺	口縁部	SD39(T4)2・3層	12C	灰	胎土に黒色小礫含む		28 39
1142	須恵器系	甕	口縁部	SD39(T1)	12C	暗灰			28 39
1143	須恵器系	甕	体部	SD39(T4)15層	12C	青灰			28 39
1144	須恵器系	甕	体部	SKD39(T1)	12C	灰			28 39
1145	須恵器系	甕	体部	SX1 2層	12C	オリーブ黒			28 40
1146	須恵器系	甕	底部	SX1 2層	12C	灰白	底面転糸切		28 40
1147	須恵器系	甕	体部	豊地層 北平部	12C	暗灰			28 40
1148	須恵器系	壺	体部	P396 埴土	12C	灰			28 40
1149	須恵器系	鉢	口縁部	摂乱(T4)		灰			29 40
1150	須恵器系	甕	底部	T4	12C	灰			29 40
1151	須恵器系	甕	体部	60-53	12C	黒褐			29 40
1152	須恵器系	甕	口縁部	65-53	12C	青灰			29 40
1153	須恵器系	鉢	口縁部	濃横外	12C	暗灰			29 40
1154	須恵器系	甕	底部	59-57	12C	灰白			29 31
1155	須恵器系	壺	体部	68-53	12C	灰			29 40
1156	須恵器系	不明	体部	SK28 埴土	12C	灰白	内面に軸の流れ		29 40
1157	須恵器系	不明	体部	SD38 4層	12C	灰白	須恵器系か		29 40
1158	須恵器系	不明	肩部	SD20 埴土		灰オリーブ	深美系か		29 40
1159	須恵器系	不明	胴部	S8-57	12C	明緑灰			29 40
1160	須恵器系	皿	口縁部	T4	12C	灰白	深美系か		29 40
1161	常滑	甕	体部	SK20 埴土	12C	暗オリーブ	外面の検酒赤		- 31
1162	常滑	甕	体部	SK29 2層	12C	灰	産地は位ない		- 31
1163	常滑	甕	胴部	SK29 2層	12C	暗オリーブ			- 31
1164	常滑	広口壺	肩部	SK33 6層	12C	暗オリーブ	押印、外面に釉		- 31
1165	常滑	甕	体部	SK33 3層	12C	灰赤			- 31
1166	常滑	甕	体部	SK33 埴土上部	12C	灰白	蓋突か		- 31
1167	常滑	広口壺	肩部	SK34 2層	12C	灰オリーブ	甕か、外面に釉		- 31
1168	常滑	甕	体部	SK53 8-13層	12C	灰青褐			- 32
1169	常滑	甕	肩部	SD39(T4)埴土	12C	灰オリーブ	外面に釉		- 33
1170	常滑	甕	肩部	表土	12C	灰オリーブ	蓋突か		- 34
1171	瀬美	甕	体部	SK29 2層	12C	黒灰	押印		- 35
1172	瀬美	甕	体部	SK53 8-13層	12C	灰	押印		- 35
1173	瀬美	甕	体部	SK60 埴土	12C	黒褐			- 35
1174	瀬美	甕	体部	SD20 埴土(60-56)	12C	灰			- 36
1175	瀬美	甕	体部	SD37(T3)	12C	灰白	押印		- 36
1176	瀬美	甕	体部	SD38 埴土	12C	灰	押印		- 36
1177	瀬美	甕	体部	SD39(T2)11-23層	12C	暗青灰	内面に釉		- 36
1178	瀬美	甕	体部	SX3 埴土	12C	オリーブ灰	外面に釉		- 37
1179	瀬美	甕	体部	SX9 埴土	12C	灰白	押印		- 37
1180	瀬美	甕	肩部	T2 Ⅱ層	12C	灰白	押印		- 37
1181	瀬美	甕	肩部	T2 Ⅱ層	12C	灰	外面に釉		- 37
1182	瀬美	甕	体部	T4 検出時	12C	灰オリーブ	外面に釉		- 37
1183	瀬美	甕	体部	57-50	12C	灰青	内面に釉		- 37
1184	瀬美	甕	肩部	67-54 68-54	12C	オリーブ青	外面に釉		- 37
1185	瀬美	甕	肩部	74-50	12C	灰	押印		- 38
1186	瀬美	甕	体部	74-52	12C	褐色			- 38
1187	瀬美	甕	体部	P198 埴土	12C	灰オリーブ	押印		- 38

国産陶器観察表(3)

台号	種類	器種	部位	出土位置	年代 分類	年代の年代段	その他	図版	写真 掲載
2001	白磁	甕	胴部	SL1 埋上	Ⅱ系	12C			30 41
2002	白磁	甕	胴部	SK51 埋上	Ⅱ系	11C後～12C前	内面無塗		30 41
2003	白磁	空母	底部	SK19 後出時	Ⅱ系	12C	木目か		30 41
2004	白磁	甕	朱部	SD20 埋上	Ⅱ系	12C			30 41
2005	白磁	甕	胴部	SD20 埋上	Ⅱ系	11C後～12C前	建溝塗		30 42
2006	白磁	甕	体部下半	SD37(T7)埋上	Ⅱ系	11C後～12C前	化粧土、大粒		30 42
2007	白磁	甕	底部	SD37(T7)1層	Ⅱ系	12C	器種不明な		30 42
2008	白磁	甕	口縁部	SD38 3層	Ⅱ系	11C後～12C			30 42
2009	白磁	甕	胴部	SD38(56-61)埋上	Ⅱ系	11C後～12C前	化粧土		30 42
2010	白磁	甕	底部	SD38(58-67)3層	Ⅱ系	12C	外面無塗まで		30 42
2011	白磁	甕	胴部	SD39(T1)1層	Ⅱ系	11C後～12C前	外面無塗		30 43
2012	白磁	甕	胴部	SD39(T1)1層	Ⅱ系	11C後～12C前	小豆の粒		30 42
2013	白磁	甕	胴部	SD39 埋上	Ⅱ系	12C			30 43
2014	白磁	甕	口縁部	SD39(T1)1層	Ⅱ系	12C中～13C			30 43
2015	白磁	甕	体部	SK2	Ⅱ系	11C後～12C前			30 43
2016	白磁	甕	底部	T2 Ⅱ層	Ⅱ系	12C中～13C	二次焼		30 43
2017	白磁	甕	胴部	T3 Ⅲ・Ⅳ層	Ⅱ系	11C後～12C前	輪溝塗、沈線		30 43
2018	白磁	甕	胴部	T4 Ⅳ層	Ⅱ系	12C			30 43
2019	白磁	甕	胴部	T4 49	Ⅱ系	11C後～12C前			30 44
2020	白磁	甕	底部	58-58 0層	V類	12C			30 41
2021	白磁	甕	体部	74-49	Ⅱ系	11C後～12C前	縦に沈線		30 44
2022	白磁	水注	底部	末土	Ⅱ系	12C	内面無塗		31 41
2023	白磁	甕	口縁部	表様	Ⅱ系	12C			31 41
2024	白磁	甕	口縁部	表様	Ⅱ系	12C中～13C			31 44
2025	白磁	甕	口縁部	T2表様			近代か		31 41
2026	白磁	甕	口縁部	63 51	Ⅱ系	12C	化粧土なし1層では?		31 43
2027	白磁	甕	胴部	口縁の漆	Ⅱ系	12C	胴口より分けられない		31 44
2028	青磁	甕	口縁部	整丸切 南平上層	Ⅱ系	12C	内面に片切り筋		31 41
2029	青磁	甕	口縁部	SI33(T4)2層	Ⅱ系	12C	内面に片切り筋		31 44
2030	青白磁	甕	胴部	T3 Ⅲ・Ⅳ層	Ⅱ系	12C	内面に沈線		31 41
2031	陶器	甕	体部	SK31 1層	古州窯	12C	内面に黒色の線		31 44
2032	陶器	甕	体部	SD20 埋上		12C	外面無塗		31 44
2033	陶器	甕	体部	SD20 埋上	A群?	12C	外面無塗		31 44
2034	陶器	甕	体部	SD38(58-66)3層	C群	12C	外面無塗		31 45
2035	陶器	甕	体部	SD38(59-66)3層	Ⅱ系	12C	外面無塗		31 45
2036	不明	甕	体部下小	SI38(51-61)埋上			12世紀ではない		31 45
2037	陶器	甕	体部下小	SD39(T1)1層			12世紀ではない		31 45
2038	陶器	甕	胴部	SK9(59-56)埋上	古州窯	12C	内面に沈線		31 45
2039	陶器	甕	胴部	66-53	Ⅱ系	12C	褐色の線		32 41
2040	陶器	甕	胴部	T3 Ⅲ・Ⅳ層	古州窯?	12C	褐色で線		32 45
2041	陶器	甕	胴部	古州外	Ⅱ系	12C	外面に沈線の輪		32 45
2042	陶器	甕	胴部	65-32田楽	A群?	12C	外面無塗、内面無塗		32 45
2043	陶器	甕	胴部	65-32田楽	A群?	12C	外面無塗、内面無塗		32 45
2044	陶器	甕	胴部	表様	A群?	12C	文様		32 45
2045	白磁	甕	体部	SK28 埋上	Ⅱ系	12C	内面に沈線、化粧土無		41
2046	白磁	甕	胴部	SK33 7層	Ⅱ系	12C	耳取り付く		41
2047	白磁	水注	体部	SD20(66-53)埋上	Ⅱ系	12C	内面無塗		42
2048	白磁	甕	体部	SD20 埋上	Ⅱ系	11C後～12C前	内面無塗		42
2049	白磁	甕	口縁部	SD20 埋上	Ⅱ系	11C後～12C前	化粧土有		42
2050	陶器	甕	体部	SD20 埋上	A群?	12C			42
2051	白磁	甕	口縁部	SD37(T3)埋上	Ⅱ系	12C			42
2052	白磁	甕	体部	SD37(T3)1層	Ⅱ系	12C			42
2053	白磁	甕	朱部下小	SD37(T3)埋上	Ⅱ系	12C			42
2054	白磁	甕	体部	SD38 埋上	Ⅱ系	12C			42
2055	白磁	甕	体部	SD38 埋上F層	Ⅱ系	11C後～12C			42
2056	白磁	甕	体部	SD39(T2)埋上	Ⅱ系	12C	二次焼		43
2057	白磁	甕	体部	SD39(T2)埋上	Ⅱ系	12C	化粧土無		43
2058	白磁	甕	体部	SD39(T4)2・3層	Ⅱ系	12C			43
2059	白磁	甕	胴部	SD39(T4)2層	Ⅱ系	12C	胎土灰白で質質、化粧土無		43
2060	白磁	甕	胴部	SD39(T4)埋上	Ⅱ系	12C			43
2061	白磁	甕	体部	SD10(66-55)埋上	Ⅱ系	11C後～12C前	内面無塗		43
2062	白磁	甕	不明	T2 埋上	Ⅱ系	12C	胎土灰白で質質、黒底		43
2063	白磁	甕	口縁部	T2 埋上	Ⅱ系	12C			43
2064	白磁	甕	体部	T2 Ⅲ・Ⅳ層	Ⅱ系	12C			43
2065	白磁	甕	体部	T2 Ⅱ層	Ⅱ系	11C後～12C前	内面無塗、輪の酸化、化粧土無		43
2066	白磁	甕	体部	T3 Ⅲ・Ⅳ層	Ⅱ系	12C	胎土灰白で質質、化粧土無		43

中国産陶磁器観察表(1)

番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代	その他	図版	写真 図版
2067	白磁	壺	体部	74-49	Ⅱ系	12C	内面無釉	—	43
2068	白磁	壺	体部	T4 IV層	Ⅱ系	12C	—	—	43
2069	白磁	瓶	体部下半	50-53	Ⅴa-c	11C後-12C末	—	—	43
2070	白磁	不明	体部	73-50	Ⅱ系	11C後-12C前	内面無釉	—	44
2071	白磁	不明	体部	66-53	—	—	内面無釉	—	44
2072	白磁	壺	体部	66-54	Ⅱ系	12C	—	—	44
2073	白磁	壺	体部	64-53	—	12C	胎土淡灰色で微細な黒点	—	44
2074	白磁	壺	体部	66-53	Ⅱ系	11C後-12C前	内面無釉	—	44
2075	白磁	碗	体部	69-55	—	12C	胎土灰口で気泡あり軽い、化粧土無	—	44
2076	白磁	壺	体部	66-53	Ⅱ系	11C後-12C前	内面無釉	—	44
2077	白磁	甕か	体部	表探	Ⅱ系か	11C後-12C	内面無釉	—	44
2078	白磁	壺	体部	表探	Ⅱ系	12C	—	—	44
2079	白磁	壺	体部	P86	Ⅱ系	12C	—	—	44
2080	白磁	壺	体部	遺構外	Ⅱ系	11C後-12C前	内面無釉	—	44

中国産陶磁器観察表(2)

番号	器種	出土位置	色調	その他	高さ (R)	図版	写真 図版
3001	軒丸瓦	SD38(T1)検出面	灰質橙	三巴陽刺透珠文	8	33	46
3002	軒丸瓦	SD39(T1)検出面	灰質	陽左三巴陽透珠文	45	39	46
3003	丸瓦	SD39(T1)検出面	灰白	軟質な胎土、摩滅して	80	33	46
3004	丸瓦	SD39(T1)検出面	淡黄	軟質な胎土	105	33	46
3005	丸瓦	SD39(T2)埋土	灰白	硬質な胎土で砂含まない	75	33	46
3006	丸瓦	墓地基層 南半部	橙	軟質な胎土、摩滅している	45	33	46
3007	丸瓦	63-60	に白い粒	硬質な胎土で砂多	120	33	46
3008	平瓦	SD20 礎土	灰白	硬質な胎土	550	33	46
3009	平瓦	SD38(T1)検出面	灰白	離れ砂、硬質な胎土	145	34	46
3010	軒平瓦	T1 検出面	灰白	陽刺筋文	13	34	46
3011	平瓦	SD38(T1)検出面	橙	硬質な胎土	55	34	46
3012	平瓦	SD39(T1)検出面	淡黄	離れ砂が見られない、軟質な胎土	250	34	46
3013	平瓦	61-60	灰オリーブ	胎土に骨針、硬質な胎土	220	34	46
3014	軒平瓦	遺構外	灰	離れ砂が見られない、硬質な胎土	320	34	46

瓦観察表(1)

番号	器種	出土位置	法 尺 (cm)			備 考	図版	写真 図版
			最大長	最大幅	厚さ			
4001	柱	P447 礎土	37.8	7.5	7.0	樹皮残存	35	47
4002	不明	SE1 礎土	15.4	2.8	2.5	残存状態不良 写真は左側面を掲載	35	47
4003	不明	SE1 16層	7.1	6.9	1.6	—	35	47
4004	不明	SE1 礎土	7.2	7.0	3.0	—	35	47
4005	曲物銅板	SK26 8層	11.0	1.7	0.5	—	35	47
4006	不明	SK26 8層	14.6	2.8	0.4	形代の可能性あり	35	47
4007	ちゅう木	SK28 10層	12.2	0.8	0.5	写真図版は裏側掲載	35	47
4008	ちゅう木	SK28 10層	16.7	0.6	0.5	写真図版は裏側掲載	35	47
4009	ちゅう木	SK28 9層	19.3	1.5	0.3	—	35	47
4010	ちゅう木	SK28 10層	26.4	1.2	0.5	—	35	47
4011	不明	SK53 13層下部	23.1	1.8	0.2	写真図版は裏側掲載	35	47
4012	ちゅう木	SK53 13層	20.7	0.8	0.6	写真図版は裏側掲載	35	47
4013	ちゅう木	SK53 13層	20.1	0.7	0.5	写真図版は裏側掲載	35	47
4014	ちゅう木	SK53 13層	20.6	0.8	0.3	—	35	47
4015	不明	SK53 13層	9.6	1.9	0.4	—	35	47
4016	棟伏製品	SK34 14層	13.7	2.3	2.0	樹皮残存	35	47
4017	棟伏製品	SK34 14層	19.2	2.4	2.1	—	35	47
4018	不明	SK67 礎土	16.1	1.9	0.2	写真図版は裏側掲載	35	47
4019	不明	SK67 8層	23.1	1.9	0.2	—	35	47
4020	ちゅう木	SK67 8層	16.6	1.2	0.6	—	35	47
4021	不明	SK67 12層	19.8	3.1	0.3	木釘跡2箇所あり 写真図版は裏側掲載	35	47
4022	板材	SK67 3層	69.0	24.8	2.7	残存状態不良	36	48
4023	不明	SK67 8層	34.1	2.5	0.5	黒漆付着 炭化部分あり ひし形状の跡みがある	36	47

木製品観察表(1)

番号	器 種	出土位置	法 差 (cm)			備 考	図版	写真 図版
			最大径	最大幅	厚 さ			
4024	不明	SK67 8層	28.6	1.5	0.5	写真図版は裏側掲載	36	47
4025	折敷片	SK38 3層	28.5	5.7	0.5	炭化部分あり	36	48
4026	不明	SK33 3層	27.2	2.2	0.5	炭化部分あり	36	48
4027	ちゅう木	SK33 6層	27.3	2.0	0.6		36	48
4028	楕状製品	SK33 7層	18.3	3.4	3.2	加工痕あり 3片接合 削皮残存	36	48
4029	不明	SK33 7層	18.6	3.7	0.4	写真図版は裏側掲載	36	48
4030	漆器類	SK33 7層	—	—	4.0(器高)	体部片 炭化部分あり 阿南黒漆塗り	36	48
4031	漆器類	SK33 6層	19.6	7.7	7.7	全体に炭化著しい 写真図版は裏側掲載	37	48
4032	楕状製品	SK33 8層	30.4	6.1	5.3	加工痕あり 炭化部分あり 削皮残存	37	48
4033	不明	SK33 8層	26.9	8.3	0.8		37	48
4034	不明	SK33 8層	27.6	3.2	0.5	炭化部分あり	37	48
4035	漆器類	SK33 8層	—	—	1.5(器高)	体部片 阿南黒漆塗り	37	48
4036	楕状製品	SK33 8層	25.7	3.7	3.5	加工痕あり	37	49
4037	ちゅう木	SK33 8層	26.1	1.0	0.6	写真図版は裏側掲載	37	49
4038	ちゅう木	SK33 8層	24.1	0.8	0.4	写真図版は裏側掲載	37	49
4039	ちゅう木	SK33 8層	22.5	0.9	0.6	写真図版は裏側掲載	37	49
4040	ちゅう木	SK33 8層	16.2	0.8	0.3		37	49
4041	箸	SK33 8層	20.0	0.5	0.5	先端に炭化部分あり 写真図版は裏側掲載	37	49
4042	不明	SK33 8層	18.0	2.8	0.6	炭化部分あり	37	49
4043	不明	SK33 8層	19.5	6.5	3.7	加工痕あり 炭化部分あり 写真図版は裏側掲載	37	49
4044	根	SD38 28層	21.4	14.0	2.3	先端に穿孔あり	38	49
4045	部材	SD38 28層	18.3	10.2	3.5	残存状態不良	38	49
4046	不明	SD38 34層	18.4	1.8	0.5		38	49
4047	刷の骨	SD38 薄土	14.0	1.3	0.5	写真図版は裏側掲載	38	49
4048	箸	SD38 穂上	22.3	1.0	0.6		38	49
4049	箸	SD38 穂上	23.5	0.7	0.4		38	49
4050	部材	SD39 T2 穂上	80.9	14.8	4.0		38	50
4051	下駄板	SD39 T2 8層	7.4	6.9	2.2	写真図版は裏側掲載	38	49
4052	箸	SD39 T2 9~11層	20.3	0.6	0.4	写真図版は裏側掲載	38	49
4053	不明	SD39 T2 13層	16.4	2.7	0.2		38	49
4054	各種形木製品	SD39 T2 13層	31.4	18.7	0.5		39	50
4055	下駄	SD39 T2 16層	19.9	12.1	2.9	歯面下駄 残存状態不良	39	50
4056	不明	SD39 T2 13~22層	16.3	7.5	1.8	残存状態不良	39	50
4057	不明	SD39 T2 22層	5.8	1.5	1.0	削皮残存	39	50
4058	楕状製品	SD39 T2 22層	14.1	4.0	3.4	加工痕あり	39	50
4059	不明	SD39 T2 22層	7.2	8.1	1.5	穿孔あり	39	50
4060	不明	SD39 T2 22層	11.1	7.9	0.4	端部に穿孔あり	39	51
4061	不明	SD39 T2 22層	8.6	2.3	0.5	穿孔あり	39	51
4062	不明	SD39 T2 22層	20.5	5.5	0.3	写真図版は裏側掲載	39	51
4063	不明	SD39 T2 25~31層	2.1	3.0	1.0		39	51
4064	楕状製品	SD39 T2 27~31層	24.7	2.5	2.4	加工痕あり	39	51
4065	不明	SD39 T2 27~31層	22.8	0.9	0.4		39	51
4066	箸	SD39 T2 27~31層	22.7	0.8	0.5		39	51
4067	箸	SD39 T2 27~31層	22.1	0.8	0.6		39	51
4068	箸	SD39 T2 27~31層	12.0	0.6	0.4		39	51
4069	動物骨板	SD39 T2 27~38層	21.4	3.8	0.5	穿孔2ヶ所あり	40	51
4070	箸	SD39 T2 27~38層	26.0	0.6	0.5		40	51
4071	箸	SD39 T2 27~38層	24.2	0.5	0.5		40	51
4072	箸	SD39 T2 27~38層	12.2	0.6	0.5		40	51
4073	箸	SD39 T2 27~38層	12.6	0.7	0.6		40	51
4074	箸	SD39 T2 27~38層	15.1	0.7	0.3		40	51
4075	不明	SD39 T2 27~38層	16.1	0.8	0.8		40	51
4076	不明	SD39 T2 27~38層	17.1	1.9	1.0		40	51
4077	不明	SD39 T2 31~38層	15.1	1.2	0.8		40	51
4078	不明	SD39 T2 31~38層	21.6	4.2	0.6	写真図版は裏側掲載	40	51
4079	不明	SD39 T2 31~38層	18.3	1.1	0.7		40	51
4080	不明	SD39 T2 31~38層	20.1	1.8	1.2		40	51
4081	不明	SD39 T2 31~38層	7.2	4.6	0.7		40	51
4082	不明	SD39 T2 31~38層	15.4	3.8	0.6		40	51
4083	漆器類	SD39 T2 34層	H.6(器高)	—	1.1(器厚)	阿南黒漆塗り 後は剥離著しい	40	52
4084	不明	SD39 T2 35層	15.9	14.9	5.5	残存状態不良	40	52
4085	漆器板片	SD39 T2 36~37層	8.7	2.2	0.2	剥離は不明	40	52
4086	不明	SD39 T2 37~38層	5.4	3.5	2.8		40	52
4087	楕状製品	SD39 T2 37~38層	16.1	2.8	2.6	加工痕あり	40	52
4088	不明	SD39 T2 穂上	4.6	6.5	4.3	写真図版は裏側掲載	40	52
4089	不明	SD39 T2 薄土	16.5	5.8	2.8		40	52

木製品観察表(2)

番号	器種	出上位置	法 量 (cm)			備 考	取版
			最大長	最大幅	厚 さ		
4090	蓋	SD39 T2 埋土	20.6	0.7	0.7		40 52
4091	蓋	SD39 T2 埋土	21.0	0.6	0.4		40 52
4092	下駄	SD39 T2 埋土	18.5	6.2	3.0	連側下駄	41 52
4093	数珠木製品	SD39 T2 埋土	16.0	3.1	1.0		41 52
4094	不明	SD39 T2 埋土	8.8	8.4	6.5		41 52
4095	不明	SD39 T4 14・15層	13.4	4.5	0.7	木釘跡4ヶ所あり	41 52
4096	不明	SD39 T4 14・15層	20.1	9.0	0.6	穿孔あり 炭化部分あり 写真図版は裏面掲載	41 53
4097	柄	SD39 T4 14・15層	—	7.6(直径)	1.5(厚み)	ロクロ爪跡あり 残存状態不良	41 53
4098	下駄曲	SD39 T4 13層	9.4	14.9	2.0	割を避けている	41 53
4099	不明	SD39 T4 14・15層	7.1	6.1	2.0	写真図版は裏面掲載	41 53
4100	不明	SD39 T4 14・15層	8.5	3.5	3.5	加工痕あり 写真図版は裏面掲載	41 53
4101	不明	SD39 T4 14・15層	14.9	0.7	0.7	黒塗付着 写真図版は裏面掲載	41 53
4102	不明	SD39 T4 14・15層	21.5	2.1	1.0	写真図版は裏面掲載	41 53
4103	不明	SD39 T4 14・15層	22.5	5.5	0.7	木釘跡4ヶ所あり	41 53
4104	不明	SD39 T4 14・15層	22.9	2.5	1.5		41 53
4105	不明	SD39 T4 14・15層	29.2	6.5	1.0	糊皮の紐じ具あり	42 53
4106	不明	SD39 T4 14・15層	35.0	11.5	1.1	木釘跡4ヶ所あり 4107と重なり合って出土か	42 53
4107	不明	SD39 T4 14・15層	35.2	9.6	1.2	糊皮の紐じ具あり 4106と重なり合って出土か	42 54
4108	不明	SD39 T4 14・15層	16.0	6.7	3.0		42 53
4109	筒敷	SD39 T4 14・15層	39.0	26.0	2.4	炭化部分あり 台がついて高坏状になるか 水釘跡が周縁部及び取柄中央に精円状、十字に多数ある 表裏に保線多数あり	43 54
4110	不明	SD39 T4 16層	55.1	4.2	3.9	糊皮残存 加工痕あり 写真図版は裏面掲載	42 53
4111	不明	SD39 T4 16層	17.0	14.7	1.0	残存状態不良	42 54
4112	不明	SD39 T4 22層	7.8	8.0	2.0		42 54
4113	不明	SD39 T4 埋土	24.8	1.7	1.5	写真図版は裏面掲載	43 54
4114	不明	SD39 T4 埋土	8.4	6.5	5.5	写真図版は裏面掲載	43 54
4115	不明	SD39 T4 埋土	5.9	5.2	4.0		43 54
4116	不明	SD39 T4 埋土	5.6	5.2	3.5		43 54
4117	不明	SD40 12層	12.0	2.5	1.0	残存状態不良	43 54
4118	ツノヘラ	57-61 0層	11.4	1.5	0.7	穿孔あり 穿孔部が持ち手か?	43 54
4119	不明	SE1 16層	18.5	3.5	0.5		— 55
4120	不明	SK26 5層	19.0	4.0	0.2	材質は竹	— 55
4121	不明	SK26 8層	17.7	4.0	2.0		— 55
4122	ちゅう木	SK27 4・3層	12.3	1.0	0.3		— 55
4123	不明	SK27 5層	13.8	0.9	0.5	炭化部分あり	— 55
4124	不明	SK27 13層	16.0	1.5	1.0	先端に炭化部分あり	— 55
4125	不明	SK28 5層	10.5	1.1	0.5	炭化部分あり	— 55
4126	不明	SK28 6層	9.0	1.8	1.5	炭化部分あり	— 55
4127	不明	SK28 6層	16.0	1.5	1.2	両端に炭化部	— 55
4128	漆材	SK28 10層	10.0	2.0	1.0		— 55
4129	不明	SK28 10層	16.0	3.0	0.5	炭化部分3ヶ所あり	— 55
4130	不明	SK28 10層	17.5	1.5	0.6		— 55
4131	不明	SK28 10層	17.4	1.2	0.6		— 55
4132	不明	SK28 15層	18.0	2.0	0.4		— 55
4133	不明	SK28 15層	15.5	3.5	0.4		— 55
4134	不明	SK28 15層	10.5	2.0	2.0		— 55
4135	漆状製品	SK28 15層	9.0	3.0	2.0	加工痕あり 炭化部あり	— 55
4136	不明	SK30 1層	8.0	9.2	1.7		— 55
4137	不明	SK31 埋土	9.8	2.7	1.0	黒塗付着	— 55
4138	ちゅう木	SK53 13層	19.0	1.3	0.3	残存状態不良	— 55
4139	不明	SK67 8・9層	17.0	1.3	1.0	炭化部分あり	— 55
4140	ちゅう木	SK67 8層	24.5	1.9	0.5		— 55
4141	不明	SK67 8層	24.0	1.5	1.3		— 55
4142	不明	SK67 8層	37.5	1.2	0.5		— 55
4143	不明	SK33 6層	26.0	3.5	3.0		— 56
4144	不明	SK33 7層	36.0	13.0	2.0		— 56
4145	漆材	SK33 8層	25.0	16.0	5.0		— 56
4146	不明	SK33 7層	31.0	4.0	2.0		— 56
4147	不明	SK33 8層	7.0	2.4	0.5	黒塗付着	— 56
4148	不明	SK33 8層	16.0	6.0	0.5		— 56
4149	不明	SK33 8層	18.0	4.0	0.5	炭化部分あり	— 56
4150	漆材	SK33 8層	16.5	8.0	7.5		— 56
4151	不明	SD20 67-53 埋土	4.0	3.5	3.0		— 56
4152	不明	SD38 28層	5.5	3.5	0.5		— 56
4153	不明	SD38 35層	16.5	3.0	1.0		— 56

木製品観察表(3)

番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			備 考	図版	写真 図版
			最大長	最大幅	厚 さ			
4154	不明	SD38 28・29層	10.0	3.0	1.0	炭化部あり	—	56
4155	不明	SI38 36層	16.5	3.5	1.5		—	56
4156	不明	SD38 榎土	17.3	5.0	0.6	穿孔二ヶ所	—	56
4157	不明	SD39 T2 榎土	84.0	3.0	0.5		—	57
4158	不明	SD39 T2 榎土	33.0	3.0	3.0		—	57
4159	板片	SD39 T2 榎土	40.0	8.0	1.0		—	57
4160	不明	SI39 T2 榎土	20.0	4.0	1.0		—	57
4161	不明	SD39 T2 榎土	26.0	10.0	8.0		—	57
4162	不明	SD39 T2 榎土	20.2	0.8	0.6		—	57
4163	不明	SD39 T2 榎土	27.0	1.2	0.8		—	57
4164	不明	SD39 T2	13.0	0.6	0.2	6058と同時に取り上げ	—	57
4165	不明	SD39 T2 榎土	22.5	3.0	2.5		—	57
4166	不明	SD39 T2 榎土	9.0	5.3	1.0		—	57
4167	不明	SI39 T2 炭層付連	18.5	2.5	0.2	2片接合	—	57
4168	不明	SD39 T2 榎土	23.0	7.5	4.0		—	57
4169	不明	SD39 T2 榎土	17.0	7.0	6.0	燻皮残存	—	57
4170	板片	SD39 T2 榎土	12.0	10.5	0.3		—	57
4171	不明	SD39 T2 9層	8.3	5.7	3.0		—	57
4173	漆器軸	SD39 T2 13層	—	—	4.8(長さ)	両面用漆塗り 漆は黒色著しい	—	57
4174	漆器軸	SD39 T2 13層	—	—	2.6(高さ)	両面用漆塗り 漆は黒色著しい	—	57
4175	不明	SI39 T2 8層	19.5	7.0	4.3		—	58
4176	不明	SI39 T2 27-38層	16.0	1.8	1.6		—	58
4177	不明	SD39 T2 27-38層	14.1	1.5	0.4		—	58
4178	不明	SD39 T2 27-38層	10.8	2.4	0.3		—	58
4179	不明	SD39 T2 27-38層	8.5	2.0	0.3		—	58
4180	不明	SD39 T2 27-38層	12.6	2.6	0.9		—	58
4181	不明	SD39 T2 23層	16.7	3.0	2.7		—	58
4182	不明	SI39 T2 27-38層	7.8	0.6	0.2		—	58
4183	不明	SD39 T2 27-38層	9.7	1.3	0.6		—	58
4184	板片	SI39 T2 27-38層	7.6	2.0	0.4		—	58
4185	小片	SD39 T2 27-38層	8.0	0.4	0.4		—	58
4186	不明	SD39 T2 27-38層	6.4	1.0	0.2		—	58
4187	不明	SD39 T2 27-38層	6.4	1.1	0.2		—	58
4188	不明	SD39 T2 27-38層	19.0	3.0	1.5		—	58
4189	不明	SD39 T2 27-38層	22.3	2.3	0.6		—	58
4190	柄杓軸	SD39 T2 27-38層	11.0	1.0	0.9	加工痕あり	—	58
4191	不明	SI39 T2 27-38層	12.0	0.6	0.6		—	58
4192	不明	SD39 T2 27-38層	8.0	3.8	1.8		—	58
4193	不明	SD39 T2 27-38層	9.0	4.0	1.5	炭化部分あり	—	58
4194	不明	SD39 T2 27-38層	12.5	6.0	3.5		—	58
4195	不明	SD39 T2 27-38層	4.3	3.8	1.6		—	58
4196	板片	SI39 T2 37層	20.5	8.3	1.0		—	58
4197	不明	SD39 T2 37層	15.5	1.2	0.2		—	58
4198	ひょうたん	SI39 T2 23層	8.0	4.5	0.2	穿孔あり	—	58
4199	不明	SD39 T2 37層	4.7	4.2	2.3		—	58
4200	不明	SD39 T2 37層	13.2	2.5	0.3		—	58
4201	不明	SD39 T2 37層	14.0	4.0	1.0		—	58
4202	不明	SD39 T2 37層	17.5	1.0	0.4		—	59
4203	不明	SD39 T2 37層	17.0	0.9	0.5		—	59
4204	不明	SD39 T2 31層	28.5	3.0	2.5	部材?	—	59
4205	不明	SI39 T2 31層	24.0	7.0	3.5	2片接合	—	59
4206	漆器軸	SD39 T2 34層	—	—	4.8(長さ)	両面用漆塗り 漆は黒色著しい	—	59
4207	不明	SI39 T2 31層	29.0	1.1	1.0		—	59
4208	不明	SD39 T2 27か31層	17.0	4.0	3.0	炭化部分あり	—	59
4209	不明	SD39 T4 榎土	13.0	5.5	0.5		—	59
4210	不明	SD39 T4 榎土	12.0	5.5	1.0		—	59
4211	部材	SD39 T4 榎土	9.0	5.0	2.5		—	59
4212	不明	SD39 T4 榎土	6.5	5.0	2.0		—	59
4213	部材	SD39 T4 13層	13.5	5.5	2.0		—	59
4214	不明	SI39 T4 9層	13.5	3.5	3.5		—	59
4215	不明	SD39 T4 14・15層	8.0	6.5	0.7		—	59
4216	不明	SD39 T4 9層	5.5	5.2	2.8	穿孔あり	—	59
4217	不明	SD39 T4 14・15層	20.0	11.0	6.0	炭化部分あり	—	59
4218	不明	SD39 T4 12層	81.5	3.5	3.0		—	59
4219	不明	SD39 T4 14・15層	25.5	5.0	0.5	漆物底残?	—	60
4220	不明	SD39 T4 14・15層	12.5	1.6	1.3		—	60

木製品観察表(4)

番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			備 考	写真 掲載
			最大長	最大幅	厚 さ		
4221	不明	SD39 T4 14・15層	14.5	2.7	1.0	炭化部分あり 残存状況不良	- 60
4222	不明	SD39 T4 14・15層	11.0	7.0	4.0	全体に炭化	- 60
4223	部材	SD39 T4 14・15層	32.0	5.5	1.8		- 60
4224	不明	SD39 T4 16層	54.0	3.2	2.8	糊皮残存 穿孔あり	- 60
4225	不明	SD39 T4 14・15層	7.0	4.5	1.8	炭化部分あり	- 60
4226	不明	SD39 T4 14・15層	9.7	3.0	1.3		- 60
4227	不明	SD39 T4 19層	19.0	6.0	3.5	炭化部分あり	- 60
4228	不明	SD39 T3	40.0	1.5	1.5		- 60
4229	不明	SD39 1層	7.0	6.0	3.0	全体に炭化	- 60
4230	不明	SD40北端埋土	16.5	3.0	2.0		- 60
4231	不明	SD40南端 12層	8.5	4.5	2.0		- 60
4232	不明	63-52 SD40トレンチ内	66.0	10.0	7.0		- 60
4233	自然木	竈間が瀝 T2	102.0	38.0	25.0		- 61
4234	自然木	竈間が瀝 T2	137.0	49.0	28.0		- 61
4235	自然木	竈間が瀝 T2	90.0	31.0	18.0		- 61
4236	自然木	竈間が瀝 T2	82.0	13.0	12.0		- 61
4237	自然木	竈間が瀝 T2	107.0	26.0	20.0		- 61
4238	自然木	竈間が瀝 T2	45.0	12.0	8.0		- 61
4239	自然木	竈間が瀝 T2	37.0	15.0	17.0		- 61
4240	自然木	竈間が瀝 T2	71.0	31.0	14.0		- 61
4241	自然木	竈間が瀝 T2	51.0	15.0	10.0		- 61
4242	自然木	竈間が瀝 T2	27.0	17.0	14.0		- 61
4243	自然木	竈間が瀝 T2	23.0	12.0	5.0		- 61
4244	自然木	竈間が瀝 T2	11.0	8.0	6.0		- 61
4245	自然木	竈間が瀝 T2	20.0	12.0	6.0		- 61
4246	自然木	竈間が瀝 T2	20.0	5.0	5.0		- 61
4247	自然木	竈間が瀝 T2	62.0	27.0	21.0		- 62
4248	自然木	竈間が瀝 T2	30.0	21.0	19.0		- 62
4249	自然木	竈間が瀝 T2	33.0	12.0	10.0		- 62
4250	自然木	竈間が瀝 T2	69.0	7.0	5.0		- 62
4251	自然木	竈間が瀝 T2	61.0	16.0	12.0		- 62
4252	自然木	竈間が瀝 T2	59.0	24.0	12.0		- 62
4253	自然木	竈間が瀝 T2	36.0	16.0	7.0		- 62
4254	自然木	竈間が瀝 T2	39.0	12.0	9.0		- 62
4255	自然木	竈間が瀝 T2	30.0	14.0	8.0		- 62
4256	自然木	竈間が瀝 T2	35.0	8.0	7.0		- 62
4257	自然木	竈間が瀝 T2	59.0	12.0	5.0		- 62
4258	自然木	竈間が瀝 T2	35.0	9.0	4.0		- 62
4259	自然木	竈間が瀝 T2	74.0	13.0	3.0		- 62
4260	自然木	竈間が瀝 T2	67.0	13.0	9.0		- 62
4261	自然木	竈間が瀝 T2	77.0	19.0	12.0		- 63
4262	自然木	竈間が瀝 T2	71.0	8.0	5.0		- 63
4263	自然木	竈間が瀝 T2	37.0	20.0	13.0		- 63
4264	自然木	竈間が瀝 T2	18.0	10.0	10.0		- 63
4265	自然木	竈間が瀝 T2	45.0	10.0	8.0		- 63
4266	自然木	竈間が瀝 T2	23.0	9.0	3.0		- 63
4267	自然木	竈間が瀝 T2	20.0	13.0	9.0		- 63
4268	自然木	竈間が瀝 T2	38.0	14.0	11.0		- 63
4269	自然木	竈間が瀝 T2	38.0	11.0	10.0		- 63
4270	自然木	竈間が瀝 T2	26.0	12.0	4.0		- 63
4271	自然木	竈間が瀝 T2	25.0	9.0	9.0		- 63
4272	自然木	竈間が瀝 T2	20.0	13.0	7.0		- 63
4273	自然木	竈間が瀝 T2	18.0	4.0	3.0		- 63

木製品観察表(5)

第IV章 まとめ

今回の調査区は堀内部地区の中でも西端部から北西部にかけて設定した。柳之御所を囲む堀跡に沿うように堀内部地区の西端部から北西部分を対象にしたことになり、一部は北上川縁まで達している。つまり今回検出された遺構群は堀内部地区の副地跡や中心建物群からは最も離れた場所に分布しているといえる。また柳之御所と無量光院との間にある竈間が淵にトレンチを複数設定し、堀跡の調査も実施した。

以下、56次調査で検出された12世紀の遺構・遺物で特筆されるものを列挙する。

1 遺構

堀跡 (56SD38・SD39)

柳之御所を取り囲む2条の堀跡について、今回は調査があまり及んでいなかった竈間が淵の中にトレンチを設け、その中を巡る堀跡の調査を実施した。現地表面から約35cm掘り下ると堀が確認できた。これまでの調査と同様に2条の堀は並んで検出され、柳之御所を囲む堀に因してはその全域で2条の堀が並行して延びている可能性が高くなった。つまり、ある地点では堀が1条に合流するとか、堀跡どうしに重複関係を持つといったことは考えにくくなった。よってこの2条の堀跡についてはほぼ同時期に構築され、機能していたと推測される。そして56SD20との関係などから12世紀後半にはその殆どが埋まっていることも判明した。堀のもつ防衛的な意味合いは12世紀後半には薄れるが、完全には埋まっておらず、依然として橋を使い続けていること、人為的に堀を埋め戻してもいないことなどから、奥州藤原氏滅亡段階まで柳之御所堀内部地区を区画する機能は有していたと解釈したい。

堀がつくられた時期は、出土した遺物から判断するのは難しい状況であった。前述したように12世紀後半(秀衡・泰衡期)には埋まりかけていることから、より時代が上るとみたほうがよい。恐らく12世紀前半、藤原清衡が平泉に移ってきた時にこの地に堀を巡らせた居館を築いたと考えるのが最も素直であろう。

これまでの発掘調査でこの堀に架かる橋跡については、その全容がほぼ明らかになったものが2カ所まで確認されている。何れも南側に位置しており、堀内部地区より西方の無量光院側や北方の柳之御所堀外部地区側へ通じる傾斜跡については判然としなない。また、2条の堀と堀との間と、外側の堀(56SD39)の外縁に沿って、12世紀当時に堀の構築と時を同じくして盛られた土を確認した。これに関しては土塁の基底部或いは竈間が淵という脆弱地盤に堀を掘削していることによる崩落を防ぐ地業と想定したが、部分的な調査であったため今後も内容を確認する調査は必要と考える。

内堀 (56SD40) と土橋 (56SX16)

これまでの発掘調査でも部分的に検出されていたが、52次調査で堀跡(内堀)であることが確認された遺構である。今回の調査で全体規模を把握した。堀内部地区の西端近くに位置しており、全長は65mを測る。特筆されることはこの堀の両端部が止まっていることである。埋土も底部及びその直上は自然堆積で無加工の木や種子が見られるが、多くは人為的に埋め戻されている。その中にもかわらけや陶器片はごく僅かしか入らない。そのため、この遺構が機能していた段階のかわらけや陶磁器といった時期判定できる資料が無いのである。12世紀に属する様々な遺構と重複関係にあるが、本遺構のほうが切られており遅くとも12世紀後半には埋め戻されていたようである。こうしたことから12世紀の中でも古い段階に位置付けられる可能性が高い遺構であるが、仮に12世紀前半(清衡期)に位置付けられるならば、柳之御所を囲む堀跡と同時存在であったことになりそれも不自然な感がある。そうすると12世紀中頃(基衡期)か11世紀代の可能性が考えられるが何れも考古学的根拠には乏しい。

この56SD40には土橋56SX16が設けられていた。内堀の中心よりは北側に偏った場所に位置しており、幅も2mに満たない小規模なつくりである。この土橋に対応するような道路状遺構の存在も想定されなければならない。遺構の時期と共に今後の検討課題として残っている。

堀の両端部が止まっていることについても現時点では明らかにできない。56SD20も同様に端部（標高が高いほう）が止まっており、両者は同じ理由に起因していると思われるのが妥当であろう。推測の域を出ないが、標高の高い北側部分（現況は水田と畑地で平坦な地形であるが）は以前、地元の方の話ではもう少し高まりを有していた地形であったと聞いたことがある。それを平坦に削平して水田とし、削った土で西側の柳之御所を囲む堀を埋めたというのである。12世紀当時、この微高地にぶつけるかたちで56SD40内堀とSD20津跡が止まっていると考えたい。そしてこの場所が平坦ではなかったため建物を建てるには適さず、トイレ状遺構しか分布していないと解釈したい。勿論、園池や中心建物群からは最も遠い場所でもある。また12世紀の整地層を除去した際に検出された多数の雨裂溝もこの微高地からの雨水による開析と考えられ、柳之御所を囲む堀跡もこうした地形に影響されて掘られたものと推測される。

トイレ状遺構

堀内部地区の北西部に30数基ものトイレ状遺構がまとまって分布しているのを確認した。前回の55次調査で検出された柳之御所でも最大規模の建物跡（55SB6）のすぐ西側に位置しており東西約60m、南北約25mの範囲に不規則に展開している。これまでにもトイレ状遺構は数多く検出されているが散在する傾向があり、今回のように密集して確認されたことはなかった。ここにはトイレ状遺構の他、12世紀の遺構は56SD40以外になく、柳之御所が機能している間は一貫して排泄物等を廃棄する場所であったことは確実である。先に触れたようにこの場所は堀内部地区の中でも園池や中心建物群からは最も離れた場所であること、かつては平坦な地形ではなかったため建物を構築するには適さない場所であったと推察されることなどが多数のトイレ状遺構が占地する理由として考えられる。

点在するものと密集して位置しているトイレ状遺構の分布の違いが如何なる要因によるものか改めて考えなければならぬ問題であるが、原則は今回密集して確認された場所を使い、散在するものは井戸跡の転用や各屋敷に付属するかたちで設けられた一時的なものであったとみたい。

猫間が淵

これまでに調査された結果と大きな違いは見られなかった。現況は主に水田で地表から約35cm掘り下げると柳之御所を囲む堀跡（56SD38・SD39）が確認できることから、12世紀から現代までの間に35cm程しか土の堆積は進んでおらず、今日と地形的に大きな変化はないようである。つまり、12世紀の猫間が淵は低地・低湿地的な地形であったといえ、常に水を湛えたような景観は少なくとも今回調査した地点付近では想定できない。仮に水が溜まるような状況であったならば柳之御所を囲む堀を掘削することも困難であったであろう。

T2に於いて猫間が淵を深掘りしているが、約3.3m掘り下げてでも基盤層には達しなかった。基本的に砂と泥とが交互に堆積するような様相を呈し、周囲からの流れ込みと沈殿を繰り返す様が見取れる。10世紀前半の十和田a降下火山灰を地表から-2.1mの地点で確認している。火山灰層より下位では土器・石器の出土はなく、自然木のみが見られる。

2 遺物

吉州窯系陶器

平泉遺跡群では初めての出土である。出土した56SK31はトイレ状遺構であり、埋土から1点だけ破片の

状態で出土している。つまり12世紀後半には何らかの理由で割れてしまい、その内の1片だけが排渣物などと共に廃棄されたことになることから遺物年代の下限は12世紀後半である。吉州窯陶器には様々な種類があるが本資料は白地鉄絵陶器になる。日本での出土事例を見ると草戸千軒町遺跡・平安京跡・博多遺跡群他があげられ時期は13-14世紀が中心となる。出土数も少なく吉州窯陶器の内容について明らかでない部分も多い中、12世紀後半を下らない本遺跡の資料は貴重な例といえる。

その他の中国産陶器

以前から指摘されてきたように梅之御所における中国産陶器の出土量は平泉遺跡群の中でも非常に多い。今回の調査では白磁壺類に次いで中国産陶器壺類の比率が高かった。これまでの調査で得られた資料を再度整理すれば立体的に復元、或いは個体数をより詳細に把握できるものがある可能性がある。一方、出土状況に国産陶器との差異は見出せない。遺構外出土遺物は12世紀当時から動いていることが予想されるが、改めて陶磁器類の遺跡内における分布状況を整理し、検出された建物跡等と関連づける作業も求められよう。

折 敷

今回の調査で出土した遺物の中で特筆すべきものの1つとして、56SD39のT4で出土した折敷があげられる。底板及び縁が残っており、大きさは縦39cm、横26cm、厚さ2.4cmを測る。縁については、四辺のうちの一辺は欠けているものの、三辺がほぼ完全な状態で残存する。縁については、一辺当り三ヶ所の木釘が打ってある。

底板の裏面には、十字及び楕円状に合計28ヶ所の釘穴が認められる。推定の域を出ないが、今回出土した折敷には木製の脚がついていた可能性が考えられる。

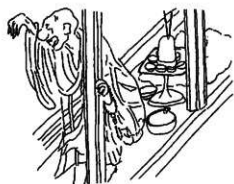
木製のものではないが、52次調査の際に52SE10より出土した大型の柱状高台について、羽柴直人氏が京都での事例などから、大型の柱状高台は『兵範記』に記されている「土高坪」であり、柱状高台の上に木製の折敷を乗せて使用したと述べている（羽柴2001）。

今回出土した折敷もおそらく木製の台がついていたものと考えられる。

また、底板の表面及び裏面には刃物状のものでつけられたと思われる傷跡が多数認められる。このことは、この折敷が、折敷として使用された後に、まな板など別の用途に転用されたと考えられる。

引用文献：

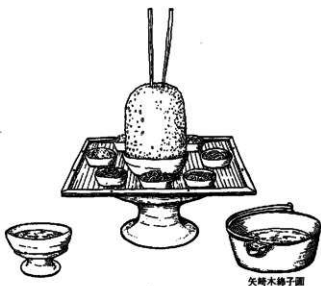
羽柴直人 2001 「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第13号



信貴山縁起の高杯



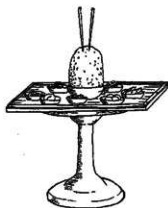
伴大納言縁起の高杯



矢崎木菓子皿

52SE10 かわらけの使用想定図

(羽柴2001より引用)



56次調査で出土した折敷の使用想定図

第V章 付 篇

I 柳之御所遺跡第56次調査出土材の樹種

高橋 利彦 (木工舎「ゆい」)

1. 試料

試料は12世紀代のもとのされる井戸・土坑・溝などから検出された木製品・加工材など105点と、藪間が淵トレンチから検出された自然木5点の計110点である(表I-1)。自然木の検出層準の上層には1和田a降下火山灰の堆積が確認されていることから、自然木は10世紀初頭以前のものでされている。

遺跡は北上川右岸の河岸段丘縁(標高26~27m)に立地している。

2. 方法

プレパラートの作製には筆者が遺物から採取した材片を用いた。材片は少なくとも足かけ2年分を含み、かつできるだけ少ない量となるように、調査担当者との協議しながら採取した。剃刀の刃を用い、試料の木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)3面の徒手切片を作製し、これをガムクロラルで封入したプレパラートを、生物顕微鏡で観察・同定した。併せて各分類群1点の顕微鏡写真図版を作成した(図版1~5)。作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は以下の13分類群(ここでは属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している)に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名とその配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」(佐竹ほか1989)にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」(岩手植物の会1970)を参照した。また、一般的性質などについては「木の事典 第2~8巻」(平井1979-1981)も参考にした。

・モミ属 (*Abies* sp.) マツ科 No. 4102

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなり、柔細胞内壁は粗く、末端壁にはじょうず状の肥厚が認められ、上下の縁辺細胞は不定形である。分節穿孔はスキ型(Taxodioid)で分節あたり1~4個。放射組織は単列、25細胞高を越えることもある。

モミ属は国内に5種あるが、県内にはモミ(*Abies firma*)が南部や沿岸部の低山地に、オオシラビン(アオモリトドマツ)(*A. mariesii*)が亜高山帯に分布する。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途がある。

・スギ(*Cryptomeria japonica*) スギ科 No. 4002, 4005, 4006, 4007, 4008, 4009, 4010, 4011, 4012, 4013, 4014, 4015, 4019, 4021, 4022, 4024, 4025, 4026, 4027, 4029, 4033, 4034, 4037, 4038, 4039, 4040, 4041, 4042, 4045, 4047, 4048, 4052, 4053, 4054, 4055, 4060, 4061, 4062, 4065, 4066, 4067, 4068, 4069, 4072, 4075, 4077, 4078, 4080, 4082, 4084, 4085, 4086, 4088, 4090, 4095, 4096, 4098, 4099, 4101, 4111, 4114, 4116, 4117, 4109a, 4109b, 4109c, 4109d, 4109e

早材部から晩材部への移行は急~やや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹

脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はスギ型で分野あたり2（1-4）個。放射組織は単列、15細胞高程度まで。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では、現在植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No. 4001, 4018, 4020, 4023, 4051

早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid) で分野あたり2（1-4）個。放射組織は単列、15細胞高程度まで。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは国内ではスギに次ぐ植林面積をもつ重要樹種であるが、県内には自生しない。サワラは県中南部に自生し、また植栽される常緑高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・アスナロ (*Thujaopsis dolabrata*) ヒノキ科 No. 4046, 4049, 4070, 4071, 4074, 4089, 4091, 4093, 4094, 4103, 4113

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型〜スギ型で分野あたり1-6個。放射組織は単列、1-15細胞高であるが5細胞高前後の低いものが多い。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）(*T. dolabrata* var. *hondai*) がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ハンノキ属 (*Alnus* sp.) カバノキ科 No. 4238, 4252, 4254

散孔材で、管孔は放射方向に2-4個が複合または単独で配列、横断面ではやや角張った楕円形。道管は階段穿孔をもち、段 (bar) 数は10-30、壁孔は密に対列状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性、単列、1-30細胞高のもの集合組織がある。柔組織は短接線状〜散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハンノキ属は国内に約10種が自生し、属としては全国に分布する落葉高木である。県内にはヒメヤシャブシ (*Alnus pendula*) やハンノキ (*A. japonica*) など5種ほどが自生する。材はやや軽軟〜やや重硬で、加工は容易、薪炭材や各種器具材などとして用いられる。

・アサダ (*Ostrya japonica*) カバノキ科 No. 4016

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-4個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、内壁にらせん肥厚が認められ、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-30細胞高で、しばしば上下に連結する。時に結晶細胞が認められる。柔組織は短接線状。年輪界はやや不明瞭。

アサダは北海道（中南部）から九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科 No. 4235

環孔材で孔部は1-2列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では楕円形、小道管は横断面では角張った円形-楕円形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

クヌギ節はコナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(ドングリ)が開花から2年目に熟すグループで、クヌギ(*Quercus acutissima*)とアベマキ(*Q. variabilis*)の2種がある。県内にはアベマキは自生せず、クヌギが中南部に分布する。クヌギは樹高15mになる落葉高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・枕材、櫓木などの用途がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No. 4044. 4050

環孔材で孔部は1-3列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火災状に配列する。大道管は横断面では円形-楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属の中で果実が開花の年に熟すグループで、カシワ(*Quercus dentata*)・ミズナラ(*Q. crispula*)・コナラ(*Q. serrata*)・ナラガシワ(*Q. aliena*)といくつかの変・品種がある。このうちコナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・櫓材などの用途があり、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. 4004. 4032. 4059. 4105. 4106. 4107. 4108. 4110. 4112

環孔材で孔部は1-多列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火災状に配列する。大道管は単独、横断面では円形-楕円形、小道管は単独および2-3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形-多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状-網目状となる。放射組織は同性、単(一部2)列、1-15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫓木などに用いられる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No. 4030. 4035. 4083. 4092. 4097

環孔材で孔部は1-2列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形-楕円形、単独。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-60細胞高でしばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにもなる。材はやや重硬で、強度は大きい加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つにあげられる。

・カエデ属 (*Acer* sp.) カエデ科 No. 4057

散孔材で横断面ではやや角張った楕円形、単独または2-3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壛孔は対列-交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織はターミナル状、周囲状または随伴散在状、接線状。年輪界はやや明瞭。

カエデ属は国内に26種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木-低木である。県内にはイロハモミジ (*Acer palmatum*)やハウチワカエデ (*A. japonicum*)など15種ほどが自生する。材は一般にやや重硬・強靱で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科 No. 4031

散孔材で横断面では楕円形、2-4個が複合または単独で配列、年輪界付近で管径を減少させる。道管は階段穿孔をもち、段数は5-10、壛孔は交互-対列状に配列、放射組織との間では瘤状となる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高で、時に上下に連結する。柔組織は短接線状、散在状。年輪界は不明瞭。

エゴノキ属は国内に3種あるが、県内にはエゴノキ (*Styrax japonica*)とハクウンボク (*S. obassia*)が自生する。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、旋作・器具・薪炭材などに用いられる。

・トネリコ属 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科 No. 4251

環孔材で孔部は2-3列、孔部外で急に管径を減少させたのち漸減する。管壁は厚く、横断面では円形-楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔をもち、壛孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状-篩状となる。放射組織は同性-異性、1-4細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状、ターミナル状。年輪界は明瞭。

トネリコ属は国内に9種あるが、県内にはヤチダモ (*Fraxinus mandshurica* var. *japonica*)やトネリコ (*F. japonica*)など6種が自生する。いずれも落葉高木で、材質は種によって異なるが、一般には中庸-やや重硬で、韌性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などに用いられる。

以上の同定結果を検出遺構や推定されている用途などにも一覧表で示す(表I-1)。

4. 考察

検討対象とされた110点の試料の6割強をスギが占めている。アスナロがこれに次ぎ、両種にヒノキ属とモミ属を加えた針葉樹が全体の8割弱にあたる86点を占めている(表I-2)。こうした傾向は柳之御所遺跡第55次調査(高橋 2003MS)や同第21次・41次調査など(以下先行調査と表記)(能城 1995, 高橋 1995)、隣接する志羅山遺跡第66・74次調査(高橋 2000a)、同第80次調査(高橋 2001)検出材でも認められている。これは、試料の多くが折敷やちゅう木をはじめとした薄板やその加工材で占められていることによるもので、割裂性に優れた針葉樹材が選択された結果(高橋 2000a)が表れたものといえよう。すなわち、「割り技法」による板作りが行われていた時代の用材選択の結果が表れているとみる事ができる。

対象とされた試料の半数近くはその用途が推定できていない加工材であるが、上記のように、多くが薄板状のもので、スギをはじめとして針葉樹が多く用いられている。また、用途によっては特定の樹種に偏った組成を示している(表I-2)ことから、用材の選択が行われていたことがうかがえる。

箸は14点が検討されたが、スギ(9点)とアスナロ(5点)が認められた。「両口箸」のほか、「片口箸」や「寸胴箸」と判断できるものも含まれている。破損しているものも多いが、形状によって使用樹種が異な

ることはないようである。箸は先行調査でも多数検出され、検討された試料のほとんどを二分群にヒノキを加えた針葉樹が占めている¹¹⁾ (能城 1996)。また、志羅山遺跡66次調査出土試料では検討した18点すべてがスギであった (高橋 2000a)。

ちゅう木は13点を検討したが、スギ (12点) とヒノキ属 (1点) に同定された。箸者はちゅう木のほとんどは薄板を二次加工した板川材であろうと考えている (高橋 2000a) が、スギが9割近くを占める先行調査のような例¹²⁾ (能城 1996) とともに志羅山遺跡74次調査出土材のように、アスナロが多くスギの方が少ない例¹³⁾ (高橋 2000a) もある。

折敷は6点が検討された。底板が2点、縁¹⁴⁾が3点、木釘が1点である。いずれもスギ製であった。うち1点の底板 (No. 4109a) は四方に縁がつけられ、三方 (No. 4109b-d) が残存していた。残存している縁はそれぞれ3カ所が木釘で底版に打ち付けられており、うち8本が残存し、1本 (No. 4109e) を検討試料とした。木釘は古くから軟質材の緊結に用いられてきた方法であり、打ち込まれる材より硬質の別材 (例えばツギや竹など) を用いる場合と、同材を用いる場合があるが、この試料は後者であった。なお、先行調査検出材には底板・縁・木釘ともスギの例が圧倒的に多い¹⁵⁾ (能城 1995, 高橋 1995)。

椀は4点が検討された。いずれも破片で、3点は漆塗りであるが1点は漆の塗膜が確認されていない。すべてケヤキ製であった。第55次調査出土試料の2点もケヤキであり (高橋 2003MS)、先行調査でも漆器のほとんどがケヤキに同定¹⁶⁾されている (能城 1995, 高橋 1995)。

下駄は4点あるが連筒下駄が2点、差筒下駄の歯が2点である。連筒下駄にはスギとケヤキ、差筒にはスギとヒノキ属が用いられていた。先行調査例¹⁷⁾でも連筒下駄の用材はケヤキが最も多くスギも認められ、また、差筒の用材はスギが多い (能城 1995)。一方、ヒノキ属の例は連筒・差筒ともなく、県内の遺跡でもこれまでのところ報告はないようである (高橋 2000b)。

ところで、No. 4023は用途不明の加工材であるが、両端部は曲面に加工され、一面には漆塗膜、他面には菱形の塗刻¹⁸⁾が残されている。ヒノキ属が用いられていた。上述したように、ヒノキ属のうちサワラは自生が認められているが、ヒノキの自生北限は東北地方最南部の福島県いわき市とされている (福島県植物志編さん委員会 1987)。解剖学的特徴でサワラとヒノキの識別はできていないため試料がサワラでないとは断定できず、また、ヒノキの植栽木がなかったともいえないが、そのどちらの可能性も低いと考えている。おそらく、関東以西の地域からの移入品と思う。確実な鑑人品と判断できるものは、先行調査出土のイスノキ製櫛 (2点) とツゲ製櫛 (1点) (能城 1995, 高橋 1995) や志羅山遺跡第66次調査出土のイスノキ製櫛 (高橋 2000a) などに限られるが、これまでヒノキあるいはヒノキ属に同定された木製品・加工材はもちろぬ、奥州藤原氏関連の遺跡から検出された木製品の中にも、同じく移入されたものが少なからず含まれているものと考えている¹⁹⁾。

十和田a降下火山灰層の下から検出された自然木からはハンノキ属・クスギ節・トネリコ属が認められた。出土地の歯間が歯は当時、低湿地であったとみられている。いずれも解剖学的特徴から種までの識別はできていないが、河川敷など湿性な立地に生育するハンノキ・クスギ・ヤチダモ (またはトネリコ) であろう。これまでのところ根株などは検出されていないようであるから、出土地付近に生育していたものではなく、北上川本流から遊流してきた流木の可能性もあろう。なお、12世紀代の池跡から検出された自然木 (85点) からはカエデ属・ヤナギ属・エゴノキ属など25分類群が認められている (能城 1995) が、その中にハンノキ属とクスギ節は含まれていない。これが検討試料数の差によるものなのか、時代や出土地の違いによるものなのかはわからない。

(注)

- 1) 143点がスギ(65)・アスナロ(44)・ヒノキ(32)に同定されているほか、今回の試料には認められなかったモミ属(1)と広葉樹のウコギ属(1)も報告されている。
- 2) 136点の中にはスギ(121)・アスナロ(9)・ネズコ(5)の針葉樹に加えて広葉樹のクリ(1)も認められている。
- 3) トイレ状土坑とされるSK12から検出された30点はアスナロ(21)とスギ(9)に同定されている。
- 4) 先行調査の報告書中では椋(三浦 1995)や榊木(能城 1995)と表記されている。
- 5) 底板(120点)にはスギ(97)・アスナロ(9)・ネズコ(6)・モミ属(5)・クリ(2)・ハリギリ(1)が、縁(28点)にはスギ(24)・アスナロ(3)・モミ属(1)が、木釘(25点)にはスギ(24)とアスナロ(1)が用いられている。ところで、能城氏は折敷の縁・曲物・祭祀具などの木取りは“柾目がやや多いものの、板目も結構使われており、曲物の底および蓋では、斜めのものを板目に含めると、板目の方が多くくらいである。これに対し、折敷の底板では(中略)80%近くが柾目であるなど、かなり明確な製品化が認められる。”としている。しかし、能城氏が板目に含めた「斜めのもの」は、木工では「追柾」と呼び、柾目に準ずるものとして扱われている木取りである(ちなみに、高級着せなどにも語られる「四方柾」とは、この追柾が4個面すべてに表れているものを指している)。手元の資料では実数はわからないが、やや多いとされている柾目にこの追柾を加えると、板目の数はさらに少なくなるはずである。したがって、曲物と折敷底板の木取りの違いは、能城氏のいうほど大きなものにはなっていないと思う。
- 6) 検討された85点のうち71点が椀、14点が皿とされているが椀としたものの中には他の器種も含まれているようである。ケヤキのほかブナ属も2点用いられている。ブナ属製漆器のうち1点は椀であるが、もう1点の器種は手元の資料ではわからなかった。
- 7) 発掘報告書では23点(樹種が明らかにされたのは19点)が差歯か差歯か不明の下駄歯とされていた(三浦 1995)が、実測図を検討したところ、うち6点が差歯下駄、12点が差歯と判明した(高橋 2006b)。
- 8) ただしその加工は稚拙で、本来の加飾ではないのかもしれない。
- 9) こうした考えは、例えば、東北地方で最古の差歯下駄が本遺跡から検出され、藤原氏による搬入品と判断されていること(八重樫 2001)からも支持されると思う。

引用文献

- 福島県植物誌編さん委員会 1987 「福島県植物誌」
- 平井信二 1979-1981 「木の事典 第2～8巻」, かねえ書房
- 岩手植物の会 1970 「岩手県植物誌」
- 三浦謙一 1995 木製品類, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査 (分冊3)」, 93-111, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 能城修一 1995 柳之御所跡から出土した木製品の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査 (分冊1本文・図版)」, 433-456, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」, 平凡社
- 高橋利彦 1995 柳之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査

- 《分冊1 本文・図版》, 423-432, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋利彦 2000a 志羅山遺跡第66次・第74次調査出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集 志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書 一 岡遊水池事業関連遺跡発掘調査」, 433-444, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋利彦 2000b 県内の遺跡から出土した木質遺物の樹種 I. 下駄, 「岩手考古学会第25回研究大会資料」, 33-35
- 高橋利彦 2001 平泉町志羅山遺跡第80次調査出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第352集 志羅山遺跡発掘調査報告書(第47・56・67・73・80次調査) 都市計画街路毛越寺線整備事業関連遺跡発掘調査」, 649-662, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋利彦 2003MS 柳之御所遺跡第55次調査出土材の樹種, 7pp., 3pls., 木工会「ゆい」
- 八重樫忠郎 2001 衣生活4 装身具, 「いわて未来への遺産 古代・中世を歩く 奈良-安土桃山時代」, 173, 岩手日報社

E1-1 櫛之御所遺跡第56次調査出土材の樹種

試料番号	検出遺構など	用 途	種 名
4001	56P447 埋土	柱	ヒノキ属
4002	56SE1 埋土	不明	スギ
4004	56SE1 埋土	不明	クリ
4006	56SK26 8層	不明	スギ
4005	56SK26 8層	曲物側板	スギ
4009	56SK28 9層	ちゆう木	スギ
4010	56SK28 10層	ちゆう木	スギ
4008	56SK28 10層	ちゆう木	スギ
4007	56SK28 10層	ちゆう木	スギ
4025	56SK33 3b層	折敷	スギ
4026	56SK33 3層	不明	スギ
4027	56SK33 6層	ちゆう木	スギ
4031	56SK33 6層	部材	エゴノキ属
4029	56SK33 7層	不明	スギ
4030	56SK33 7層	漆塗椀	ケヤキ
4032	56SK33 8層	棒状品	クリ
4033	56SK33 8層	不明	スギ
4035	56SK33 8層	漆塗椀	ケヤキ
4034	56SK33 8層	不明	スギ
4042	56SK33 8層	不明	スギ
4037	56SK33 8層	ちゆう木	スギ
4038	56SK33 8層	ちゆう木	スギ
4039	56SK33 8層	ちゆう木	スギ
4041	56SK33 8層	箸	スギ
4040	56SK33 8層	ちゆう木	スギ
4016	56SK34 14層	棒状品	アサダ
4011	56SK53 13層	不明	スギ
4012	56SK53 13層	ちゆう木	スギ
4013	56SK53 13層	ちゆう木	スギ
4014	56SK53 13層	ちゆう木	スギ
4015	56SK53 13層	不明	スギ
4022	56SK67 3層	板材	スギ
4019	56SK67 8層	不明	スギ
4024	56SK67 8層	不明	スギ
4020	56SK67 8層	ちゆう木	スギ
4023	56SK67 8層	不明	ヒノキ属
4021	56SK67 12層	不明	スギ

表I-1 (続き)

試料番号	検出遺構など	用 途	種 名
4018	56SK67 埋土	不明	ヒノキ属
4044	56SD38 28層	鉄	コナラ・コナラ互属コナラ属
4045	56SD38 28層	部材	スギ
4046	56SD38 34層	不明	アスナロ
4047	56SD38 埋土	弱骨	スギ
4048	56SD38 埋土	箸	スギ
4049	56SD38 埋土	箸	アスナロ
4050	56SD39 T2 埋土	不明部材	コナラ属コナラ互属コナラ属
4053	56SD39 T2 13層	不明	スギ
4055	56SD39 T2 16層	連歯下駄	スギ
4062	56SD39 T2 22層	不明	スギ
4060	56SD39 T2 22層	不明	スギ
4059	56SD39 T2 22層	不明	クリ
4061	56SD39 T2 22層	不明	スギ
4057	56SD39 T2 22層	不明	カエデ属
4065	56SD39 T2 27~31層	不明	スギ
4067	56SD39 T2 27~31層	箸	スギ
4068	56SD39 T2 27~31層	箸	スギ
4066	56SD39 T2 27~31層	箸	スギ
4069	56SD39 T2 27~38層	曲物側板	スギ
4074	56SD39 T2 27~38層	箸	アスナロ
4070	56SD39 T2 27~38層	箸	アスナロ
4071	56SD39 T2 27~38層	箸	アスナロ
4073	56SD39 T2 27~38層	箸	スギ
4072	56SD39 T2 27~38層	箸	スギ
4075	56SD39 T2 27~38層	不明	スギ
4082	56SD39 T2 31~38層	不明	スギ
4078	56SD39 T2 31~38層	不明	スギ
4077	56SD39 T2 31~38層	不明	スギ
4080	56SD39 T2 31~38層	不明	スギ
4083	56SD39 T2 34層	漆塗板	ケヤキ
4084	56SD39 T2 35a層	不明	スギ
4085	56SD39 T2 36・37層	墨書板片	スギ
4086	56SD39 T2 37・38層	不明	スギ
4051	56SD39 T2 8層	下駄差歯	ヒノキ属
4052	56SD39 T2 9~11層	箸	スギ
4088	56SD39 T2 埋土	不明	スギ

表 I-1 (続き)

試料番号	検出遺構など	用 途	種 名
4092	56SD39 T2 埋土	連櫛下駄	ケヤキ
4091	56SD39 T2 埋土	箸	アスナロ
4094	56SD39 T2 埋土	不明	アスナロ
4089	56SD39 T2 埋土	不明	アスナロ
4090	56SD39 T2 埋土	箸	スギ
4093	56SD39 T2 埋土	匙形木製品	アスナロ
4054	56SD39 T2 13層	杓子形木製品	スギ
4095	56SD39 T4 13層	下駄蓋歯	スギ
4099	56SD39 T4 14・15層	不明	スギ
4102	56SD39 T4 14・15層	不明	モミ属
4096	56SD39 T4 14・15層	不明	スギ
4108	56SD39 T4 14・15層	不明	クリ
4098	56SD39 T4 14・15層	不明	スギ
4106	56SD39 T4 14・15層	不明	クリ
4105	56SD39 T4 14・15層	不明	クリ
4107	56SD39 T4 14・15層	不明	クリ
4103	56SD39 T4 14・15層	不明	アスナロ
4109(a)	56SD39 T4 14・15層	折敷底板	スギ
4109(b)	56SD39 T4 14・15層	折敷棧	スギ
4109(c)	56SD39 T4 14・15層	折敷棧	スギ
4109(d)	56SD39 T4 14・15層	折敷棧	スギ
4109(e)	56SD39 T4 14・15層	折敷木釘	スギ
4101	56SD39 T4 14・15層	不明	スギ
4097	56SD39 T4 14・15層	椀	ケヤキ
4111	56SD39 T4 16層	不明	スギ
4110	56SD39 T4 16層	不明	クリ
4112	56SD39 T4 22層	不明	クリ
4113	56SD39 T4 埋土	不明	アスナロ
4116	56SD39 T4 埋土	不明	スギ
4114	56SD39 T4 埋土	不明	スギ
4117	56SD40 12層	不明	スギ
4238	T2 猫間が淵 XI層	自然木	ハンノキ属
4251	T2 猫間が淵 IX-XV層	自然木	トネリコ属
4255	T2 猫間が淵 IX-XV層	自然木	コナラ属コナラ 亜属クヌギ節
4252	T2 猫間が淵 IX-XV層	自然木	ハンノキ属
4254	T2 猫間が淵 IX-XV層	自然木	ハンノキ属

表1-2 柳之御所遺跡第56次調査出土材の主な用途別樹種構成

分類群\用途	箸	ちゅう木	折敷	椀	下駄	その他	自然木	合計
モミ属						1		1
スギ	9	12	6		2	40		69
ヒノキ属		1			1	3		5
アスナロ	5					6		11
ハンノキ属							3	3
アサダ						1		1
クスギ節							1	1
コナラ節						2		2
クリ						9		9
ケヤキ				4	1			5
カエデ属						1		1
エゴノキ属						1		1
トネリコ属							1	1
小計	14	13	6	4	4	64	5	110

- 図版1 1. モミ属 No. 4102
 2. スギ No. 4026
 3. ヒノキ属 No. 4023

- 図版2 4. アスナロ No. 4049
 5. ハンノキ属 No. 4238
 6. アサダ No. 4016

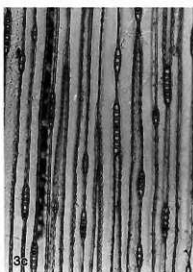
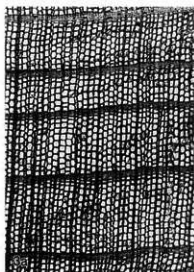
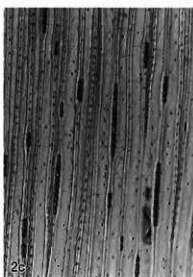
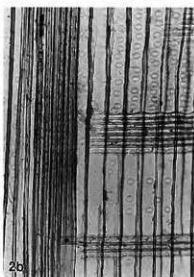
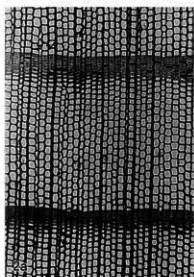
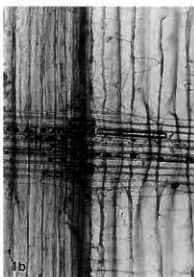
- 図版3 7. コナラ属コナラ亜属クスギ節 No. 4255
 8. コナラ属コナラ亜属コナラ節 No. 4050
 9. クリ No. 4106

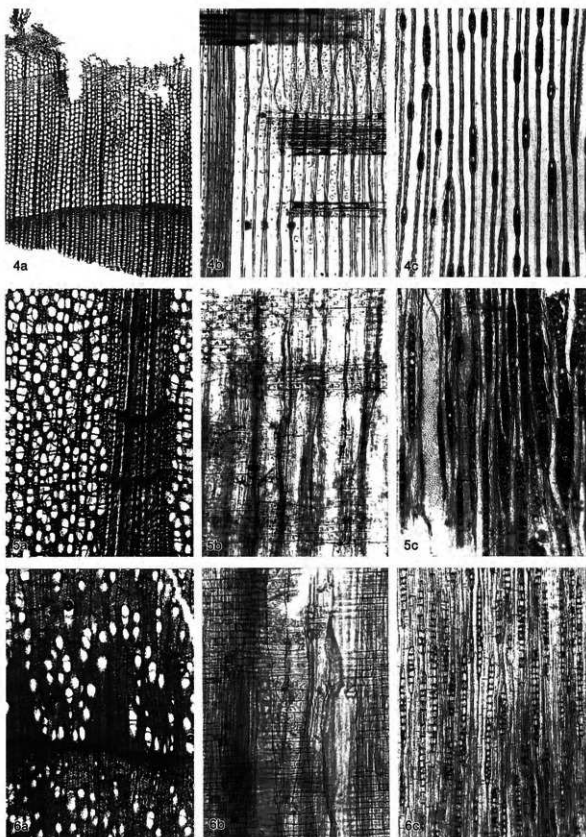
- 図版4 10. ケヤキ No. 4092
 11. カエデ属 No. 4057
 12. エゴノキ属 No. 4031

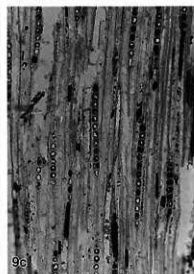
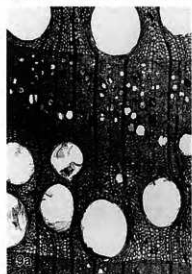
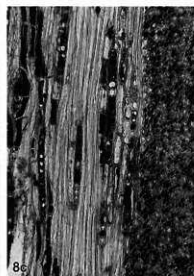
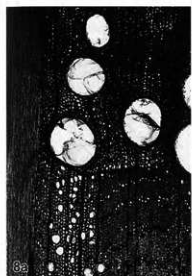
- 図版5 13. トネリコ属 No. 4251

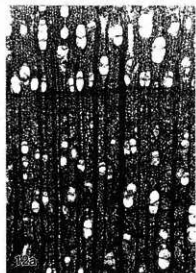
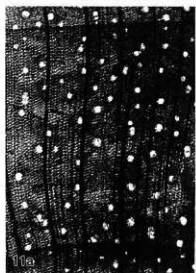
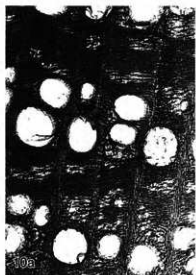
a:木口 x40 b:柀目 x100 c:板目 x100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柀目では左から右。











II 柳之御所遺跡第55次調査出土材の樹種

高橋 利彦 (木工会「ゆい」)

1. 試料

試料は12世紀のもとのとされる井戸と土坑から検出された木製品や加工材48点である。いずれもポリエチレングリコール (PEG) による保存処理済みのものである。遺物や検出遺構については概報が刊行されている (岩手県教育委員会 2002)。なお、4013は概報では屑の骨とされていたが、一端が45度に加工されていることと釘穴が3カ所あけられていることから、筆者が折敷縁と判断し、本稿ではそのように表記した (縁を4013a、木釘を4013bとした)。

遺跡は北上川右岸の河岸段丘縁 (標高26~27m) に立地している。

2. 方法

プレバートの作製には、筆者が遺物から採取した材片などを用いた。担当者の立ち会いのもとで、一部の試料 (4092~4101) からは材片を採取し、残りの試料からは直接切片を採取した²¹⁾。剃刀の刃を用い、試料の木口 (横断面)・柁目 (放射断面)・板目 (接線断面) 3面の徒手切片を作製し、これをガムクロラルで封入したプレバートを、生物顕微鏡で観察・同定した。併せて各分類群1点の顕微鏡写真図版を作成した (図版1~3) が、直接切片を採取したものの中には小さかったり、望ましい方向で作製できなかったものもあることをお断りしておく。作製したプレバートはすべて木工会「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は以下の8分類群 (ここでは属と種の異なった階級の分類単位を差控している) に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名とその配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ」(佐竹ほか 1989) にしたがう。県内での自然分布については「岩手県植物誌」(岩手植物の会 1970) を参照した。また、一般的性質などについては「木の事典 第1・4・6・7巻」(平井 1979, 1980) も参考にした。

・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 4008, 4010, 4011, 4016, 4032, 4033, 4034, 4054, 4055, 4060, 4061, 4063, 4064, 4069, 4070, 4071, 4081, 4086, 4087, 4088, 4089

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で分野あたり通常2個。放射組織は単列、20細胞高程度まで。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では、現在植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 4013a, 4013b, 4031, 4056, 4062

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid) で分野あたり1~4個。放射組織は単列、15細胞高程度まで。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは国内では

スギに次ぐ植林面積をもつ重要樹種であるが県内には自生しない。サワラは岩手県中南部以南に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樺や楠にするほか各種の用途がある。

・ネズコ (*Thuja standishii*) ヒノキ科 4090

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよくなる。分野壁孔はスギ型(ーヒノキ型)で分野あたり1ー4個。インデンチャーが認められる。放射組織は単列、20細胞高を越えることもある。

ネズコは本州・四国に自生する常緑高木で、日本特産種である。材は軽軟で、加工は容易、強度は小さいが保存性は高い。建築・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・アスナロ (*Thujaops dolabrata*) ヒノキ科 4005, 4006, 4035, 4080

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよくなる。分野壁孔は小型のヒノキ型ースギ型で分野あたり1ー6個。放射組織は単列、5細胞高前後の低いものが多い。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。北海道(渡島半島以南)・本州北部には変種ヒノキアスナロ(ヒバ) (*T. dolabrata* var. *hondai*) がある。

材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・アサダ (*Ostrya japonica*) カバノキ科 4004

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2ー4個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、内壁にらせん肥厚が認められ、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1ー4細胞幅、20細胞高程度であるが時に上下に連結する。結晶細胞が認められる。柔組織は短接線状。年輪界はやや不明瞭。

アサダは北海道(中南部)から九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 4047, 4048

環孔材で孔圏部は多列、小道管は火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は横断面では角張った楕円形ー多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1ー15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫓木などに用いられる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 4001, 4002

環孔材で孔圏部は1ー2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形ー楕円形、単独。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1ー10細胞幅、1ー60細胞高でしばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにもなる。材はやや重硬で、強度は大きいが、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が

美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つにあげられる。

・モクレン属 (*Magnolia* sp.) モクレン科 4050, 4091, 4092, 4093, 4094, 4095, 4096, 4097, 4098, 4099, 4100, 4101

散孔材で横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属は国内に6種あるが、県内にはホオノキ (*Magnolia obovata*)・コブシ (*M. praecoccissima*)・タムシバ (*M. salicifolia*) の3種が自生する。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工はきわめて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途も知られている。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキに準じた使われ方をする。

以上の同定結果を検出遺構や推定されている用途などとともに一覧表で示す(表I-1)。

4. 考察

検討対象となった48試料を通覧するとスギが最も多く(21点)、モクレン属(12点)がこれに次いでいる(表I-2)。スギをはじめとする針葉樹が多いことと、用途ごとに特定の樹種が用いられていることは第56次調査試料(高橋 印刷中)などとも共通する傾向である。

主な用途別の用材をみると、折敷および折敷?とされている試料は14点が検討対象とされ、スギ(9点)・ヒノキ属(4点)・ネズコに同定された。スギ製折敷は第56次調査試料(高橋 印刷中)でも認められ、第21次・41次調査など(以下先行調査と表記)検出試料(能城 1995)からはすべての分類群が認められている。このうち、4013は買頭で触れたように、筆者が折敷縁と判断したものである。釘穴は3カ所あり、中央の木釘だけが残存し、一方の端の釘穴部分で折れている。両端と中央に釘が打たれていたと判断し、全長は残存長に釘穴から端部までの長さを加えた約30cmと推定²⁷⁾した。縁・木釘ともヒノキ属が用いられていた。この両者が同一樹種で作られている例は、スギ製のものではあるが第56次調査試料でも認められ、それでは底板にも同じスギが用いられていた(高橋 印刷中)。

井戸枠は10点すべてがモクレン属であった。また、これに打ち込まれていたくさびにはクリ(2点)とモクレン属(1点)が用いられていた。モクレン属は加工はしやすいものの耐朽性が劣るためやや意外な感じを受けたが、例えば青森県内の平安時代の竪穴住居の構材とみられている炭化材の中にモクレン属が散見される例(鍋倉 1988, 高橋 2002など)があることを考えると、当時の用材としてはそれほど特異なものではなかったのかもしれない。

格子はスギ(4点)とヒノキ属・アスナロ(各1点)が用いられていた。先行調査ではヒノキ属1点が確認されている(高橋 1995)。

扉の骨は2点ともスギ製であった。第56次調査試料の中にもスギ製の扉の骨(1点)がある(高橋 印刷中)。先行調査検出材(能城 1995)ではスギ(2点)・アスナロ(3点)・不明(1点)のほか、竹製のものもあったとされている(三浦 1995)。

碗2点は漆塗りで、ともにケヤキ製であった。第56次調査試料4点もいずれもケヤキであり(高橋 印刷中)、先行調査でもほとんどの漆器²⁸⁾がケヤキ製であった(高橋 1995, 能城 1995)。

刀子柄2点はアスナロとモクレン属であった。先行調査試料19点の用材でもモクレン属がスギとともに最多数(6点)を占め、アスナロ(4点)も認められている²⁹⁾(能城 1995)。また、志羅山遺跡第66次調査

試料の中にもアスナロ製の刀子柄が認められている（高橋 2000）。

〔注〕

- 1) 採取した材料は水を加えて放置し、PEGを溶かしたあと通常の材料と同様に3面の徒手切片を製作した。その他の試料は、各面が得られそうな部分に毛筆で温湯を塗り、表面のPEGを軟化させてから切片を切り出した。破損している部分などを利用して遺物の加工上の損傷をできるだけ避けるよう努めたため、良好な切片が得られたものは少ない。
- 2) この数値は、先行調査で計測できたもののほぼ半数が28-31cmであったとされている（三浦 1995）ことや、折敷・折敷?とされているものの計測値（岩手県教育委員会 2002）に近いことから妥当なものと思う。
- 3) 腕・皿85点のうち83点がケヤキ、2点がブナ属に同定されている。ブナ属の用いられている漆器のうち1点は椀であるが、他の1点の器種については手元の資料ではわからない。
- 4) ほかにヒノキ・ハシバミ属・カツラがある。

引用文献

- 平井信二 1979, 1980 「木の事典 第1・4・6・7巻」, かなえ書房
- 岩手県教育委員会 2002 「岩手県文化財調査報告書第113集 平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡 -第55次発掘調査概報-」
- 岩手植物の会 1970 「岩手県植物誌」
- 三浦謙一 1995 木製品類, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査 (分冊3)」, 93-111, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 能城修一 1995 柳之御所跡から出土した木製品の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査 (分冊1 本文・図版)」, 433-456, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐竹義輔・原 寛・亙理俊次・富成忠夫 (編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ」, 平凡社
- 鶴倉巳三郎 1988 李平下安原遺跡出土の炭化材, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第111集 李平下安原遺跡 -主要地方道大鰐渡岡線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」, 497-506, 青森県教育委員会
- 高橋利彦 1995 柳之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水池・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査 (分冊1 本文・図版)」, 423-432, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋利彦 2000 志羅山遺跡第66次・第74次調査出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集 志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書 一関遊水池事業関連遺跡発掘調査」, 433-444, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋利彦 2002 青森市安田(2)遺跡出土炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第321集 安田(2)遺跡Ⅲ -東北縦貫自動車道八戸線(青森-青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告-」, 90-96, 青森県教育委員会
- 高橋利彦 印刷中 柳之御所遺跡第56次調査出土材の樹種, 「岩手県文化財調査報告書第117集 平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡 -第56次発掘調査概報-」, 岩手県教育委員会

表Ⅱ-1 柳之御所遺跡第55次調査出土材の樹種

試料番号	検出遺構など	用 途	種 名
4001	55SE1 19層	漆塗椀	ケヤキ
4002	55SE1 18層	漆塗椀	ケヤキ
4004	55SE1 19層	栓?	アサダ
4005	55SE1 18層	不明	アスナロ
4006	55SE1 18層	不明	アスナロ
4008	55SE1 15層	鞘	スギ
4010	55SE1 14層	扇の骨	スギ
4011	55SE1 14層	扇の骨	スギ
4013a	55SE1 15層	折敷縁	ヒノキ属
4013b	55SE1 15層	折敷木釘	ヒノキ属
4016	55SE1 18層	部材	スギ
4031	55SE1 19層	格子	ヒノキ属
4032	55SE1 18層	格子	スギ
4033	55SE1 9層	格子	スギ
4034	55SE1 19層	格子	スギ
4035	55SE1 19層	格子	アスナロ
4047	55SE1 井戸枠	くさび	クリ
4048	55SE1 井戸枠	くさび	クリ
4050	55SE1 井戸枠	くさび	モクレン属
4054	55SK29 2層	折敷?	スギ
4055	55SK29 2層	折敷?	スギ
4056	55SK29 2層	折敷?	ヒノキ属
4060	55SK29 2層	折敷?	スギ
4061	55SK29 埋土	折敷?	スギ
4062	55SK29 2層	折敷?	ヒノキ属
4063	55SK29 埋土	折敷?	スギ
4064	55SK29 2層	不明	スギ
4069	55SK29 埋土	不明	スギ
4070	55SK29 埋土	不明	スギ
4071	55SK29 埋土	不明	スギ
4080	55SK40 7層	刀子柄	アスナロ
4081	55SK40 7層	格子	スギ
4086	55SK43 7層	折敷	スギ
4087	55SK43 7層	折敷	スギ
4088	55SK43 7層	折敷	スギ
4089	55SK43 7層	折敷	スギ
4090	55SK53 7層	折敷	ネズコ

表Ⅱ-1 (続き)

試料番号	検出遺構など	用途	種名
4091	55SK54 4層	刀子柄	モクレン属
4092	55SE1	井戸枠	モクレン属
4093	55SE1	井戸枠	モクレン属
4094	55SE1	井戸枠	モクレン属
4095	55SE1	井戸枠	モクレン属
4096	55SE1	井戸枠	モクレン属
4097	55SE1	井戸枠	モクレン属
4098	55SE1	井戸枠	モクレン属
4099	55SE1	井戸枠	モクレン属
4100	55SE1	井戸枠	モクレン属
4101	55SE1	井戸枠	モクレン属

表Ⅱ-2 柳之御所遺跡第55次調査出土材の主な用途別樹種構成

分類群\用途	折敷*	井戸枠	格子	くさび	扉の骨	碗	刀子柄	その他	合計
スギ	9		4		2			6	21
ヒノキ属	4		1						5
クロベ	1								1
アスナロ			1				1	3	4
アサダ								1	1
クリ				2					2
ケヤキ						2			2
モクレン属		10		1			1		12
小計	14	10	6	3	2	2	2	9	48

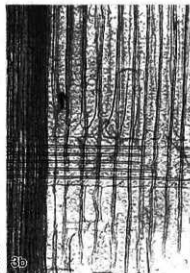
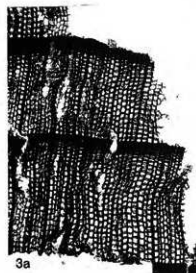
- 図版1 1. スギ 4011
2. ヒノキ属 4013a
3. ネズコ 4090

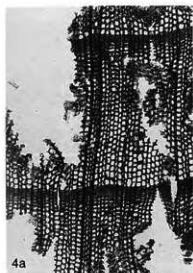
- 図版2 4. アスナロ 4005
5. アサダ 4004
6. クリ 4047

- 図版3 7. ケヤキ 4001
8. モクレン属 4099

a:木口 x40 b:柾目 x100 c:板目 x100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。

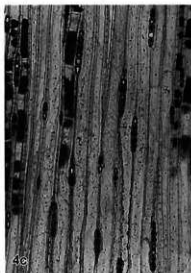




4a



4b



4c



5a



5b



5c



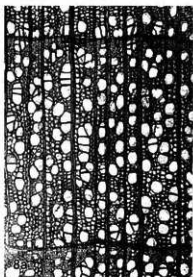
6a



6b



6c



2 柳之御所遺跡のテフラ

1. はじめに

東北地方北部岩手県域とその周辺に分布する後期更新世以降の地層や土壌の中には、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石、十和田、鳴子など、さらには九州地方や北海道地方などに位置する火山などから噴出したテフラ（tephra, 火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く堆積している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかになっている指標テフラがあり、それらとの関係を求めることにより、地層の堆積年代や土壌の形成年代のみならず、遺構や遺物の層位や年代などについても知るようになることができるようになっている。

そこでテフラ層およびその可能性のある土層が認められた平泉町柳之御所遺跡においても、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ組成分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を試みることにした。分析測定の対象となった試料は、試料①（YG56 SD39 T2 IX層）と試料②（YG21 SK23 5層）の2試料である。

2. テフラ組成分析

(1) 分析方法

2試料を対象として、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を試みた。分析の手順は、次のとおりである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で、250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別組成を求める（火山ガラス比分析）。
- 6) 偏光顕微鏡下で、重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を明らかにする（重鉱物組成分析）。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果をダイアグラムにして図1に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表1と表2に示す。試料①には、火山ガラスが非常に多く含まれている。火山ガラスは、量が多い順にスポンジ状に発泡した軽石型（92.4%）、繊維束状に発泡した軽石型（5.6%）、無色透明のバブル型（0.4%）である。なお、重鉱物の比率が0.2%以下と非常に少なく、重鉱物組成分析は困難であった。ただし、ごく少量の斜方輝石や単斜輝石が認められる。

一方、試料②には、火山ガラスが少量含まれている。火山ガラスは、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（1.6%）、無色透明のバブル型（1.2%）、スポンジ状に発泡した軽石型（0.8%）、淡褐色バブル型（0.4%）である。重鉱物としては、量が多い順に磁鉄鉱（43.2%）、角閃石（34.8%）、斜方輝石（16.4%）、黒雲母（1.6%）、単斜輝石（0.8%）が認められる。

3. 屈折率測定

(1) 測定方法

2試料について、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ作成にも利用された温度一定型屈折率測定法（新

井, 1972, 1993) により、屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表 2 に示す。試料①に含まれる火山ガラス (最大径 0.6mm) の屈折率 (n) は、1.502-1.507 である。

一方、試料②に含まれる火山ガラス (最大径 0.5mm) の屈折率 (n) は、1.501-1.507 である。また斜方輝石と角閃石の屈折率 (n_1, n_2) は、各々 1.718-1.728 と 1.687-1.692 である。

4. 考察

試料① (YG56 SD39 T2 IX層) に含まれる火山ガラスについては、その形態や色調さらに屈折率¹などから、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田 a 火山灰 (To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981) に由来すると考えられる。火山ガラスの量が非常に多く、純度が高そうなことから、一次堆積層の可能性が高いように思われるが、分析者が土層断面を再現していないことから言及は難しい。

一方、試料② (YG21 SK23 5層) に含まれるテフラ粒子のうち、スポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型ガラスあるいはその一部については、屈折率から To-a に由来する可能性が考えられる。しかしながら、無色透明や淡褐色のバブル型ガラスについては、他のテフラに由来する可能性が考えられる。斜方輝石については、焼石村崎野 (Yk-M, 大上・吉田, 1984, 町田・新井, 1992) や焼石山形テフラ (Yk-Y, 大上・吉田, 1984, 町田・新井, 1992) などの焼石火山起源のテフラ、また鳴子荷坂テフラ (Nr-N, 早田, 1989) などに由来している可能性が考えられる。角閃石については、花山火砕流堆積物 (Hanf, 早田, 1989) に含まれる角閃石の屈折率とよく似ている。しかしながら、この鉱物については何らかの作用により変質をうけている可能性も考えられよう。いずれにしても、試料②には、複数のテフラに由来するテフラ粒子の混在している可能性が指摘される。

5. 小結

柳之御所遺跡において、テフラ組成分析と屈折率測定を行った。その結果、SD39のIX層に、十和田 a 火山灰 (To-a, 915年) に由来する可能性が非常に高いテフラ粒子が多く含まれていることが明らかになった。

* 1 今回得られた火山ガラスの屈折率は、テフラ・カタログ (町田・新井, 1992) に記載されている To-a の値よりも若干高い傾向にある。この原因としては、To-a のユニット間に火山ガラスの屈折率の違いがある可能性が考えられる (町田ほか, 1981)。また、カタログに記載された試料の採取地点が給源に近いために標準試料に含まれる火山ガラスが分厚く、さらに To-a の噴出年代が新しいために十分水相が進んでいないこと、遼隔地ではその進んで水相が進んで屈折率の違いが生じていることに起因すると考えられる (新井房夫群馬大学名誉教授談話)。より高精度の同定のためには、X線プロブマイクログラナイザー (EPMA) による火山ガラスの主成分化学組成分析などが有効と考えられる。

表1 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
①	1	0	0	0	231	14	4	250
②	3	1	0	0	2	4	240	250

数字は粒子数。bw：バブル型 (cl：無色透明, pb：淡褐色, br：褐色), md：中間型, pm：軽石型 (sp：スポンジ状, fb：繊維束状)。

表2 重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
①				(分析不遇)				
②	0	41	2	87	4	108	8	250

数字は粒子数。ol：カンラン石, opx：斜方輝石, cpx：単斜輝石, ho：角閃石, bi：黒雲母, mt：磁鉄鉱。

表3 屈折率測定結果

試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n2)
①	1.502-1.507	-	-
②	1.501-1.507	1.718-1.728	1.687-1.692

屈折率測定は、温度一定屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による。

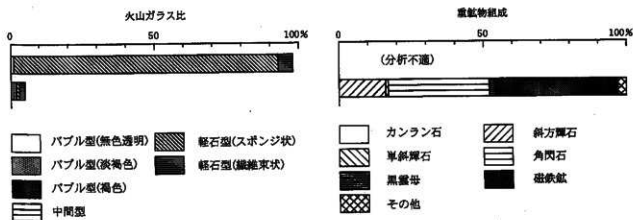


図1 テフラ組成ダイヤグラム

3. 柳之御所遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、柳之御所遺跡のSD39、T2より採取された堆積物で、試料1（21層、オリーブ黒色土）、試料2（24層、暗灰黄色砂）の2点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で躰などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルトマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てると言う操作を3回繰り返して行った。

顕鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、尚倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属科とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉21、シダ植物胞子2形態の計44である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。主要な分類群は写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、4分類群が検出された。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単純管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、トチノキ、シナノキ属、アオイ科、ニフトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、タンポポ属科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、広節裂頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵

(2) 花粉群集の特徴

1) 試料1 (21層)

草本花粉の占める割合がやや高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、クリが高率に出現し、スギ、カバノキ属、ブナ属などが伴われる。草本花粉ではヨモギ属、イネ属型を含むイネ科を主にカヤツリグサ科、キク亜科、アカザ科—ヒユ科などが伴われる。寄生虫卵が1cm³中から72個検出された。

2) 試料2 (24層)

草本花粉の占める割合が非常に高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、クリ、スギ、ツガ属がやや多い。草本花粉ではヨモギ属を主にイネ属型を含むイネ科、アカザ科—ヒユ科、オナモミ属、カヤツリグサ科などが伴われる。寄生虫卵は1cm³中で70個検出された。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

(1) 試料1 (21層)

イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科—ヒユ科、クワ科—イラクサ科の草本などの人里雑草や耕地雑草の生育する人為環境が分布していたとみられる。イネ科にはイネ属型が伴われ、水田雑草であるミズアオイ属やタデ属サナエタ節も検出されることから、周囲に水田が広がっていたと考えられる。森林植生としては、コナラ属コナラ亜属、クリを主要素とする二次林が分布し、低湿などにはハンノキ属が湿地林として生育していたと推定される。

(2) 試料2 (24層)

ヨモギ属、イネ科、アカザ科—ヒユ科、オナモミ属、クワ科—イラクサ科などの比較的乾燥した土地を好む草本で占められ、周囲は陽当たりの良いやや乾燥した環境であったと考えられる。ソバ属、アブラナ科などの花粉が出現することから、ソバやアブラナなどを栽培する畑が営まれていた可能性が示唆される。

なお、いずれの試料も花粉の残りが良く高密度であることから、保存状態の良い水浸かりの堆積環境であったと推定される。また、どちらも寄生虫卵の密度は低く、集落周囲の汚染程度とみなされる。人糞施肥を施していた可能性もあるがここでは言及できない。

表1 柳之御所遺跡における花粉分析結果

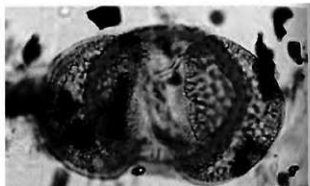
学名	分類群	SD39 T2	
		21層	24層
Arborealpollen	樹木花粉	1	2
Abies	モミ属		1
Tsuga	ツガ属	1	5
Pinussubgen. Diploxylon	マツ属擬樺葉実亜属	1	1
Pinussubgen. Haploxylon	マツ属樺葉實定実亜属	3	1
Cryptomeriajaponica	スギ	10	6
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	
Juglans	クルミ属	2	
Alnus	ハンノキ属	35	3
Betula	カバノキ属	9	1
Carpinus-Ostryajaponica	クマシダ属-アサダ	6	3
Castaneacremata	クリ	28	8
Castanopsis	シイ属	3	1
Fagus	ブナ属	9	3
Quercussubgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	52	8
Quercussubgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	4	1
Ulmus-Zelkovaserrata	ニレ属-ケヤキ	6	1
Aesculusturbinata	トナリキ	2	2
Tilia	シナノキ属		1
Malvaceae	アオイ科	1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1	
Arboreal・Nonarborealpollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	58	140
Nonarborealpollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	46	46
Oryzatype	イネ属型	9	6
Cyperaceae	カヤツリグサ科	21	8
Aneilemakisak	イボクサ	1	
Monochoria	ミスアオイ属	1	
Polygonum	タデ属	1	3
Polygonumsect. Persicaria	タデ属セナエタデ節	2	2
Rumex	ギシギシ属	1	
Fagopyrum	フバ属	1	
Chenopodiaceae Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	12	23
Caryophyllaceae	ナゲシ科	1	1
Ranuncul	キンボウゲ属	1	
Cruciferae	アブラナ科	1	1
Impatiens	ツリフネソウ属	2	
Apiaceae	セリ草科	2	1
Labiatae	シソ科	1	
Plantago	オオバコ属	1	1
Lactacoidae	タンポポ科	2	
Asteroidae	キク亜科	18	3
Xanthium	オナモミ属	4	9
Artemisia	ヨモギ属	62	153
Fernspore	シダ植物胞子		
Mundatetypespore	星条溝胞子	25	5
Trilatetypespore	三条溝胞子	1	1
Arborealpollen	樹木花粉	171	49
Arboreal・Nonarborealpollen	樹木・草本花粉	58	140
Nonarborealpollen	草本花粉	188	261
Totalpollen	花粉総数	417	430
	試料1cm ³ 中の花粉密度	2.4×10 ⁷	2.2×10 ⁷
Unknownpollen	未同定花粉	4	3
Fernspore	シダ植物胞子	26	6
Helmintheggs	寄生虫卵		
Ascaris	回虫卵	5	4
Trichuris	鞭虫卵	2	6
Diphyllobothriumlatum (nibonkatense)	広筋裂頭条虫卵	1	
Diphyllobothriummansoni	マンソン裂頭条虫卵	1	
Total	計	9	10
	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	7.2×10	7.0×10
	明らかな消化残渣	(-)	(-)

柳之御所の花粉写真



1 トウヒ属

-10 μm



2 マツ属

-10 μm



3 スギ



4 ハンノキ属



5 コナラ属



6 クワ科-イラクサ科



7 マメ科



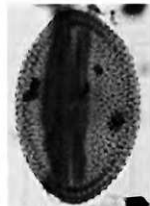
8 イネ属型



9 カツリグサ科



10 ネギ属



11 ソバ属



12 ソバ属



13 アブラナ科

-10 μm

4. 柳之御所遺跡におけるトイレ遺構分析

I. はじめに

糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成に特異性を示すため、他の堆積物は様相が異なる。したがって、これらの分析を総合的に行うことによって、トイレ遺構を識別することが可能である。さらに、その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることができる。

ここでは、柳之御所遺跡で検出された土坑内の堆積土壌を対象に分析を行い、トイレ遺構の可能性について検討する。

II. 試料

試料は、YG56SK26の8層（緑灰色粘土、試料1）、YG56SK27の10層～11層（オリーブ黄色粘土～緑灰色粘土、試料2）と13層～15層（緑灰色粘土（灰黄褐色土含む）～緑灰色粘土、試料3）、YG56SK28の13層（オリーブ黄色粘土（黒褐色土含む）、試料4）1点、YG56SK29の7層（黒褐色シルト質粘土、試料5）、YG56SK33の8層（黒色土、試料6）、YG56SK53の13層（黒褐色粘土、試料7）、YG56SK67の8層（黒褐色土、試料8）、9層（黒褐色粘土、試料9）、11層（黒褐色粘土（オリーブ灰色粘土を多く含む）、試料10）の計10点である。

III. 方法

(1) 寄生虫卵分析

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈殿法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）。
- 5) 水洗後サンプルを二分する。
- 6) 二分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

(2) 花粉分析

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後上澄みを捨てるという操作を

3回繰り返しを行った。

検鏡はプレバカート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村 (1974, 1977) を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

(3) 種実同定

試料 (堆積物) に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料50～200cm³ に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

IV. 結果

(1) 寄生虫卵分析

出現した寄生虫卵は5分類群である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、試料1cm³中の寄生虫卵数をダイアグラムとして図1に示す。また、主要な分類群は写真に示した。以下に寄生虫卵の特徴を記す。

・回虫 *Ascaris lumbricoides*

回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。卵には受精卵と不受受精卵がある。遺跡等の堆積物では卵殻のみが検出され、長期の堆積年数による風化や処理過程における薬品使用のため、受精卵と不受受精卵の区別は不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmあり楕円形で外側に蛋白質膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

・鞭虫 *Trichuris trichiura*

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高湿多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、50×30μmでレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

・広節裂頭条虫 *Diphyllobothrium latum*

広節裂頭条虫は、北半球に分布し、特に北欧、北米、東北アジア地域に多い。卵の大きさは、66～75×45～53で楕円形。小蓋がある。ケンミジンコ類などの第1中間宿主を経て、第2中間宿主のマスやサケの生食によって感染する。

・カピラリア *Capillaria* sp.

鶏の小腸に寄生する毛体虫で、卵は大きさ形とも鞭虫卵に類似するが、両端栓状物がやや突出しその幅は小さく卵殻もやや薄い。鶏の生食や不完全な調理で感染する。

・不明虫卵

卵の大きさは30×50μmで淡黄色、小蓋がある。

1) YG56SK26、8層（試料1）

回虫卵、鞭虫卵、カビラリアが検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。

2) YG56SK27、10層～11層（試料2）、13層～15層（試料3）

試料2では回虫卵、鞭虫卵、広節裂頭条虫卵が検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。

試料3からは回虫卵、鞭虫卵、広節裂頭条虫卵が検出され、明らかな消化残渣が検出された。

3) YG56SK28、13層（試料4）

回虫卵、鞭虫卵、カビラリア、不明虫卵が検出され、明らかな消化残渣が検出された。

4) YG56SK29、7層（試料5）

回虫卵、鞭虫卵、広節裂頭条虫卵が検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。

5) YG56SK33、8層（試料6）

回虫卵、鞭虫卵、広節裂頭条虫卵が検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。

6) YG56SK53、13層（試料7）

回虫卵、鞭虫卵が検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。石細胞が検出された。

7) YG56SK67、8層（試料8）、9層（試料9）、11層（試料10）

試料8では回虫卵、鞭虫卵、広節裂頭条虫卵が検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。

試料9からは回虫卵、鞭虫卵が検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。試料10では回虫卵、鞭虫卵が検出されたが、明らかな消化残渣は検出されなかった。

（2）花粉分析

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉24、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉23、シダ植物孢子2形態の計53である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図2に示す。主要な分類群は写真に示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウグ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、ノブドウ、アカバナ科、セリ亜科、ナス科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

・YG56SK26, 8層 (試料1)

草本花粉の占める割合が高く、特にイネ属型を含むイネ科が優占する。次いでアブラナ科が多く、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科などが出現する。樹木花粉は少なく、クリ、コナラ属コナラ亜属、トチノキなどが低率に出現する。

・YG56SK27, 10層-11層 (試料2)、13層-15層 (試料3)

草本花粉の占める割合が高く、イネ属型を含むイネ科が優占する。試料2ではアブラナ科が多い。ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、クワ科-イラクサ科などが出現する。

・YG56SK28, 13層 (試料4)

草本花粉の占める割合が非常に高く、特にイネ属型を含むイネ科が優占する。次いでアカザ科-ヒユ科が多く、ヨモギ属、アブラナ科、ソバ属、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、マツ属複雑管束亜属などが低率に出現する。

・YG56SK29, 7層 (試料5)

草本花粉の占める割合が非常に高く、アカザ科-ヒユ科が多く、次いでイネ属型を含むイネ科、アブラナ科などが出現する。樹木花粉は少なく、クリ、スギなどが低率に出現する。

・YG56SK33, 8層 (試料6)

草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ属型を含むイネ科が優占する。次いでアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科などが出現する。樹木花粉は少なく、マツ属複雑管束亜属、クリ、スギなどが低率に出現する。

・YG56SK53, 13層 (試料7)

草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ属型を含むイネ科およびアカザ科-ヒユ科が優占する。次いでヨモギ属が多く、アブラナ科、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、クリ、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

・YG56SK67, 8層 (試料8)、9層 (試料9)、11層 (試料10)

草本花粉の占める割合が高く、特にアブラナ科とイネ属型を含むイネ科が優占する。ヨモギ属、カヤツリグサ科、クワ科-イラクサ科が出現する。樹木花粉ではクリなどが出現する。

(3) 種実同定

1) 分類群

樹木8、草本13の計21が同定された。学名、和名および粒数を表3に示し、主要な分類群を写真に示す。

以下に主要な分類群の形態的特徴を記す。

【樹木】

ヤマクワ *Morus bombycis* 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

キイチゴ属 *Rubus* 核バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

マタタビ *Actinidia polygama* Planch. ex Maxim. 種子 マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分

布する。種皮はやや厚く堅い。

サルナシ *Actinidia arguta* Planch. ex Miq. 種子 マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。

ガズミ属 *Viburnum* 核 スイカズラ科

茶褐色で楕円形を呈す。腹面に1本と背面に2本の溝が走り、下端に小さなへそがある。

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 穎

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は三角形である。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は扁平で、表面には光沢がある。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、へそがある。断面は両凸レンズ形である。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* Trautv. var. *Heterophylla* Hara 種子 ブドウ科

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が2つあり、背面のカラザは長く伸びる。

セリ科 *Umbelliferae* 果実

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

エゴマ *Perilla frutescens* Britton var. *japonica* Hara 果実 シソ科

黒褐色～灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。径2.2～2.4mm。径2.2mm以上をエゴマとし、2.0mm以下をシソ属とした。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。

葉下によると小粒種子（雑草メロン型）、中粒種子（マクワウリ・シロウリ型）、大粒種子（モモルディカ型）がある。

2) 種実群集の特徴

・YG56SK26、8層（試料1）

キイチゴ属、ヤマグワの樹木種実、ウリ、ナスの草本種実が出現する。

- ・YG56SK27、10層～11層（試料2）、13層～15層（試料3）
10層～11層（試料2）では、マタタビ、サルナシの樹木種実、ウリ類、ナスなどが出現する。13層～15層（試料3）では極めて種実が多く、アケビ属、マタタビ、サルナシの樹木種実、ウリ類、ナスの草本種実が多い。
- ・YG56SK28、13層（試料4）
マタタビ、サルナシの樹木種実、ウリ類、ナスの草本種実が多い。
- ・YG56SK29、7層（試料5）
樹木種実のキイチゴ属が多く、草本種実のウリ類は極めて多い。
- ・YG56SK33、8層（試料6）
アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科などが検出される。
- ・YG56SK53、13層（試料7）
アカザ属などが検出される。
- ・YG56SK67、8層（試料8）、9層（試料9）、11層（試料10）
樹木種実ではキイチゴ属、草本種実ではウリ類とナス

V. 考察

1. トイレ遺構である可能性について

寄生虫卵の密度は、SK26の8層（試料1）、SK27の10層～11層（試料2）、13層～15層（試料3）、SK28の13層（試料4）、SK29の7層（試料5）、SK67の8層（試料8）、9層（試料9）、11層（試料10）で高く、SK33の8層（試料6）、SK53の13層（試料7）では低い。花粉分析の結果をみると、各試料ともイネ属型を含むイネ科の出現率が高く、SK27の10層～11層（試料2）、SK67の8層（試料8）、9層（試料9）、11層（試料10）ではアブラナ科の出現率も高い。また、SK28の13層（試料4）、SK29の7層（試料5）、SK33の8層（試料6）、SK53の13層（試料7）ではアカザ科～ヒユ科の出現率が高い。種実では、SK26の8層（試料1）、SK27の10層～11層（試料2）、13層～15層（試料3）、SK28の13層（試料4）、SK29の7層（試料5）、SK67の8層（試料8）、9層（試料9）、11層（試料10）から樹木種実のマタタビやサルナシ、草本種実のナスやウリ類など栽培植物を含む食用となる植物が検出され、SK33の8層（試料6）とSK53の13層（試料7）からはアカザ属などが検出された。

以上のことから、寄生虫卵密度が高く、食用となる種実が多く検出されたSK26の8層（試料1）、SK27の10層～11層（試料2）、13層～15層（試料3）、SK28の13層（試料4）、SK29の7層（試料5）、SK67の8層（試料8）、9層（試料9）および11層（試料10）は糞便の堆積とみなされる。したがって、これらの土坑がトイレ遺構であったかあるいは糞便の投棄場所であったと判断される。

なお、検出された花粉群集のうち、アブラナ科は食物となった植物に起因すると考えられるが、他は周囲の植物が反映されたものと思われる。

2. 食物について

寄生虫卵では回虫卵と鞭虫卵が多く、これらは野菜類や飲み水からの感染が多い。広節裂頭条虫卵の検出から、サケやマスなどを摂食していたことが推定される。花粉では、野菜類が多く含まれるアブラナ科が多く、イネ属型やソバ属の穀類、菌用の可能性のあるアカザ科～ヒユ科が産出される。アカザ科～ヒユ科は糞便堆積と認められなかったSK33、SK53からも検出されている。種実では、ヤマグワ、アケビ属、キイチゴ属、ブドウ属、マタタビ、サルナシ、グミ属、ガマズミ属の食用になる樹木種実、イネ、エゴマ、ナス、ウリの

栽培植物が検出されている。イヌホウズキ、アカザ属、ヒユ属も食用ないし薬用であった可能性がある。

以上のことから、本遺跡に居住あるいは勤務していた人々は、イネ、ソバ属の穀類、エゴマ、ナス、ウリ、アブラナ科の栽培植物、ヤマグワ、アケビ属、キイチゴ属、ブドウ属、マタタビ、サルナシ、グミ属、ガマズミ属といった樹木種実の食用植物、魚類ではサケやマスの淡水魚を摂食していたことが示唆される。

3. 周辺の植生

花粉群集は周囲の植生を反映していると考えられることから、遺構の周囲にはイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、クワ科-イラクサ科のやや乾燥した人里に多い植物が生育していたと推定される。樹木ではクリヤスギなどの分布が示唆される。

Ⅵ. まとめ

柳之御所遺跡の土坑を分析した結果、SK26、SK27、SK28、SK29、SK67がトイレ遺構が糞便の投棄された土坑とみなされた。イネ、ソバ属の穀類、エゴマ、ナス、ウリ、アブラナ科の栽培植物、ヤマグワ、アケビ属、キイチゴ属、ブドウ属、マタタビ、サルナシ、グミ属、ガマズミ属の樹木種実の食用となる植物とサケやマスの淡水魚の摂食が認められた。また、周囲はイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、クワ科-イラクサ科のやや乾燥した人里に多い植物が生育し、クリヤスギなどの樹木の分布が示唆された。

参考文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同一-テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2-研究対象別分析法」, p.138-149.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.
- 大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年。第四紀研究, 11, p.232-233.
- 大上和良・吉田 充 (1984) 北上川中流域, 胆沢扇状地における火山灰層序。岩手大学工学部研究報告, 37, p.69-81.
- 早田 勉 (1989) テフロクロロジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討-仙台平野北部の遺跡を中心に。第四紀研究, 28, p.269-282.
- 早田 勉 (1999) テフロクロロジー-火山灰で過去の時間と空間をさぐる方法。長友恒人編「考古学のための年代測定学入門」, 古今書院, p.113-132.
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説。養賢堂, 494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業。雄山閣出版, p.131-139.
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物。医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊一, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店。

p. 248-262.

金原正明 (1999) 寄生虫, 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

金原正明・松井章・金原正子 (1994) 便所堆積物から探る古代人の食生活. 助成研究報告 (平成4年度) 財団法人味の素文化センター, p.35-48.

高倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村 純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.

中村 純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村 純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

中村 純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

藤下典之 (1992) 出土種子からみた古代日本のメロンの仲間, その種類, 渡米, 伝搬, 利用について, 考古学ジャーナルNo.354, ニュー・サイエンス社, p.7-13.

表1 柳之御所遺跡における寄生虫卵分析結果

分類	原	56SK26		56SK27		56SK28		56SK29		56SK33		56SK37		
		8号	10号-11号	12号-15号	13号	7号	8号	13号	8号	9号	11号			
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			
Helminth eggs	寄生虫卵													
<i>Ascaris lumbricoides</i>	回虫卵	472	154	708	536	276	55	20	156	554	122			
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵	164	62	396	312	192	110	36	120	554	88			
<i>Diphyllobothrium latum (niphonkaiense)</i>	広頭裂頭条虫卵		4	12		0	11		5					
<i>Capillaria</i>	カピラリア	1			1									
Unknown eggs	不明虫卵				1									
Total	計	637	220	1116	850	528	176	56	281	1108	210			
	資料中の寄生虫卵密度	4.5	1.5	1.2	1.1	5.8	1.8	4.5	2.2	8.9	1.5			
		$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$			
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)			
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)			

表2 柳之御所遺跡における花粉分析結果

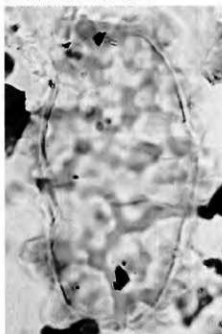
分類群	学名	和名	56SK26	56SK27	56SK28	56SK29	56SK33	56SK33	56SK67			
			8層	1層-11層	13層	7層	8層	13層	8層	9層	11層	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Arborealpollen		樹木花粉										
Abies		モミ属		2				1			7	
Picea		トウヒ属		1	2						15	3
Tsuga		ツガ属		1	1	4		1	1	1	8	2
Pinussubgen. Diploxylon		マツ属雄雄椎葉亜属	1	1	8	5	2	11	2	1	11	4
Pinussubgen. Haploxyylon		マツ属雄雄椎葉亜属	1	1	1			1			6	4
Cryptomeriajaponica		スギ	6	5	14	8	8	7	10	15	9	6
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cepressaceae		イチイ-イチイ科-セノキ科		1					1			1
Salix		ヤナギ属							1		1	
Myrica		ヤマモモ属			1				1		5	
Juglans		クルミ属	1	2								
Pterocaryafofolia		サワグルミ					1	1		2	1	
Alnus		ハンノキ属	2	5	4	3	2			7	13	4
Betula		カバノキ属	3	3	3	1	2	1	1	1	7	1
Carpinus-Ostryiajaponica		クマシデ属-アサダ	2		1			1		1	1	
Castanacearenata		クリ	18	5	2	2	10	8	5	38	8	8
Castanopsis		シイ属	3					2		6	1	
Fagus		ブナ属		2	1					1	2	4
Quercussubgen. Lepidobalanus		コナラ属コナラ亜属	13	1				3	4	4	4	9
Quercussubgen. Cyclobalanopsis		コナラ属アガシ亜属	7				1	2		1	2	
Ulmus-Zelkoveaserrata		ニレ属-ケヤキ	4	2		2	1			9		
Ilex		モチノキ属	1									
Acer		カエデ属	2					2	1	1		
Aesculusturbinata		トチノキ	8	1					1	5	2	7
Ericaceae		ツツジ科		1							1	
Arboreal・Nonarborealpollen		樹木・草本花粉										
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	11	23	26	50	35	13	25	18	8	6
Bosaceae		バラ科	1									
Leguminosae		マメ科	2		1		1					
Araliaceae		ウコキ科				2					1	
Nonarborealpollen		草本花粉										
Typha-Sparganium		ガマ属-ミクリ属				1						
Gramineae		イネ科	144	87	102	138	56	132	93	66	38	34
Oryzatype		イネ属型	20	19	25	27	6	10	5	4		5
Cyperaceae		カヤツリグサ科	6	10	45	12	27	28	26	5	51	12
Allium		ネギ属			3	1						
Polygonum		タデ属							1			
Polygonumsect. Persicaria		タデ属サナエタデ節	6		4	4		1	2	1	1	
Fanogryum		ソバ属	3	1	5	14	1		4			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	20	19	33	82	105	95	96	8	6	7
Caryophyllaceae		ナデシコ科	2		2		2		4			
Ranunculaceae		キンポウゲ属										2
Cruciferae		アブラナ科	46	150	15	16	45	6	28	70	116	122
Sanguisorba		ワレモコウ属		1								
Impatiens		ツリフネソウ属				1						
Ampelopsishevipedunculata		ノブドウ					2					
Onagraceae		アカバナ科										1
Aplodeae		セリ亜科	1	1	1		2	4	1	3	1	3
Solanaceae		ナス科										1
Plantago		オオバコ属				2		1		2		4
Lactucoidae		タンポポ属	1		1		6	2				
Asteroidae		キク亜科	1		5		2	3		3	3	7
Xanthium		オナモミ属				1	1	2	1	1		
Artemisia		ヨモギ属	30	39	33	47	30	61	67	70	40	34
Fernspore		シダ植物胞子										
Monolatypespore		単葉溝胞子	9	4	8	1	5	13	20	18	13	8
Trilatypespore		三葉溝胞子	15	5	5	7	11	21	8	44	46	12
Arborealpollen		樹木花粉	66	26	40	28	29	44	29	94	106	47
Arboreal・Nonarborealpollen		樹木・草本花粉	14	23	27	52	36	13	25	18	9	6
Nonarborealpollen		草本花粉	280	327	294	346	285	345	328	233	257	231
Totalpollen		花粉総数	360	376	361	426	350	402	382	345	372	284
		試料中の花粉密度	2.4×10^4	3.7×10^4	8.6×10^4	8.6×10^4	1.3×10^5	4.5×10^5	2.2×10^5	7.0×10^5	1.1×10^6	2.2×10^6
Unknownpollen		未同定花粉	11	2	5	2	5	4	2	7	11	12
Fernspore		シダ植物胞子	24	9	13	8	16	34	28	62	59	20

表3 柳之御所遺跡における種実同定結果

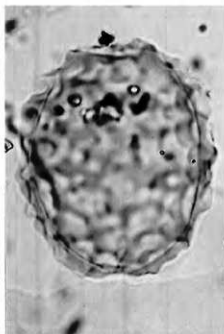
分 類 群	部位	56SK26		56SK27			56SK28	56SK29	56SK33		56SK53		56SK67		
		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
学 名	植 名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Arbor	樹木														
<i>Morus bombycis</i>	ヤマクワ	種子	8		1			1					1		1
<i>Akebia</i>	アケビ属	種子			46										
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	19			1	104	1			1		3	24	
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子			3	1	2			1					
<i>Actinidia polyana</i> Planch. ex Maxim.	マクタブ	種子		2	48	33								1	
<i>Actinidia arguta</i> Planch. ex Maxim.	サルナシ	種子		3	32	9					1				
<i>Elaeagnus</i>	タミ属	種子		1	2	3	1			1				1	
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	核				1	1								
Herb	草本														
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穀粒		1											
<i>Carex</i>	スゲ属	莢実	1	3	4	3								1	
Cyperaceae	カヤブク科	莢実			4	3	3								
<i>Polygonum</i>	タケ属	莢実			1		3								
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	2	12	11	6	6	22	5					3	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	1			4	3	8	1						
Caryophyllaceae	ナゲシ科	種子		2	4		3	4							
<i>Anemone hepatica</i> Tratt.	ノブドウ	種子		1	6	5	3								
Umbelliferae	セリ科	莢実			1										
<i>Poa annua</i> L. var. <i>jasca</i> Re.	エゴマ	莢実	1	2	6	1	1								
<i>Solanum melongera</i> L.	ナス科	種子	18	9	111	52	12				3	29		5	
<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌウズキ	種子			15	1		1							
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	17	5	309	189	575				7	9	212		
Total	合計		66	42	604	312	718	36	8	13	44	245			

【200g中0.25mm篩：*8、*9は少量のため50g中】

柳之御所遺跡の寄生虫卵



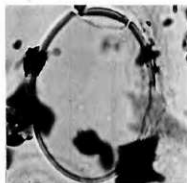
1 回虫卵 (不受精卵?)



2 回虫卵 (不受精卵?)



3 鞭虫卵



4 広節裂頭条虫卵

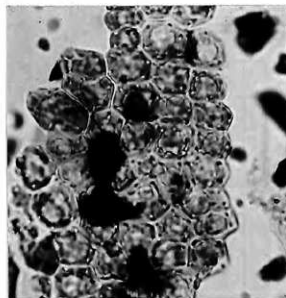


5 広節裂頭条虫卵



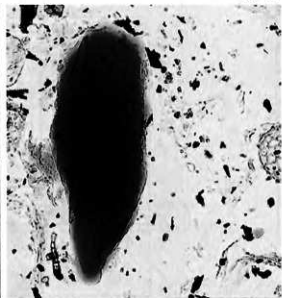
6 カピラリア

— 10 μm



7 石細胞

— 10 μm



8 消化残渣

— 100 μm

柳之御所遺跡の種実 I



1 キイチゴ属核



2 キイチゴ属核

— 1.0mm



3 ブドウ属種子



4 ブドウ属種子

— 1.0mm



5 マタタビ種子



6 マタタビ種子

— 0.5mm



7 サルナシ種子



8 サルナシ種子

— 1.0mm



9 ガマミス属核

— 1.0mm



10 イネ果実(炭化)

— 1.0mm



11 スゲ属果実

— 1.0mm



12 カヤツリグサ科果実

— 0.5mm



13 アカザ属種子

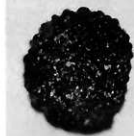


14 アカザ属種子

— 0.1mm



15 ナデシコ科種子



16 ナデシコ科種子

— 0.1mm

柳之御所遺跡の種実Ⅱ



1 セリ科果実
_____ 1.0mm



2 エゴマ果実



3 エゴマ果実
_____ 1.0mm



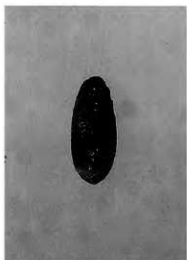
4 ナス科種子



5 ナス科種子
_____ 1.0mm



6 ウリ類種子
_____ 2.0mm



7 ウリ類種子



8 ウリ類種子



9 ウリ類種子
_____ 2.0mm

写 真 图 版

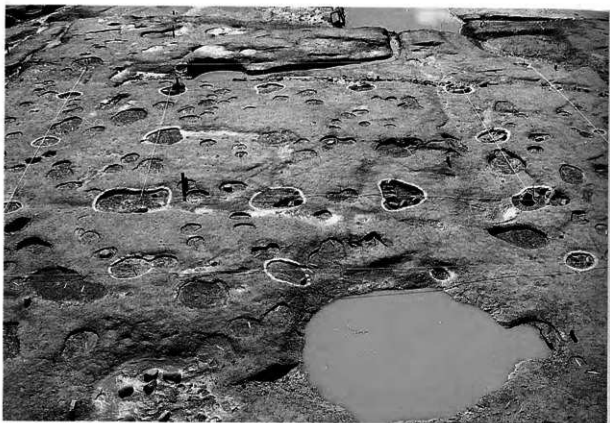


遺跡遠景（南から）

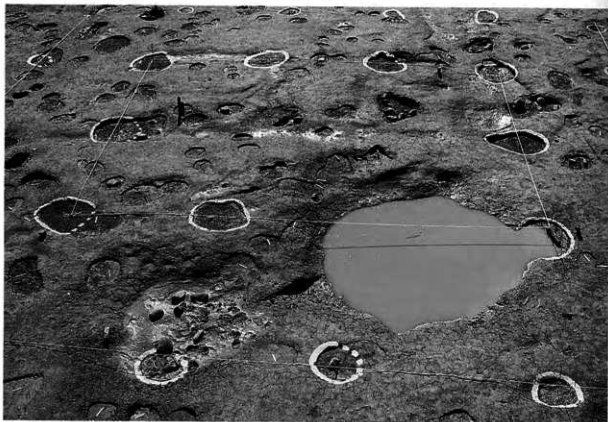


調査区上空（上が南）

写真図版1 第56次調査区航空写真



56SB1 (北から)



56SB2 (北から)

写真図版 2 56SB1・56SB2



56SE 1 検出



56SE 1 断面



56SE 1 完掘



56SE 3 検出



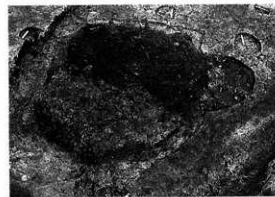
56SE 3 断面



56SE 3 断面

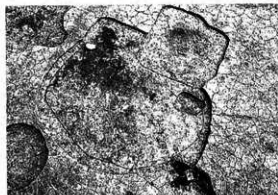


56SK 6 検出

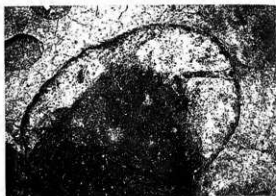


56SK 16・56SK 44 検出

写真図版 3 56SE 1・56SE 3・56SK 6・56SK 16・56SK 44



56 S K 19検出



56 S K 23検出



56 S K 25検出



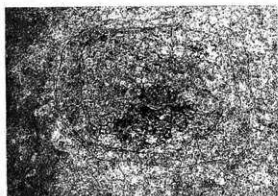
56 S K 25平面



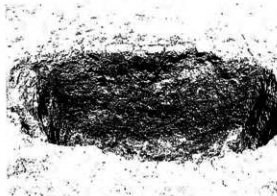
56 S K 26完撮



56 S K 26断面



56 S K 27検出



56 S K 27断面

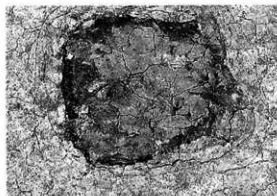
写真図版 4 56SK19・56SK23・56SK25～56SK27



56 S K 28完掘



56 S K 28断面



56 S K 29検出



56 S K 29完掘



56 S K 30検出



56 S K 30断面

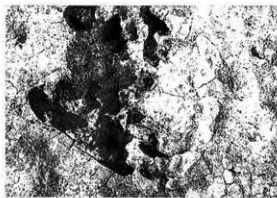


56 S K 31完掘



56 S K 31断面

写真図版 5 56SK28~56SK31



56 S K 32完掘



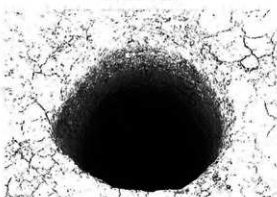
56 S K 32断面



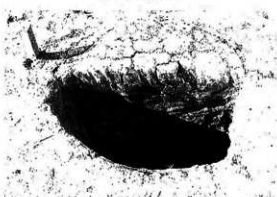
56 S K 33完掘



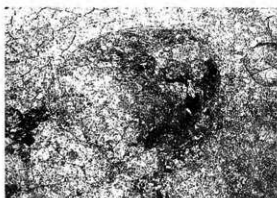
56 S K 33断面



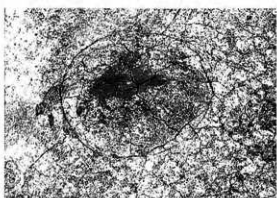
56 S K 34完掘



56 S K 34断面



56 S K 35検出



56 S K 36検出

写真図版 6 56SK32~56SK36



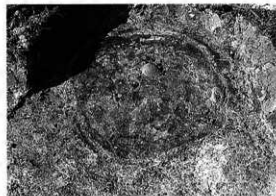
56 S K 37検出



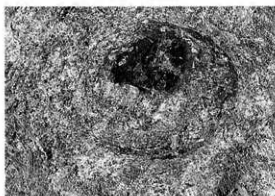
56 S K 38検出



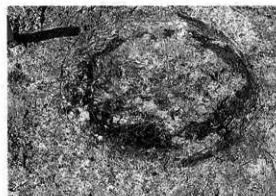
56 S K 39検出



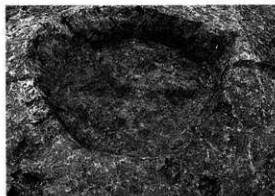
56 S K 40検出



56 S K 41検出



56 S K 42検出



56 S K 43完採

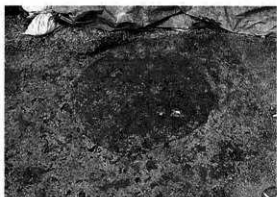


56 S K 43断面

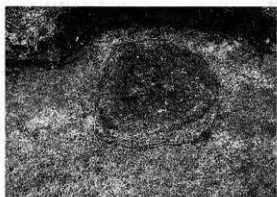
写真図版 7 56SK37~56SK43



トイレ状遺構分布状況



56 S K 51検出



56 S K 52検出



56 S K 53完掘



56 S K 53断面

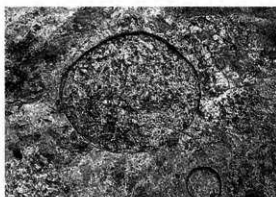
写真図版 8 56SK51～56SK53



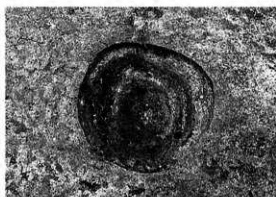
56 S K 54検出



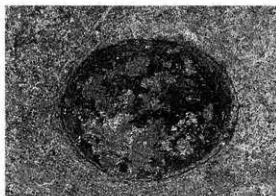
56 S K 55検出



56 S K 56検出



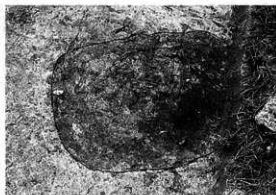
56 S K 57検出



56 S K 58検出



56 S K 59検出

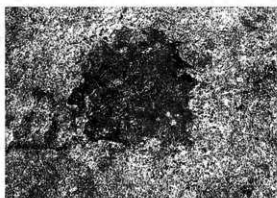


56 S K 60検出

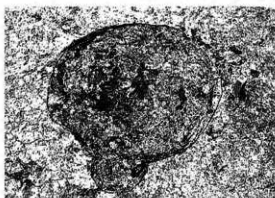


56 S K 62~56 S K 64検出

写真図版 9 56SK54~56SK60・56SK62~56SK64



56 S K 65検出



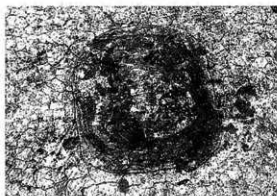
56 S K 66検出



56 S K 67完掘



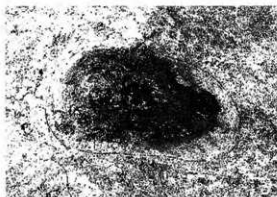
56 S K 67断面



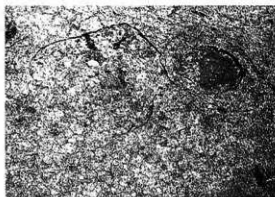
56 S K 68検出



56 S K 69検出

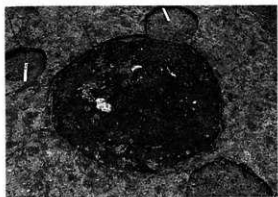


56 S K 70検出



56 S K 72・56 S K 73検出

写真図版10 56SK65~56SK70・56SK72・56SK73



56 S K 77検出



56 S K 80検出



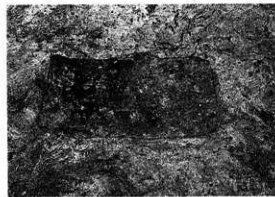
56 S K 80完掘



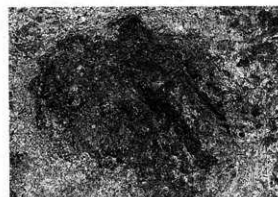
56 S K 80断面



56 S K 84断面



56 S K 85検出



56 S K 87検出



56 S K 89検出

写真図版11 56SK77・56SK80・56SK84・56SK85・56SK87・56SK89



56 S K 15検出



56 S K 90検出



56 S K 93~56 S K 96検出



56 S K 99完掘



56 S K 99断面

写真図版12 56SK15・56SK90・56SK93~56SK96・56SK99



56 S D 20・56 S D 40(北半部)



56 S D 20・56 S D 40(南半部)



56 S D 19・56 S D 20・56 S X 3 断面

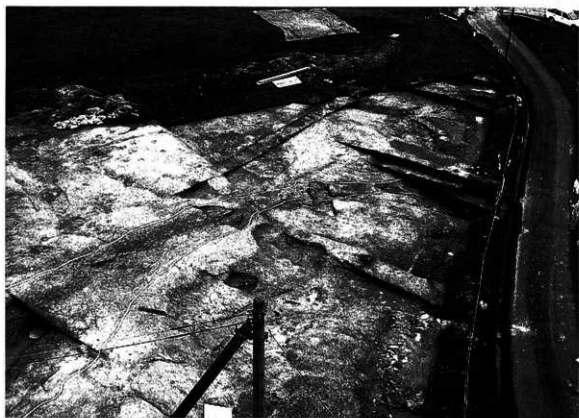


56 S D 20断面(北端部)



56 S D 20・56 S D 38断面

写真図版13 56SD19・56SD20・56SD38・56SD40・56SX3



56SD20と56SD38堀跡



56SD38堀跡断面

写真図版14 56SD20・56SD38



56SD38・56SD39堀跡 (T1)



56SD38堀跡 (T1)



56SD38堀跡 (T1)



56SD39堀跡 (T1)



56SD38・56SD39堀跡 (T2)



56SD38・56SD39堀跡 (T3)

写真図版15 56SD38・56SD39堀跡



56SD39堀跡 (T2) 断面 (北から)

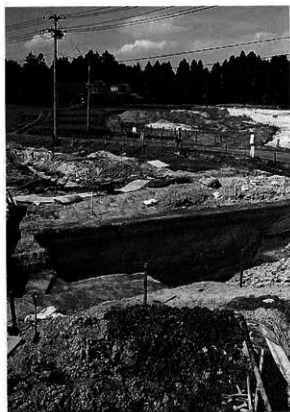


56SD39堀跡 (T2) 断面 (南から)

写真図版16 56SD39 (T2)



56SD39堀跡 (T2) 断面

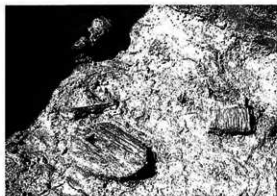


56SD39堀跡 (T2) 断面



猫間が淵 (T2) 調査状況

写真図版17 56SD39(T2)・猫間が淵(T2)



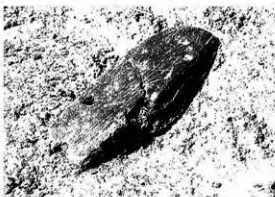
56SD38堀跡埋土



56SD39堀跡(T2)埋土



56SD39堀跡(T2)埋土



56SD39堀跡(T2)埋土



56SD39堀跡(T2)埋土



56SD39堀跡(T2)埋土



56SD39堀跡(T4)埋土



56SD39堀跡(T4)埋土

写真図版18 遺物出土状況(1)



56SD39堀跡 (T2) 埋土



56SD39堀跡 (T2) 埋土



56SD39堀跡 (T2) 埋土



猫間が淵 (T2)



猫間が淵 (T2)

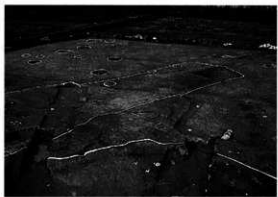


猫間が淵 (T2)



56SD37 (T3)

写真図版19 遺物出土状況(2)ほか



56SD40北端部



56SD40南端部



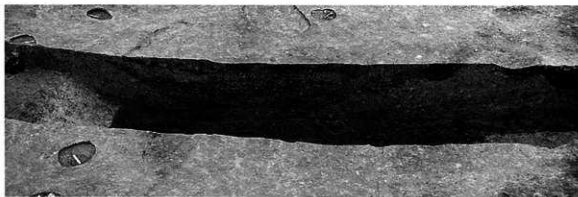
56SD20・56SD40南端部



56SD40断面 (北端部)



56SD40出土遺物



56SD40断面

写真図版20 56SD20・56SD40



56 S X 16土橋埋土(南から)



56 S X 16断面



56 S X 16断面



56 S X 16土橋埋土(北から)



56 S X 16・56 S D 40



56 S D 40断面

写真図版21 56SX16土橋・56SD40



整地層北半部トレンチ断面



整地層北半部トレンチ断面



整地層南半部トレンチ断面

写真図版22 整地層



56 S X 1 現況



56 S X 1 断面



56 S X 4 検出



56 S X 2 断面



56 S X 4 断面



56 S X 9 断面



56 S X 15 検出



焼土断面

写真図版23 その他の遺構



写真図版24 作業風景ほか



1



8



9



10



16



18



19



21



26



27



28



29



30



32



31



38

写真図版25 かわらけ(1)



39



44



46



53



51



52



54



55



56



58



62



63



73



69



74



75

写真図版26 かわらけ(2)



76



77



78



79



80



81



83



84



85



86



87



88



89



90

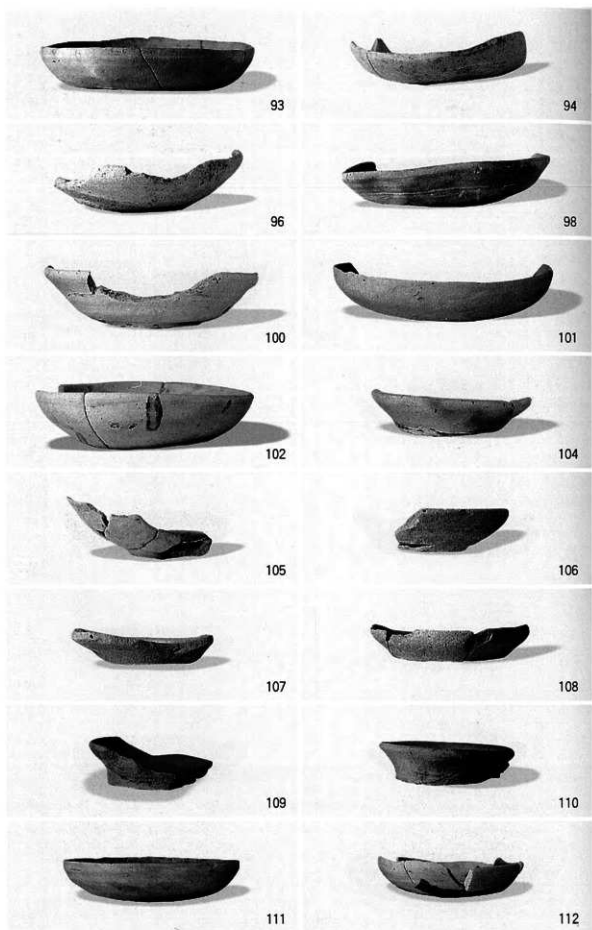


91



92

写真図版27 かわらけ(3)



写真図版28 かわらけ(4)



113



114



115



116



117



118



119



120



121



123



124



125

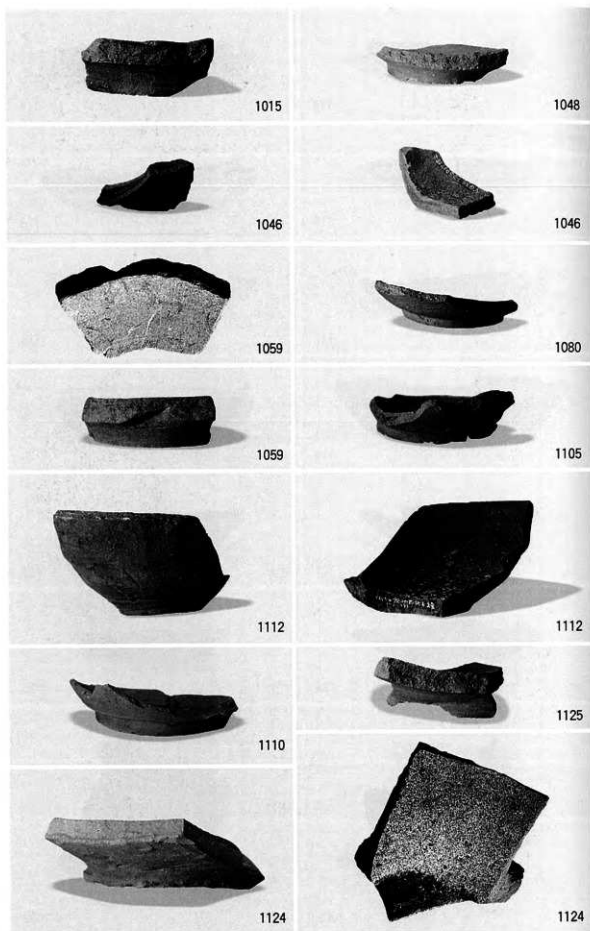


1002



1002

写真図版29 かわらけ(5)・国産陶器(1)



写真図版30 国産陶器（2）



1124



1154



1161



1001



1003



1162



1163



1164



1165



1005



1166



1004



1167



1007



1006



1008

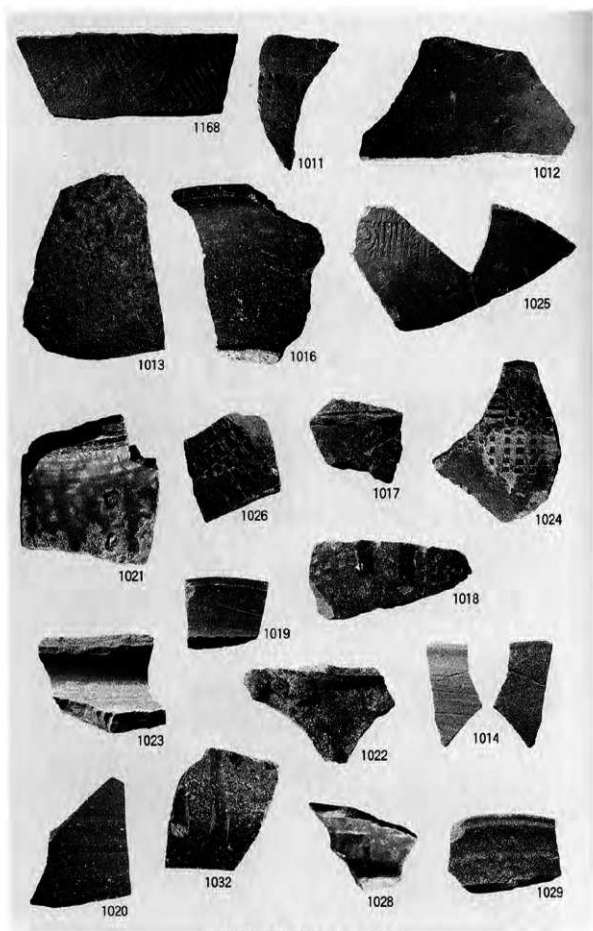


1009

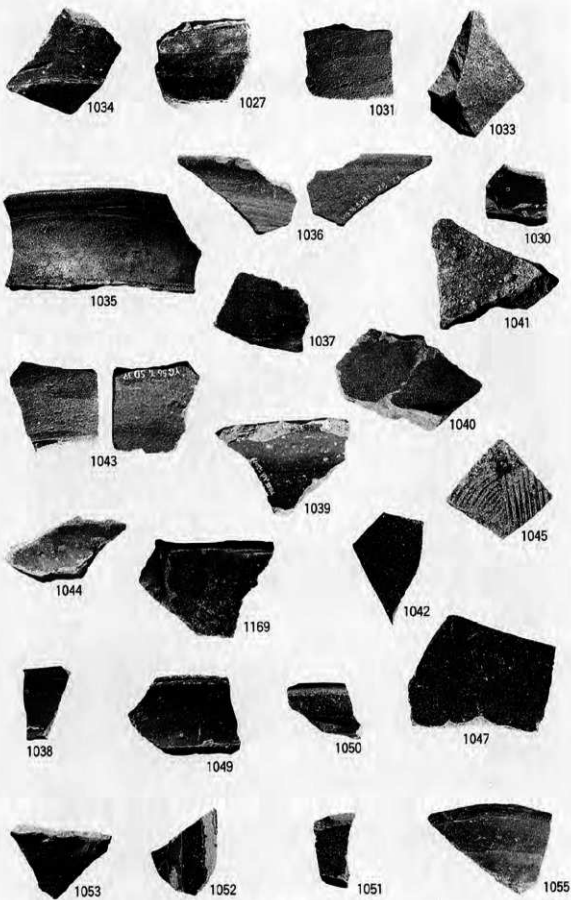


1010

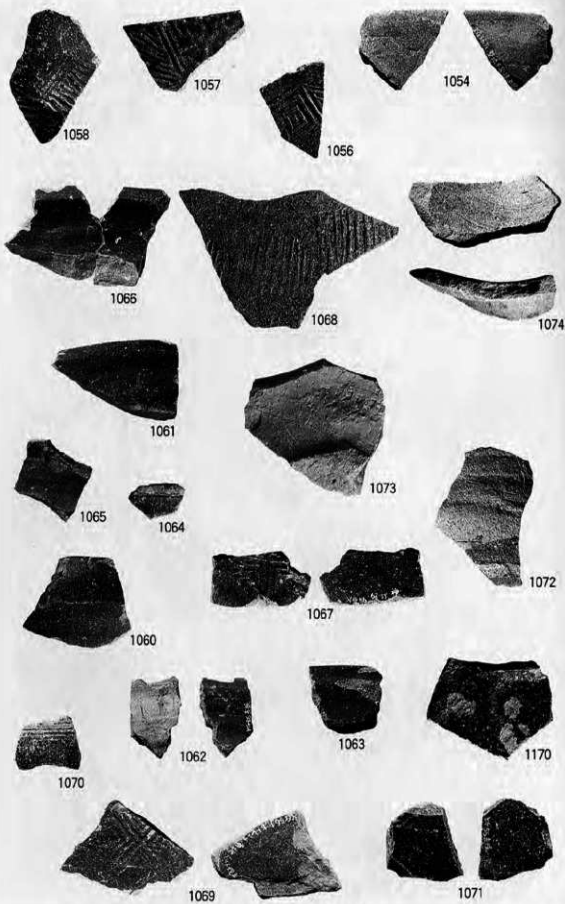
写真図版31 国産陶器(3)



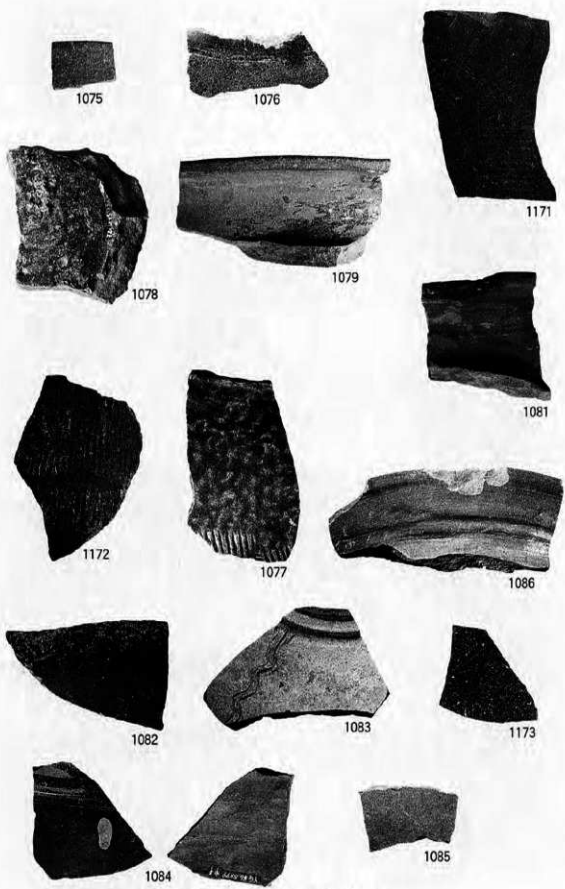
写真図版32 国産陶器（4）



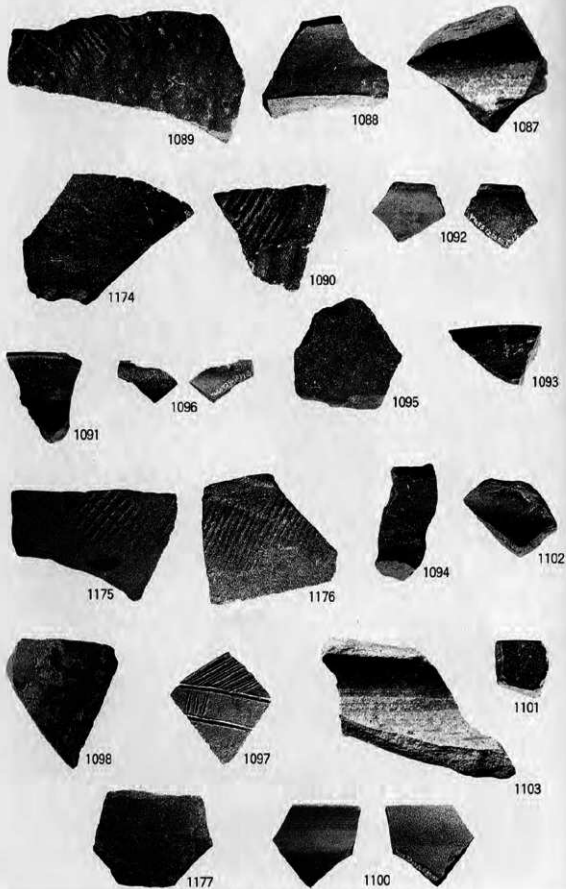
写真图版33 国産陶器(5)



写真図版34 国産陶器(6)



写真図版35 国産陶器 (7)



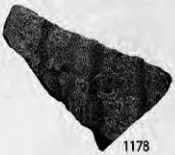
写真図版36 国産陶器(8)



1099



1106



1178



1179



1104



1111



1107



1113



1114



1180



1115



1181



1118



1117



1182



1183



1184

写真図版37 国産陶器(9)



1185



1119



1186



1187



1109



1108



1116



1121



1122

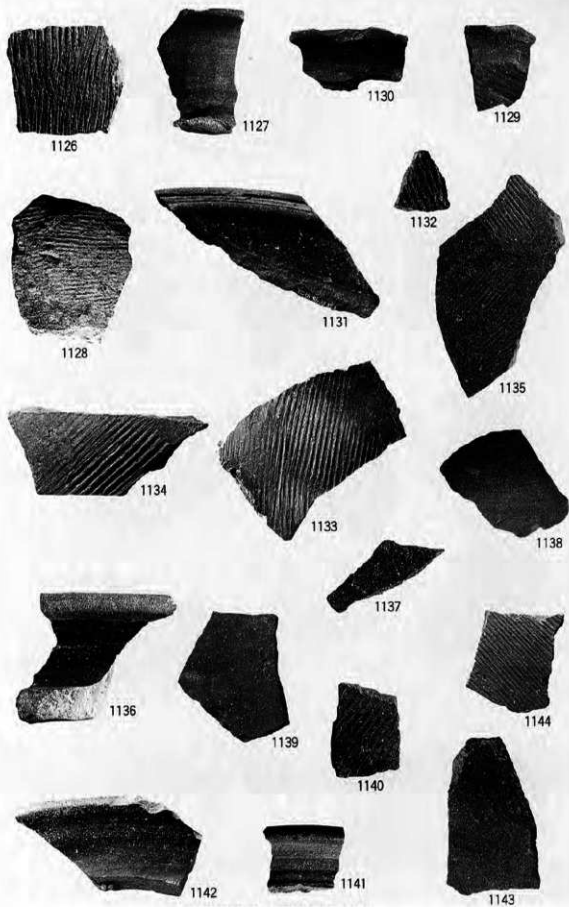


1120



1123

写真図版38 国産陶器 (10)



写真図版39 国産陶器 (11)



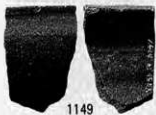
1146



1145



1147



1149



1150



1151



1152



1155



1148



1153



1156



1158



1159



1160



1157

写真図版40 国産陶器 (12)



2039



2039



2022



2022



2020



2023



2001



2003



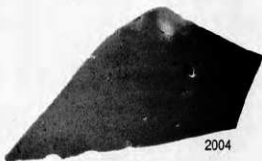
2045



2046

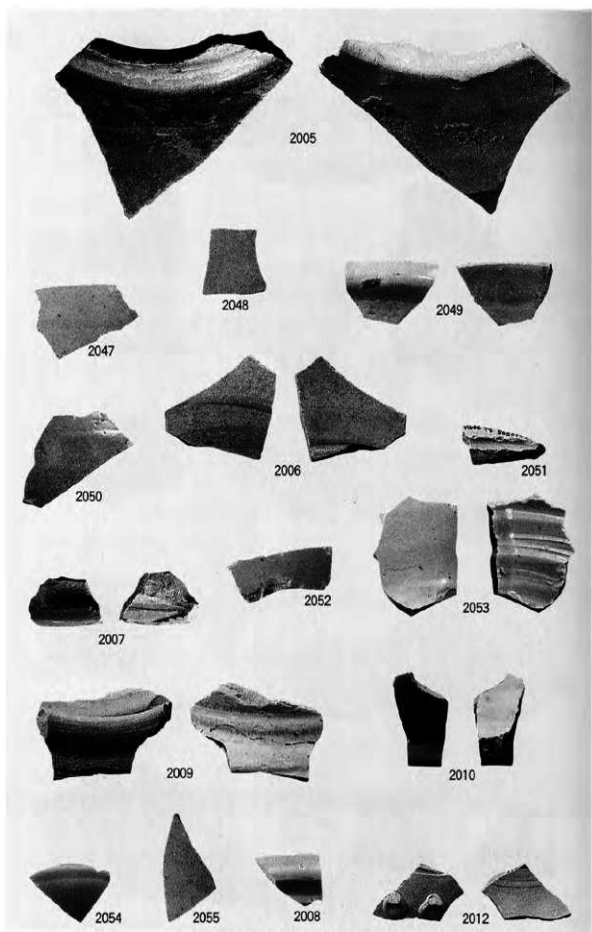


2002

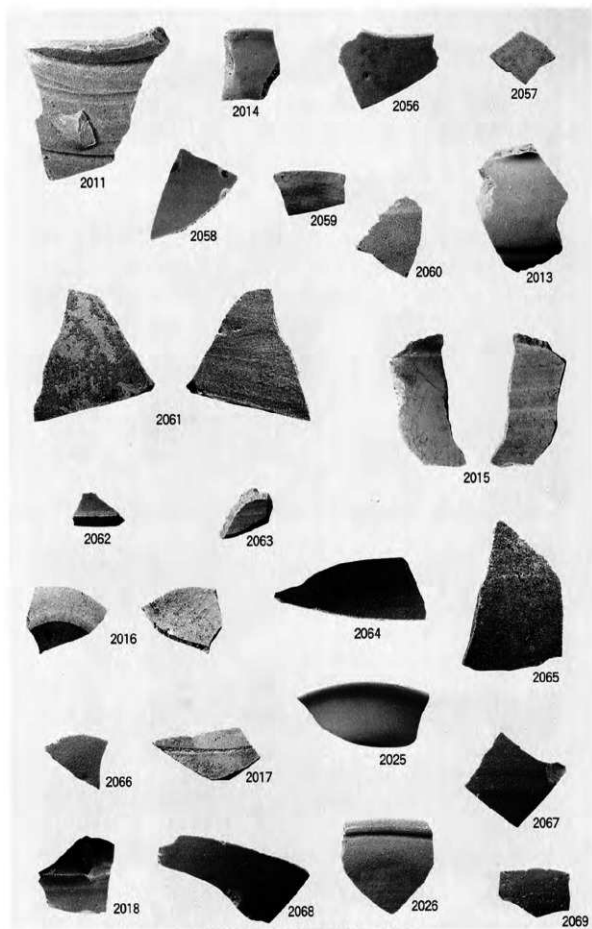


2004

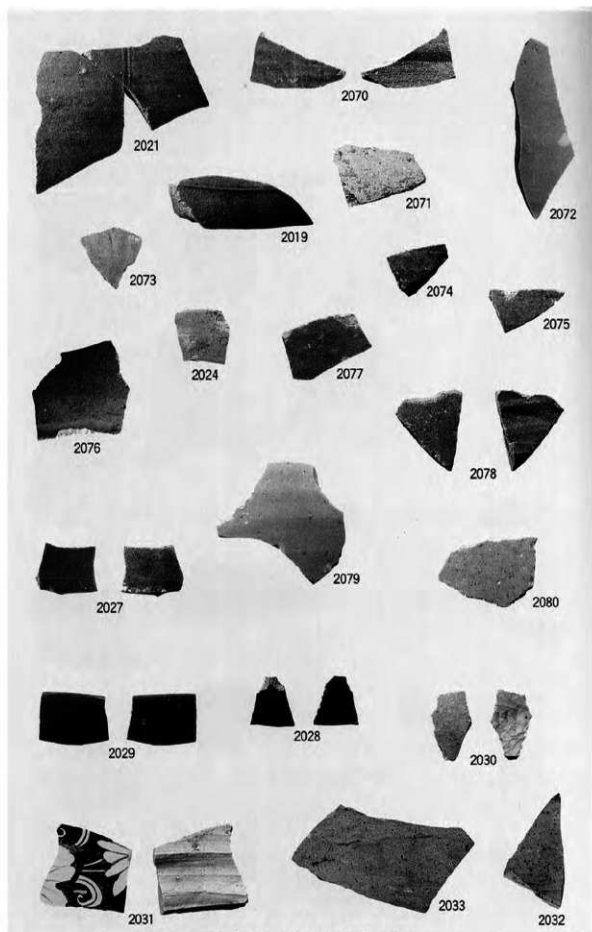
写真図版41 中国産陶磁器 (1)



写真图版42 中国産陶磁器（2）



写真图版43 中国産陶磁器(3)



写真图版44 中国産陶磁器（4）



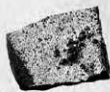
2035



2034



2037



2038



2040



2043



2042



2041



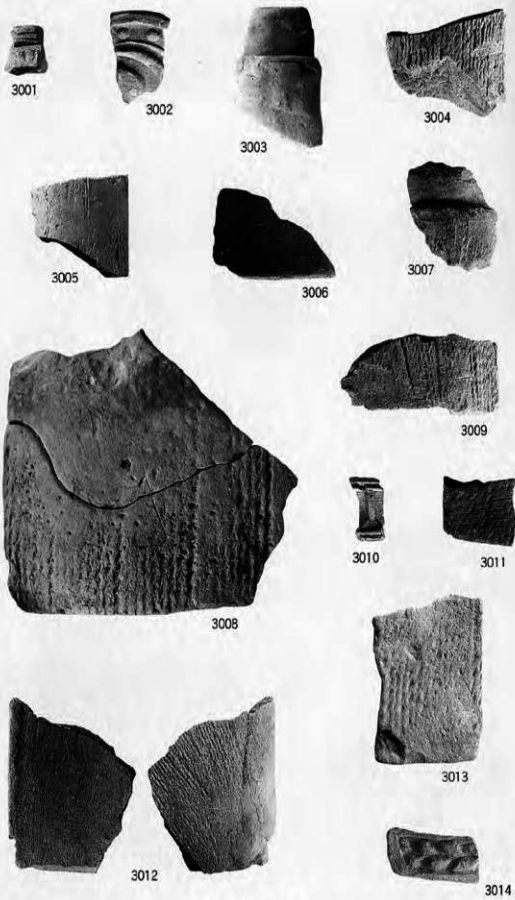
2044



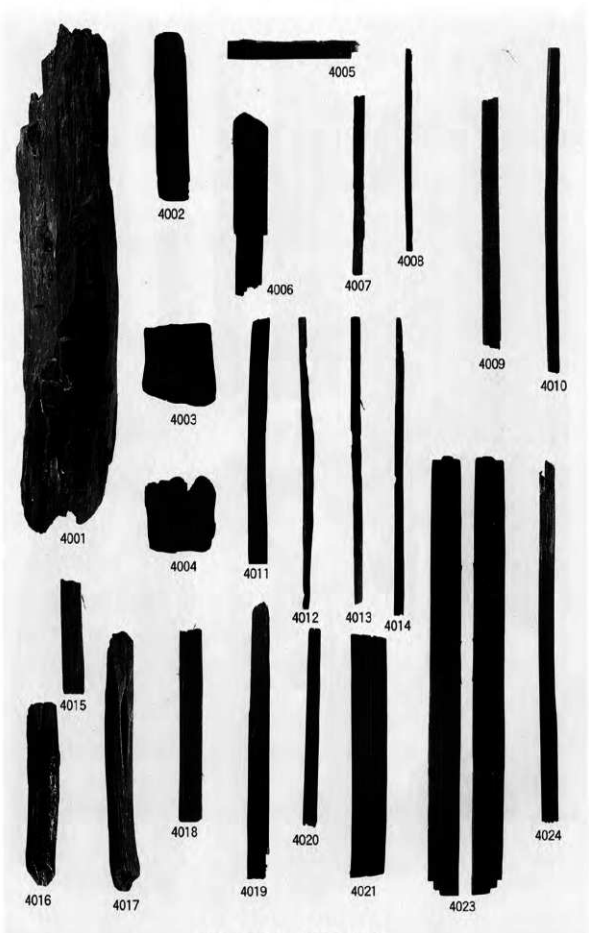
2036



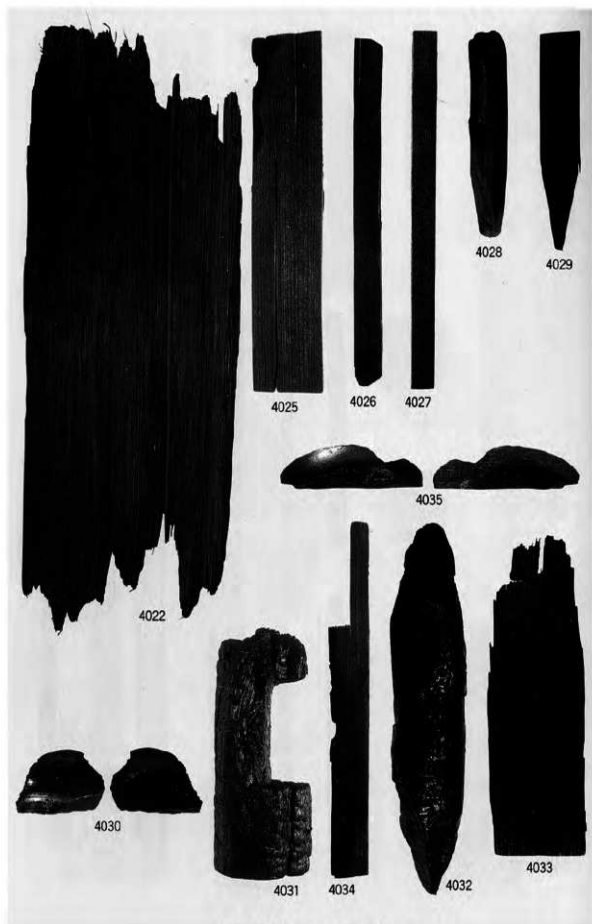
写真图版45 中国産陶磁器 (5)



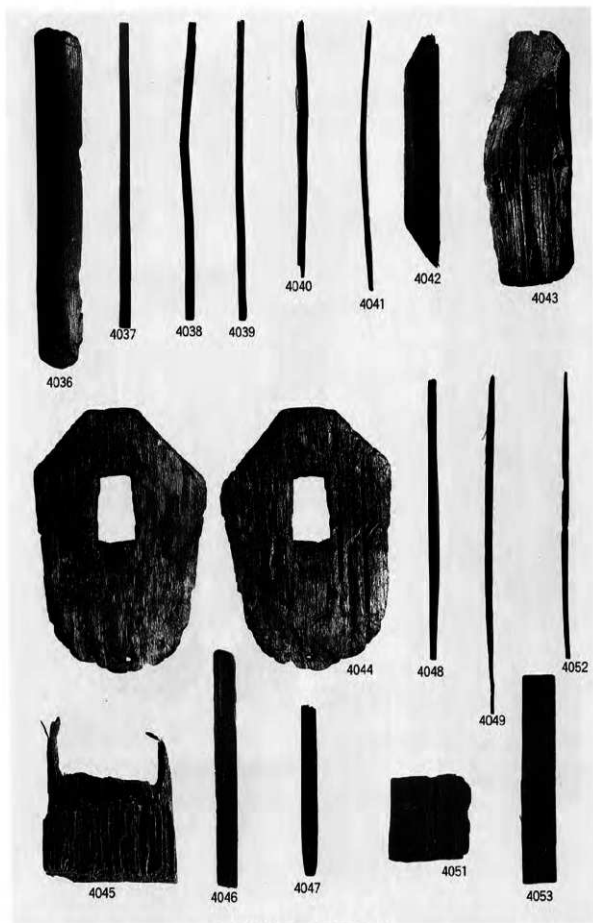
写真图版46 瓦



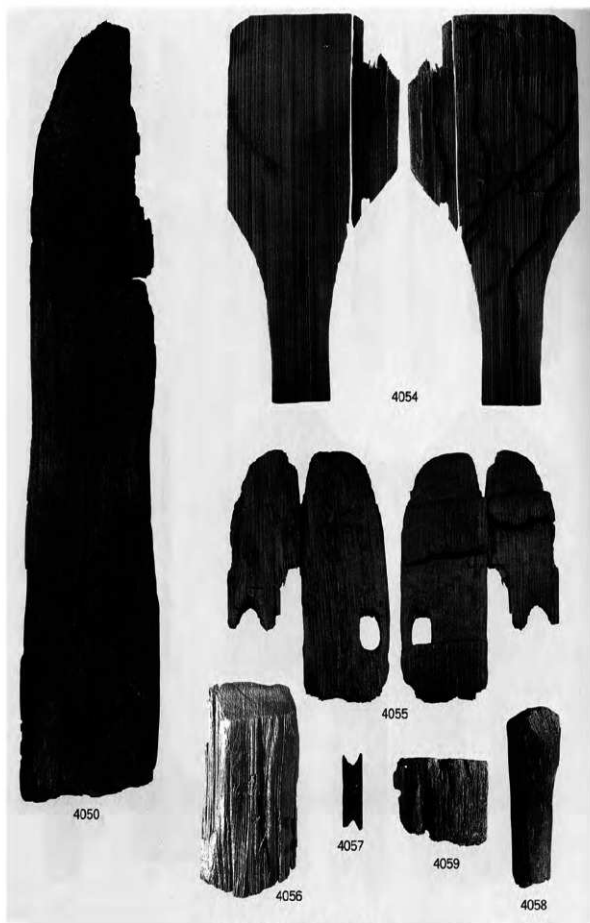
写真図版47 木製品 (1)



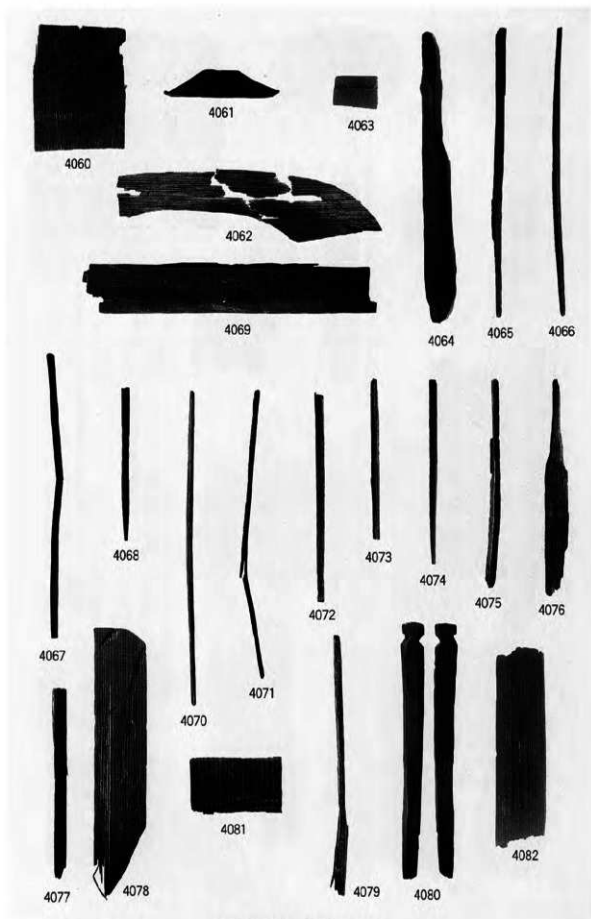
写真図版48 木製品（2）



写真図版49 木製品(3)



写真図版50 木製品(4)



写真図版51 木製品 (5)



4083



4084



4085



4086



4087



4088



4089



4095



4090



4091



4092

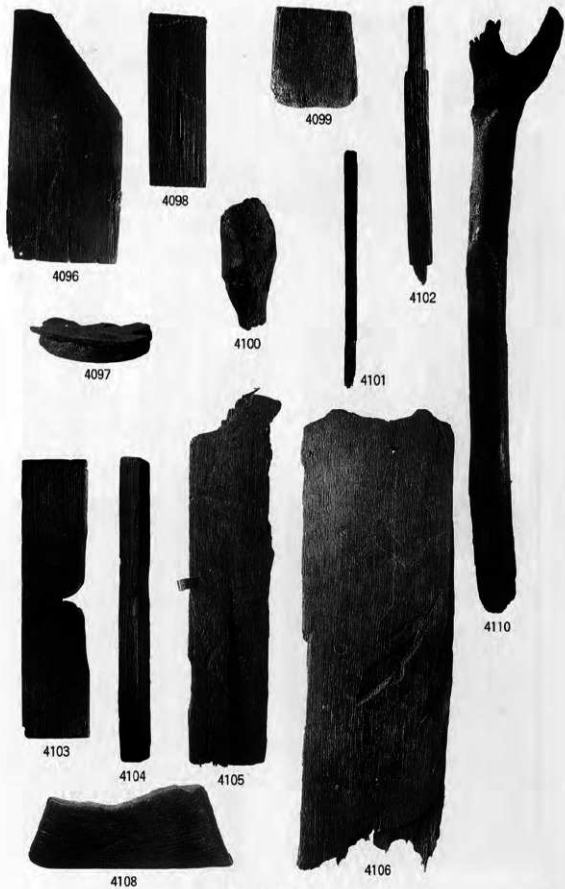


4093

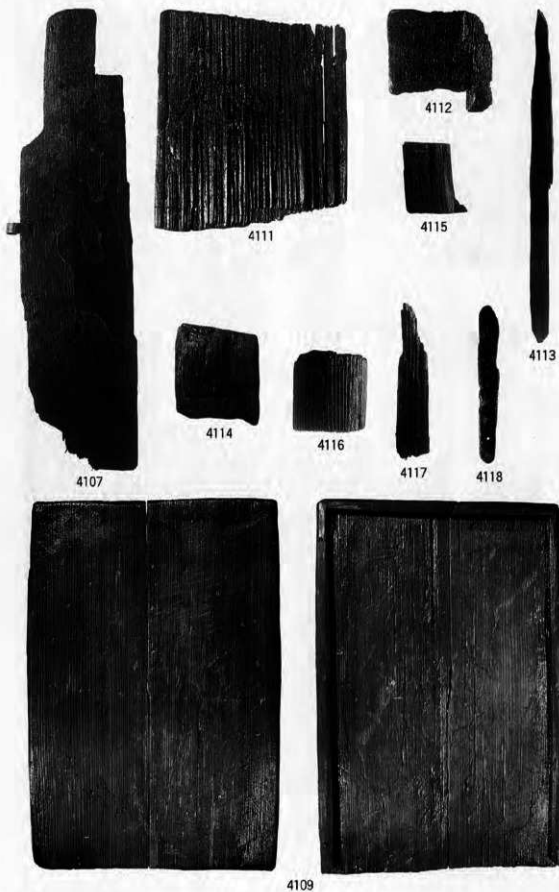


4094

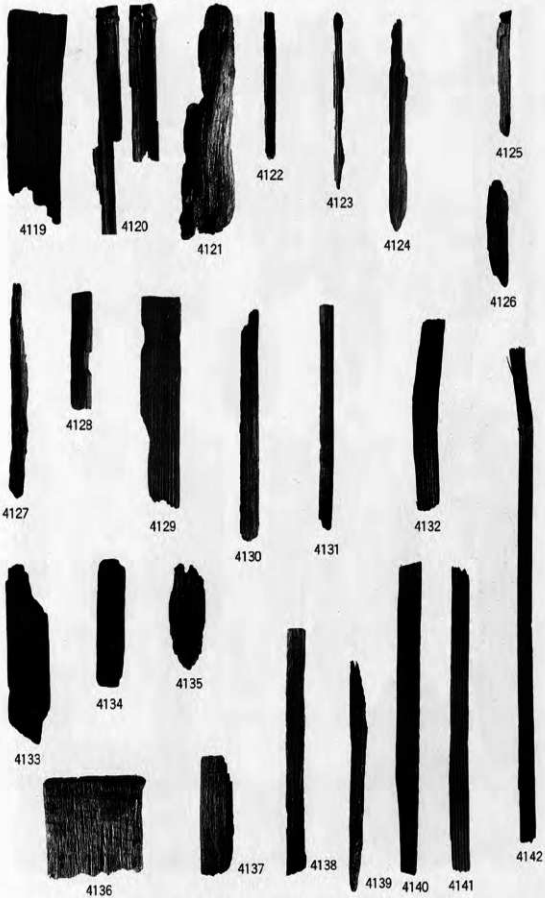
写真図版52 木製品 (6)



写真図版53 木製品 (7)



写真図版54 木製品(8)



写真図版55 木製品(9)



4143



4144



4145



4146



4147



4148



4149



4151



4152



4153



4150



4154

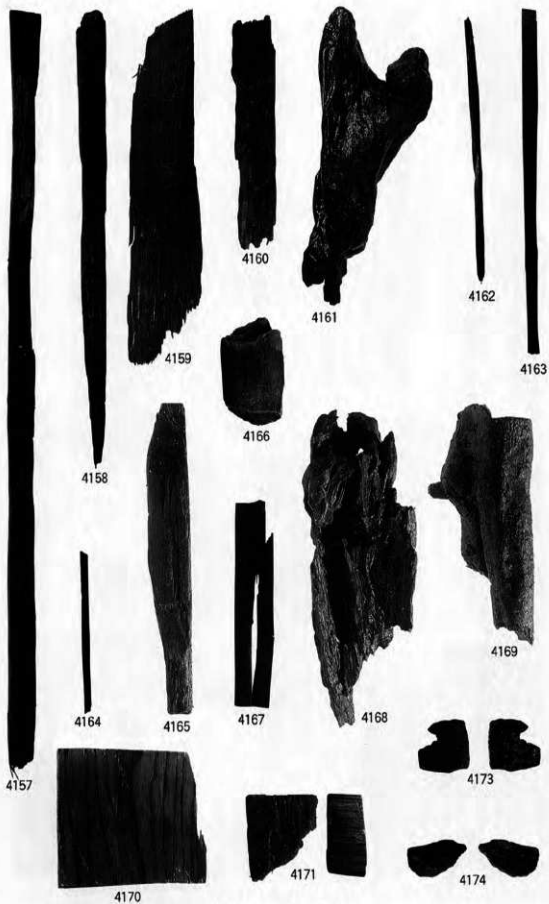


4155

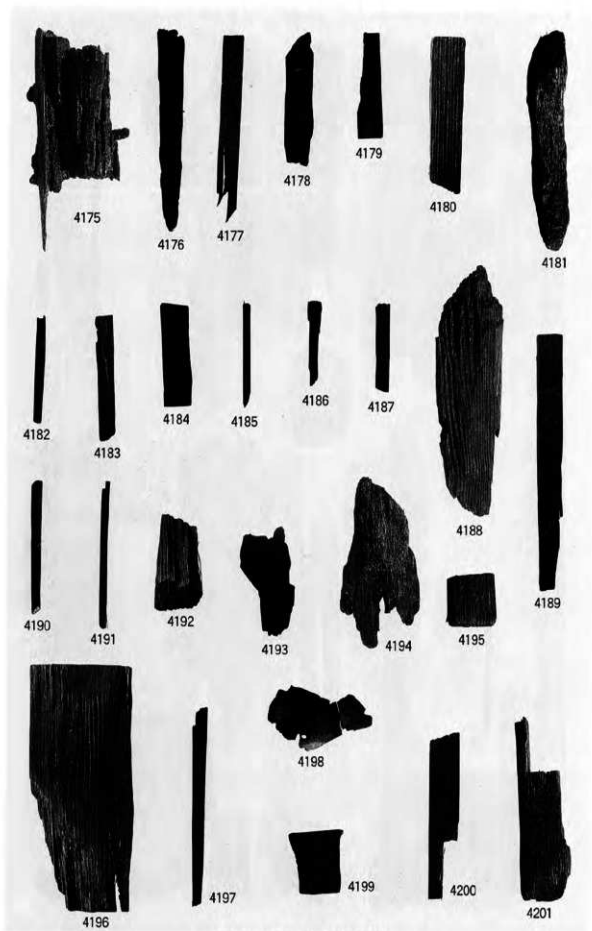


4156

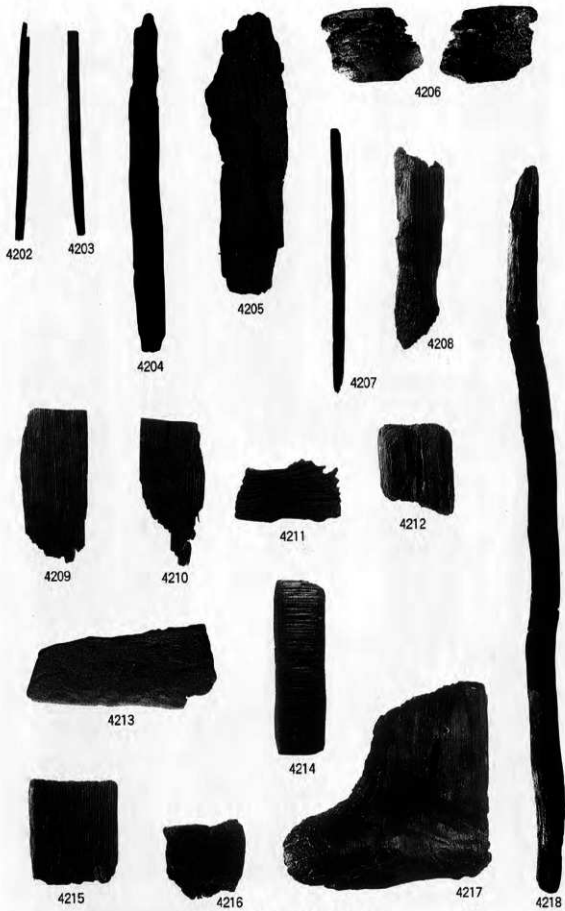
写真図版56 木製品 (10)



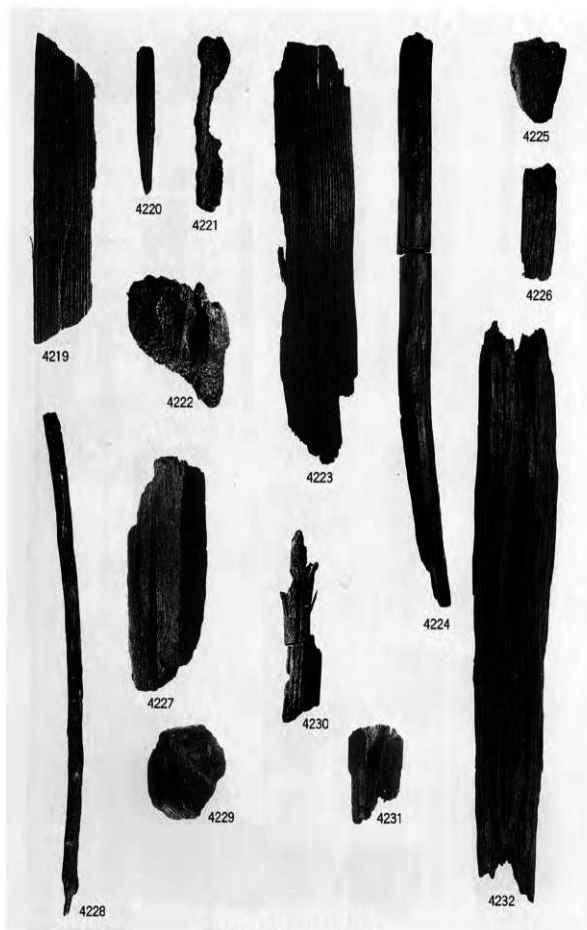
写真図版57 木製品 (11)



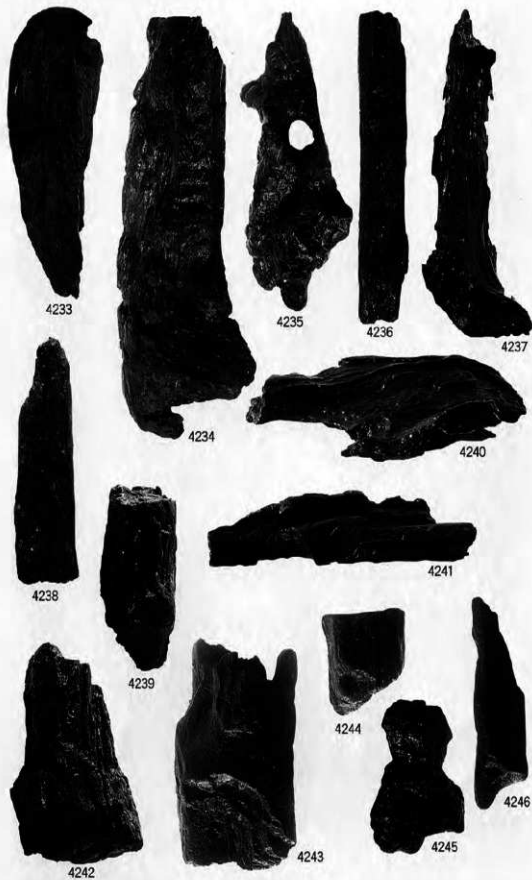
写真図版58 木製品 (12)



写真図版59 木製品 (13)



写真図版60 木製品 (14)



写真図版61 木製品 (15)



写真図版62 木製品 (16)



4261



4262



4263



4265



4264



4266



4267



4268



4269



4270



4271

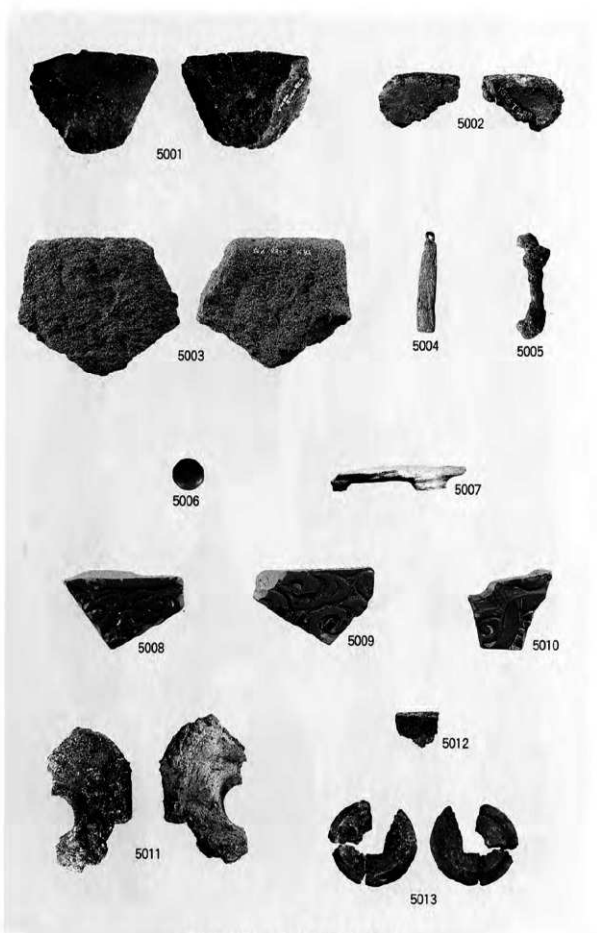


4272

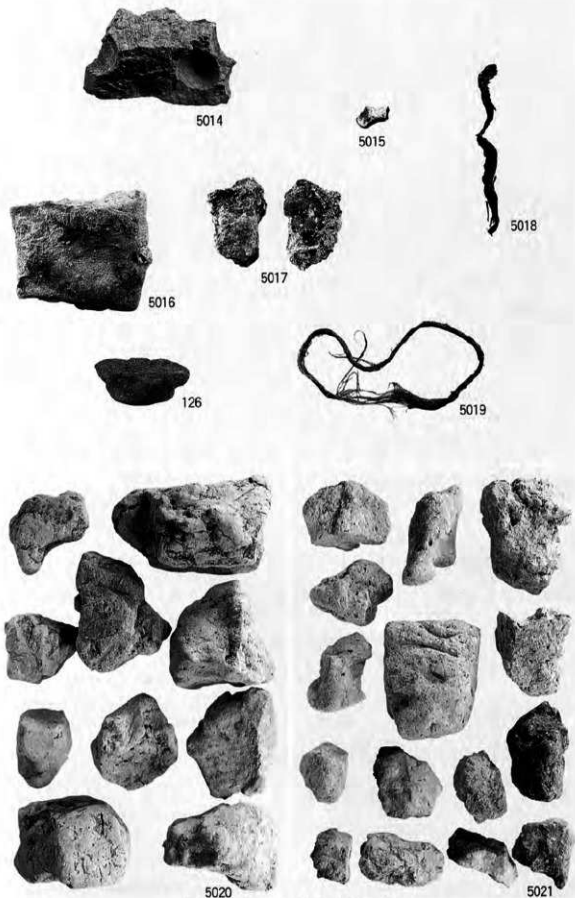


4273

写真図版63 木製品 (17)



写真図版64 その他の遺物 (1)



写真図版65 その他の遺物（2）

報告書抄録

ふりがな		ひらいずみいせきぐん やなぎのごしょいせき						
書名		平泉遺跡群 柳之御所遺跡						
副書名		第56次発掘調査概報						
巻次								
シリーズ名		岩手県文化財調査報告書						
シリーズ番号		第117集						
編著者名		斎藤邦雄 佐々木務 戸根貴之 杉沢昭太郎						
編集機関		岩手県教育委員会						
所在地		岩手県盛岡市内丸10-1						
発行年月日		2003年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ひらいずみいせきぐん やなぎのごしょいせき 柳之御所遺跡	いわてけんしゅう 岩手県西磐 いかりがほやちうけ 井郡平泉町 ひらいずみいせきぐん 平泉字柳之 ごしょ 御所126-34 ほか	03402		38度 59分 28秒	141度 7分 35秒	第56次 20020513 ～ 20021129	4000	史跡整備に 向けた内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
柳之御所遺跡	奥州藤原氏に関連する居館跡	12世紀	掘立柱建物跡 土坑 井戸跡 堀 溝跡 土橋 その他	5棟 59基 3基 3条 5条 1基 9基	かわらけ 国産陶器 中国産陶磁器 瓦 木製品 (折敷 扇など) 近世陶磁器		・ 居館の外周を巡る2条の堀跡。 [56SD38、39] ・ トイレ状遺構の集中域 [56SK26他]	
		近世以降	掘立柱建物跡 溝跡 土坑	3棟 30条 12基				
		時期不詳	土坑	28基				

岩手県文化財調査報告書 第117集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

—第56次発掘調査概報—

平成15年3月31日発行

発行 岩手県教育委員会
岩手県盛岡市内丸10-1
編集 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課
印刷 川崎印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21



柳之御所遺跡第56次調査遺構配置図(2)



柳之御所遺跡第56次調査遺構配置図(1)